瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書



2005年3月 鹿児島県大島郡 瀬戸内町教育委員会

瀬戸内町遺跡詳細分布調査書

瀬戸内町教育委員会

序文

昨年度、奄美が日本復帰をはたして 50 年目の節目の年をむかえました。本町でも様々な復帰関連の行事を行いましたが、日本復帰をはたした当時と比べてみると、社会構造の急激な変化には、目をみはるものがあります。本町でも、住宅造成や公共事業の件数が増加してきています。町民の生活が飛躍的に改善されていく中で、開発事業と文化財保護の調整が必要となる事例が増加してまいりました。

そのような事情から、瀬戸内町では、平成 15 年度より独自に町内の遺跡詳細分布調査を実施してまいりました。調査の結果、瀬戸内町にも多くの埋蔵文化財が存在している事実が解りました。本町の埋もれた歴史が解明されることにより、町民全体が地域の歴史・文化に対する理解を深めていただく事を期待しております。また、開発事業と埋蔵文化財保護をめぐる事前調整を円滑に進めていくため、本書が文化財保護における基礎資料として各関係機関で活用されるよう念願いたしております。

今回の詳細分布調査報告書は、埋蔵文化財だけでなく民俗学・近代史の面でも充実しており、多方面の研究者の方に本書の活用が期待されます。近代史の面では、近代化遺産の分布図を記載してあります。瀬戸内町には、近代化遺産が良好に残っていることが知られておりますが、平成17年度は戦後60周年ということもあり、文化財の分布調査に戦争遺跡も含めて調査を行う予定でおります。

文末ではありますが、御指導いただいた鹿児島県教育庁文化財課の先生方、調査指導を していただきました琉球大学法文学部教授の池田榮史先生、名瀬市教育委員会の高梨修先 生、助言・協力をしていただきました関係者の皆様に対して、衷心より厚く御礼申し上げ ます。

平成17年3月

瀬戸内町教育委員会 教育長 徳永 敬次

報告書抄録

ふり	が な せとうちちょういせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ											
書	名	瀬戸内	瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書									
副	事 名											
巻	次											
シリー	-ズ名	瀬戸内	可町文化則	け調査報告書								
シリー	ズ番号	1										
編著	者名	鼎	太郎									
編集	機関	瀬戸内	可町教育	委員会								
所在	主 地	₹89	4-15	92 大島郡瀬戸	三内町古仁屋船津	±23						
発行生	F月 日	平成 1	7 (2	005)年3月3	1日							
	ード	北緯	宙級	調本期間	調査面積	調査原因						
市町村			Din 目 対 [F]		则 且							
種 別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事												

例 言

- 1 本書は、瀬戸内町教育委員会が、平成15(2003)年度から実施継続している「瀬戸内町遺跡詳細分布調査」の調査成果に関する正式報告である。
- 2 当該分布調査は、瀬戸内町教育委員会が独自に実施継続しているものである。
- 3 本書で使用した地形図は、瀬戸内町所有のものを複製転用したものである。
- 4 瀬戸内町は、集落数が多く、集落規模に差があるため、各集落別に遺跡所在箇所を示している周辺地形図の縮尺は、統一されていない。
- 5 遺跡分布図は、遺跡の範囲を確認しやすいように実線で引いたが、これは表面採集調査で確認された範囲であり、実際の発掘調査などによりその範囲が変動する可能性がある。また、未調査地区も存在するため、開発事業については遺跡範囲内外にかかわらず調整が必要である。
- 6 本書の編集は、鼎丈太郎(瀬戸内町教育委員会嘱託員)が担当した。本書の執筆は、 主として鼎丈太郎が担当したが、第4章第6節の既刊文献より作成した軍事施設・配備 部隊一覧作成は河津梨絵(瀬戸内町教育委員会臨時職員)が、第5章第1節の遺物散布 地の民俗空間の箇所は、町健次郎(瀬戸内町教育委員会)が執筆した。
- 7 本書における写真撮影は主として鼎が担当した、挿図作成は主として鼎が担当したが、 第4章第6節の既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧の挿図は、河津が担当し、 第5章第1節の遺物散布地の民俗空間の写真は、町が担当した。
- 8 分布調査および報告書作成に際して、池田榮史氏(琉球大学法文学部教授)、髙梨修氏(名瀬市教育委員会)、池村茂氏(徳之島町文化財保護審議会委員、工房海彩代表)、前田芳之氏(瀬戸内町文化財保護審議会会長)、清さつき氏(名瀬市教育委員会嘱託員)、上田伊津夫(諸鈍シバヤ芸能保存会会長)の指導、助言・協力をいただいた。
- 9 瀬戸内町内の埋蔵文化財包蔵地ならびに他の文化財の保護・保存については瀬戸内町教育委員会で対応している。諸開発事業(公共・個人)を計画する場合、事前に瀬戸内町教育委員会へ文化財の有無についての確認が必要である。
- 10 当該分布調査に係わる調査記録や採集遺物等の一切は、瀬戸内町立図書館・郷土館(瀬戸内町教育委員会)で保管されている。

本文目次

序 文

報告書抄録

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

表目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	瀬戸内町の概況	2
第3章	調査要綱	3
第1節	調査組織	3
第2節	調査方法	4
第4章	調査成果	5
第1節	調査概要	5
第2節	古仁屋地区	8
第3節	西方地区	32
第4節	実久地区	48
第5節	鎮西地区	72
第6節	既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧	114
第5章	考 察	124
第1節	遺物散布地の民俗空間	124
第2節	瀬戸内町における遺跡の立地について	135
第6章	総 括	145

謝辞

挿図目次

第36図 鎮西地区遺跡分布図 第37図 花富ヒラタ遺跡位置図

第1図	瀬戸内町位置図	第38図	伊子茂ナカサト遺跡位置図
第2図	瀬戸内町の地区区分	第39図	於斉集落遺跡位置図
第3図	瀬戸内町遺跡分布図	第40図	押角ムラウチ遺跡位置図
第4図	古仁屋地区遺跡分布図	第41図	勝能サト遺跡位置図
第5図	嘉徳アサト遺跡位置図	第42図	諸数集落遺跡位置図
第6図	嘉徳集落遺跡位置図	第43図	生間ミタ遺跡位置図
第7図	節子集落遺跡位置図	第44図	渡連ムラウチ遺跡位置図
第8図	網野子サト遺跡位置図	第45図	渡連アンキャバ遺跡位置図
第9図	勝浦集落遺跡位置図	第46図	諸鈍トクハマ遺跡位置図
第10図	伊須集落遺跡位置図	第47図	諸鈍城跡位置図
第11図	嘉鉄カイツ遺跡位置図	第48図	諸鈍クリ遺跡位置図
第12図	蘇刈集落遺跡位置図	第49図	諸鈍カネク遺跡位置図
第13図	嘉鉄サト遺跡位置図	第50図	諸鈍サト遺跡位置図
第14図	清水集落遺跡位置図	第51図	野見山オオサト遺跡位置図
第15図	手安集落遺跡位置図	第52図	秋徳集落遺跡位置図
第16図	西方地区遺跡分布図	第53図	請阿室集落遺跡位置図
第17図	古志サト遺跡位置図	第54図	池地アガンマ遺跡位置図
第18図	久慈イメ遺跡位置図	第55図	池地オーコーバリ遺跡位置図
第19図	久慈マエダ遺跡位置図	第56図	与路集落遺跡位置図
第20図	久慈集落遺跡位置図	第57図	瀬戸内町戦跡分布図(全体図)
第21図	管鈍集落遺跡位置図	第58図	瀬戸内町戦跡分布図(別記分)
第22図	西古見城跡位置図	第59図	瀬戸内町遺跡分布図(縄文時代相
第23図	西古見集落遺跡位置図		当期)
第24図	実久地区遺跡分布図	第60図	瀬戸内町遺跡分布図(弥生時代~
第25図	実久集落遺跡位置図		古墳時代相当期)
第26図	芝タンマ遺跡位置図	第61図	瀬戸内町遺跡分布図(飛鳥時代~
第27図	芝集落遺跡位置図		平安時代前期相当期)
第28図	薩川集落遺跡位置図	第62図	瀬戸内町遺跡分布図(平安時代後
第29図	瀬武サト遺跡位置図		期~江戸時代相当期)
第30図	阿多地イバタ遺跡位置図	第63図	瀬戸内町遺跡立地模式図
第31図	須子茂集落遺跡位置図	第64図	瀬戸内町における類須恵器完形品
第32図	武名チノウラ遺跡位置図		出土分布図
第33図	俵サト遺跡位置図		
第34図	瀬相ムラウチ遺跡位置図		
第35図	西阿室集落遺跡位置図		

図版目次

1	瀬戸内町文化財保護審議会調査風景(於斉)	38	嘉鉄サト遺跡遠景
2	嘉徳アサト遺跡・嘉徳集落遺跡遠景	39	嘉鉄サト遺跡遺物散布地
3	嘉徳アサト遺跡	40	嘉鉄サト遺跡採集資料
4	嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)	41	清水集落遺跡遠景
5	嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)	42	清水集落遺跡遺物散布地
6	嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)	43	清水集落遺跡採集資料
7	嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)	44	手安集落遺跡遠景
8	嘉徳集落遺跡採集資料	45	手安集落遺跡遺物散布地(オドン)
9	嘉徳集落遺跡採集資料	46	手安集落遺跡遺物散布地
10	嘉徳集落遺跡遠景	47	手安集落遺跡採集資料
11	節子集落遺跡遠景	48	古志サト遺跡遺物散布地(ミャー)
12	節子集落遺跡遺物散布地(ミャー)	49	古志集落調査風景
13	節子集落遺跡採集資料	50	古志サト遺跡採集資料
14	節子集落伝世品(郷土館所蔵)	51	久慈イメ遺跡遺物散布地
15	節子集落伝世品(個人蔵)	52	久慈イメ遺跡遺物散布地(老山家)
16	節子集落伝世品(個人蔵)	53	<u> 久慈イメ遺跡採集資料</u>
17	網野子サト遺跡遠景	54	久慈マエダ遺跡遺物散布地
18	網野子サト遺跡遺物散布地(ミャー)	55	久慈マエダ 遺跡 採集資料
19	網野子サト遺跡調査風景	56	久慈集落遺跡遠景
20	網野子サト遺跡採集資料	57	久慈集落遺跡採集資料
21	勝浦集落遺跡遠景	58	管鈍集落遺跡遠景
22	勝浦集落遺跡遺物散布地	59	管鈍集落遺跡遺物散布地
23	勝浦集落遺跡遺物散布地(トネヤ)	60	管鈍集落遺跡採集資料
24	勝浦集落遺跡採集資料	61	西古見城跡遠景
25	伊須集落遺跡遺物散布地(ミャー)	62	西古見集落遺跡遠景
26	伊須集落遺跡調査風景	63	西古見集落遺跡
27	伊須集落遺跡採集資料	64	西古見集落遺跡採集資料
28	伊須集落遺跡採集資料	65	西古見集落遺跡採集資料(フイゴ)
29	船にて調査地へ向う(琉球大学池田教授調	66	西古見集落遺跡採集資料(貝輪)
	查指導)	67	実久集落遺跡遠景
30	嘉鉄カイツ遺跡遠景	68	実久集落遺跡遺物散布地
31	嘉鉄カイツ遺跡遺物散布地	69	実久集落遺跡遺物散布地(ミャー)
32	嘉鉄カイツ遺跡採集資料(郷土館所蔵)	70	実久集落遺跡(実久三次郎神社)
33	嘉鉄カイツ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)	71	実久集落遺跡採集資料
34	蘇刈集落遺跡遠景	72	実久集落遺跡採集資料
35	蘇刈集落遺跡遺物散布地	73	芝タンマ遺跡遠景
36	蘇刈集落遺跡採集資料	74	芝タンマ遺跡遺物散布地
37	嘉鉄集落遠景	75	芝タンマ遺跡採集資料

76	芝集落遺跡遠景	116	押角ムラウチ遺跡遠景
77	芝集落遺跡遺物散布地(ミャー)	117	押角ムラウチ遺跡遺物散布地
78	芝集落遺跡遺物散布地(アシャゲ)	118	押角ムラウチ遺跡採集資料
79	芝集落遺跡採集資料	119	勝能サト遺跡遠景
80	薩川集落遺跡遠景	120	勝能サト遺跡遺物散布地
81	薩川集落遺跡遺物散布地(ミャー)	121	勝能サト遺跡採集資料
82	薩川集落遺跡採集資料	122	諸数集落遺跡遠景
83	瀬武サト遺跡遺物散布地(旧家武家)	123	諸数集落遺跡採集資料
84	瀬武サト遺跡遺物散布地(アシャゲ)	124	諸数集落遺跡採集資料
85	瀬武サト遺跡採集資料	125	生間ミタ遺跡遠景
86	阿多地イバタ遺跡遠景	126	生間ミタ遺跡遺物散布地
87	阿多地イバタ遺跡遺物散布地(ミャー)	127	生間ミタ遺跡採集資料
88	阿多地イバタ遺跡採集資料	128	渡連ムラウチ遺跡遠景
89	須子茂海岸(請島・与路島・徳之島・須子	129	渡連ムラウチ遺跡遺物散布地
	茂離)	130	渡連ムラウチ遺跡採集資料
90	須子茂集落遺跡遠景	131	渡連ムラウチ遺跡採集資料 (ゴホウラ)
91	須子茂集落遺跡遺物散布地(カミヤ跡地)	132	渡連アンキャバ遺跡(郷土館所蔵)
92	須子茂集落遺跡採集資料	133	渡連アンキャバ遺跡遺物散布地 (ミャー)
93	須子茂集落伝世品 (郷土館所蔵)	134	渡連アンキャバ遺跡露出部分
94	武名チノウラ遺跡遠景	135	渡連アンキャバ遺跡採集資料
95	武名チノウラ遺跡採集資料	136	渡連アンキャバ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)
96	俵サト遺跡遠景	137	諸鈍トクハマ遺跡遠景
97	俵サト遺跡遺物散布地	138	諸鈍トクハマ遺跡遺物散布地(神社御神体)
98	俵サト遺跡遺物散布地 (ミャー)	139	諸鈍トクハマ遺跡採集資料
99	俵サト遺跡採集資料	140	諸鈍トクハマ遺跡採集資料
100	瀬相ムラウチ遺跡遠景	141	諸鈍城跡遠景
101	瀬相ムラウチ遺跡遺物散布地(ミャー)	142	諸鈍城跡調査風景(ファームテ)
102	瀬相ムラウチ遺跡採集資料	143	諸鈍城跡調査風景
103	西阿室集落遺跡遠景	144	諸鈍城跡調査風景
104	西阿室集落遺物散布地(ミャー)	145	諸鈍クリ遺跡遠景
105	西阿室集落遺跡採集資料	146	諸鈍クリ遺跡遺物散布地(大屯神社)
106	花富ヒラタ遺跡遠景	147	諸鈍クリ遺跡採集資料
107	花富ヒラタ遺跡遺物散布地(ミャー)	148	諸鈍カネク遺跡遠景
108	花富ヒラタ遺跡採集資料	149	諸鈍カネク遺跡遺物散布地(旧家林家)
109	伊子茂ナカサト遺跡調査風景	150	諸鈍カネク遺跡遺物散布地(ミャー)
110	伊子茂ナカサト遺跡遺物散布地(旧家西家)	151	諸鈍カネク遺跡採集資料
111	伊子茂ナカサト遺跡採集資料	152	諸鈍サト遺跡遺物散布地
112	伊子茂ナカサト遺跡採集資料	153	諸鈍サト遺跡採集資料
113	伊子茂ナカサト遺跡採集資料	154	野見山オオサト遺跡遠景
114	於斉集落遺跡遺物散布地	155	野見山オオサト遺跡遺物散布地
115	於斉集落遺跡採集資料	156	野見山オオサト遺跡採集資料

- 157 秋徳集落遺跡遺物散布地
- 158 秋徳集落遺跡採集資料
- 159 請阿室集落遺跡遠景
- 160 請阿室集落遺跡遺物散布地
- 161 請阿室集落遺跡採集資料
- 162 請阿室集落遺跡採集資料 (ゴホウラ)
- 163 琉球大学地学巡検(チャート露出地点)
- 164 文化財保護審議会大山調查風景
- 165 池地アガンマ遺跡遺物散布地
- 166 池地集落伝世品(郷土館所蔵)
- 167 池地アガンマ遺跡採集資料(ゴホウラ)
- 168 池地アガンマ遺跡採集資料
- 169 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
- 170 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
- 171 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
- 172 与路集落遺跡遠景
- 173 与路集落遺跡遺物散布地
- 174 与路集落遺跡採集資料
- 175 与路集落遺跡採集資料
- 176 与路集落遺跡採集資料 (ゴホウラ)
- 177 武名のミャー
- 178 武名のシマゴスガナシ
- 179 嘉入のトネヤ
- 180 三浦のアシャゲ
- 181 須子茂の神道
- 182 須子茂の神山(中央の小高い山)
- 183 阿多地の浜辺
- 184 俵のゥボツガナシ
- 185 伊是名 宗家の庭の神アサギ (仲田)
- 186 伊是名 宗家の庭の神アサギ (勢理客)
- 187 名瀬市小湊「マー」の広場(隣接する中央 宅地が「按司屋敷」)
- 188 手安のオドン

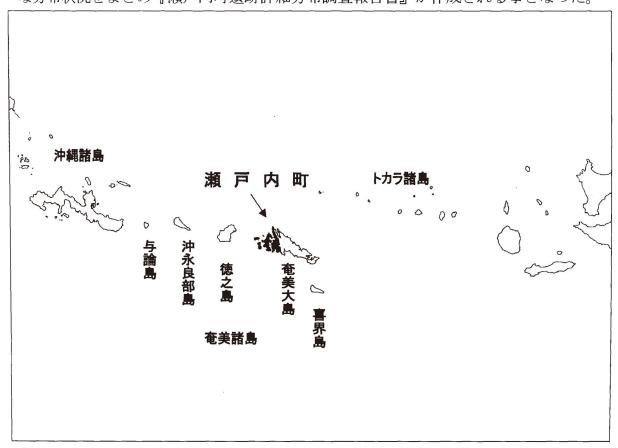
表目次

- 表 1 確認遺跡一覧表
- 表2 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊 一覧表
- 表 3 瀬戸内町遺跡立地一覧表

第1章 調査に至る経緯

近年、奄美諸島の各地で開発事業が相次いでおり、その規模も拡大してきている。その 為、開発事業に伴う発掘調査も増大し、重要な遺跡が次々と発見されてきている。瀬戸内 町も例外ではなく、町内各所で開発事業が行われている。しかし、瀬戸内町の埋蔵文化財 は、嘉徳遺跡という重要な遺跡があるにもかかわらず、一般的には認知度は低いのが現状 である。そうした状況から埋蔵文化財や文化財に影響のある開発事業も出現してきており、 瀬戸内町教育委員会としても開発事業に対応し埋蔵文化財の周知徹底・保護・活用できる よう、町内の埋蔵文化財詳細資料の作成が急務となった。

そこで、瀬戸内町教育委員会では、平成 15 (2003) 年度から町内の埋蔵文化財詳細分布調査を実施継続してきている。調査対象地区としては、緊急に開発事業が計画される可能性の高い、集落とその周辺部に絞り込み調査を実施した。平成 16 (2004) 年度までの調査の進行状況は、調査対象地区の約七割である。瀬戸内町は、面積が広大であり、加計呂麻島や請島、与路島などの離島も抱えているため、思うように調査が進まず、調査対象地区を絞り込んでいるにも関らず、町内全域の調査は完了していない。しかし、埋蔵文化財の周知及び開発事業に対応し、埋蔵文化財を保護・活用するためには、現在発見・確認している埋蔵文化財の詳細な分布状況を報告書にまとめることが必要である。そこで平成15 (2003) 年度から平成 16 年度にかけての調査で発見・確認している埋蔵文化財の詳細な分布状況をまとめ『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』が作成される事となった。



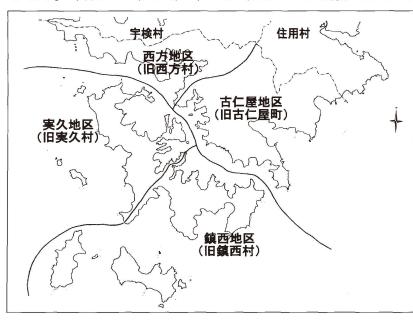
第1図 瀬戸内町位置図

第2章 瀬戸内町の概況

奄美諸島は、北緯 27 度~29 度、東経 129 度~130 度、南西諸島のほぼ中心に位置している島嶼地域である。亜熱帯圏に属し、喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島の8島の有人島と無数の無人島から構成されている。

瀬戸内町は、奄美大島の南西部と加計呂麻島・請島・与路島からなっていて、町の北側は宇検村・住用村と接している。町の面積は、239 km と広範で、その面積比は、本島側58.02%、加計呂麻島32.28%、請島5.73%、与路島3.97%となっている。いずれも300~400m程の山岳地帯が連なり、急斜面となって海岸に迫っている。地質は全域を通じて古生層であり、構成地質区分は砂岩、粘板岩、輝緑凝灰岩で、一部にレンズ状に石灰岩の地域がある。林野の占める割合は87%にもおよび、平地は著しく僅少である。ほとんどの集落が海を望む位置にあり、水深の深い良港が多い。特に薩川湾は天然の良港としてかつては軍港に利用され、現在も台風時の船舶の避難港の役割を果たしている。

15世紀中頃、奄美諸島は琉球王国の統治下に置かれ、間切制度により7間切に区分されていた。慶長14(1609)年に薩摩藩の統治下に置かれることになり、享保5(1720)年、薩摩藩は糖業政策の徹底を期するため、区域変更を行った。瀬戸内地方は、東方(旧古仁屋地区)、西方(旧西方地区)、渡連方(旧鎮西地区)、実久方(旧実久地区)に区分された。その後、明治41(1908)年の島嶼町村制施行によって、西方地区は宇検方(現在の宇検村)と合併して焼内村となり、古仁屋地区は東方村となり、加計呂麻地区は渡連方と実久方を合併して鎮西村となった。大正5(1916)年、再び区域の変更が行われ、西方地区は焼内村から分離して西方村となり、鎮西村は再度分離され鎮西村と実久村になった。東方村は昭和11(1936)年に町制を施行し、古仁屋町となった。このように瀬戸内町では区域の変更が幾度となく行われたが、昭和31(1956)年9月1日、町村合併促進法の摘要をうけて、古仁屋町・西方村・鎮西村・実久村の4ヵ町村は町村合併して現在の瀬戸内町となる。平成17(2005)年3月時点における瀬戸内町の人口は、11,278人を数える。



第2図瀬戸内町の地区区分

第3章 調查要綱

第1節 調査組織

遺跡詳細分布調査及び報告書の刊行は、瀬戸内町教育委員会が独自で実施継続しているものである。各年度における調査組織は、以下の通りである。

1 平成15 (2003) 年度の調査組織

調査主体 瀬戸内町教育委員会

調查責任 瀬戸内町教育委員会教育長 西田俊男 調査統括 社会教育課長 程 卓郎 社会教育課体育文化係長 碇山哲也

調查担当 社会教育課図書館・郷土館係長 町健次郎(集落民俗調査)

社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員 鼎丈太郎 (詳細分布調査)

2 平成16 (2004) 年度の調査組織

調査主体 瀬戸内町教育委員会

調查責任 瀬戸内町教育委員会教育長 西田俊男(6月退職)

瀬戸内町教育委員会教育長 徳永敬次(7月就任)

調査統括 社会教育課長 程 卓郎

事務担当 社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員 鼎丈太郎

調査指導 琉球大学文学部教授 池田榮史

名瀬市教育委員会文化スポーツ振興課 髙梨 修

徳之島町文化財保護審議会委員 池村 茂

瀬戸内町文化財保護審議会会長 前田芳之

調査協力 名瀬市教育委員会文化スポーツ振興課委託職員 清さつき 諸鈍シバヤ芸能保存会会長 上田伊津夫

調查担当 社会教育課図書館·郷土館係長 町健次郎(集落民俗調査)

社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員 鼎丈太郎 (詳細分布調査)

整理作業員中所亜紀

第2節 調査方法

1 分布調査の実施方法

遺跡詳細分布調査は、平成 15・16 年度の 2 年間にわたって実施し、現在も継続中である。瀬戸内町は面積が広大であるため、対象地区を設定して順次調査を行うことにした。 今回の調査対象地区は、緊急に開発及び破壊が行われる可能性の高い集落とその周辺の平野部に限定して調査を行った。

分布調査の実施方法は、遺跡の所在が予測できないため、調査対象地区内をくまなく地表面踏査した。特に、遺物が散布しやすい畑に重点をおいて表面採集を行った。踏査には、地形図、野帳、巻尺などを携帯し、現地で遺物の散布状況、遺跡の範囲などを地形図上に記入し調査を進めた。また調査の際に、民俗学の学芸員である町健次郎氏に同行していただき、民俗学的視点の提示や古老・有識者への聞き取り調査を行ってもらい、分布調査の参考にさせていただいた。

2 遺跡名称の命名方法

確認遺跡の名称は、名瀬市で採用している命名方法を参考にさせてもらい、原則として 所在している土地の小字地名を優先して命名した。そうした小字地名は、複数の集落で共 通しているものが多数含まれているため、小字地名のみの表記を行うと混乱をまねくと考 えられるため、小字地名の前に大字地名をつけて遺跡名称とした。

表記方法は、大字地名については漢字表記を優先し、小字地名については、地元で呼称している発音と相違するものが存在することや、漢字表記が当て字であることから、カタカナ表記を行った。また、遺物の散布が広範囲にわたり小字地をまたいで他の小字地まで遺跡範囲が及ぶ場合は、大字地名を優先して小字地名を省略することにした。この場合、遺跡が集落に接するまたは含まれるなど、集落に関係する遺跡については、大字地名に集落をつけて「大字地名+集落遺跡」とした。今回の命名方法によって、従前より周知されていた遺跡についても、瀬戸内町内全体で統一を図る観点から適宜検討を加えて名称変更したものがある。たとえば、「嘉徳遺跡」は今回の命名方法により「嘉徳アサト遺跡」となり、「節子遺跡」は「節子集落遺跡」となる。

今後の調査で遺跡地点が確定し、遺跡の性格が確認できる場合や、聞き取り調査で小字 地名の呼称の相違が確認された場合は、遺跡名称の変更や遺跡の分割などの可能性もある。

第4章 調査成果

第1節 調査概要

瀬戸内町教育委員会が実施している「瀬戸内町遺跡詳細分布調査」は、現在も実施継続中である。瀬戸内町は、面積が広大で、離島も抱え、山地も多い地形であるため、瀬戸内町全域を一度に調査することは不可能であると考えられる。そこで、第3章でも述べたが、第一段階として、緊急に開発事業が計画され遺跡破壊の可能性の高い集落とその周辺部の平野部を調査対象地区とした。第二段階として山地地域や小船でしか行くことのかなわない小さな砂丘が考えられる。また、瀬戸内町は、戦争遺跡が良好な状態で保存されていることも確認されており、詳細な分布調査及び計測等の調査も必要であると考えられる。瀬戸内町の遺跡詳細分布調査は、まだまだスタート地点であり、今後の調査は山積みの状態である。

さて、今回の遺跡詳細分布調査では、調査対象地区全域の表面採集調査を行った。進行 状況は約7割であるが、今回の調査で確認された遺跡は、再確認遺跡も含め47遺跡であ る。鹿児島県で確認されている「西古見城跡」「諸鈍城跡」は、山地地域であるため、今回 の調査では確認していないが、この2遺跡を含めた確認遺跡は49遺跡である。今回の調 査ではじめて確認された遺跡は、27遺跡である。このことから、今後の調査で確認され る遺跡も多数あると考えられ、最終的な遺跡数は、平野部だけでも50遺跡以上にのぼる のではないかと考えられる。

地図に付してある遺跡番号は、鹿児島県教育委員会及び瀬戸内町教育委員会で確認した 遺跡番号である(第3図)。今回、地図に付してある遺跡番号は、新たに確認された遺跡が 多いため、鹿児島県教育委員会の遺跡番号ではなく、表1の遺跡番号を付してある。次節 以降は、各地区ごとの遺跡の報告であるが、遺跡の概要説明は、鹿児島県教育委員会の遺 跡台帳をもとに作成した。

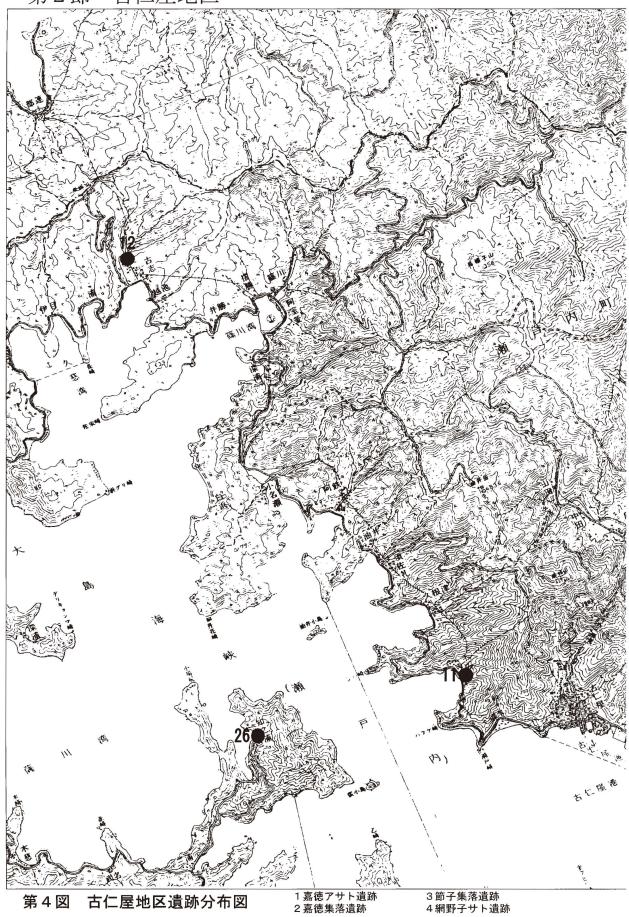


1 瀬戸内町文化財保護審議会調査風景(於斉)

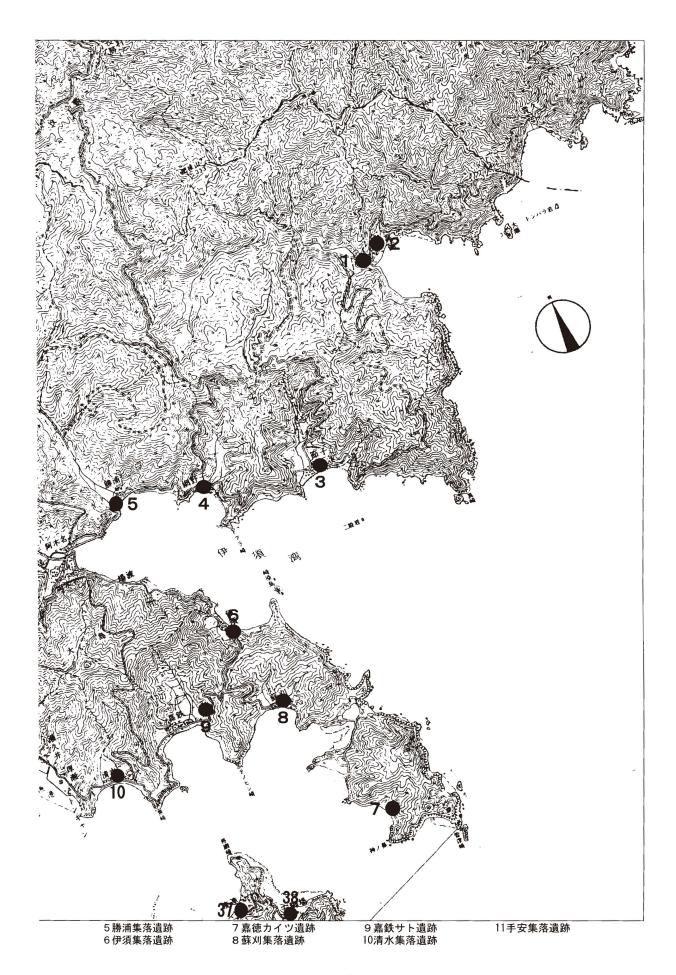
第3図 瀬戸内町の遺跡分布図

番	地区	# #	\B. Dr. D. II.	冲 1.4 公. 口	確意	忍 者	/+++/.
号	分類	集落	遺 跡 名 称 	遺跡番号	鹿児島県 教育委員会	瀬戸内町 教育委員会	備考
1.	古仁屋	嘉 徳	嘉徳アサト遺跡	87-1-0	0	0	発掘調査、『鹿考古10号』
2	古仁屋	嘉 徳	嘉徳集落遺跡	87-4-0		0	『サモト遺跡 (1)・ (2)』
3	占仁屋	節 子	節子集落遺跡	87-5-0	0		『わきゃ島スィッコ(節子)』
1	占仁屋	網野子	網野子サト遺跡			0	
ã	占仁屋	勝浦	勝浦集落遺跡	87-6-0	0	0	
6	占仁屋	伊須	伊須集落遺跡	87-7-0	Ŏ	Ŏ	
7	古仁屋	嘉鉄	嘉鉄カイツ遺跡	87-14-0	Ö	Ŏ	砂採取、『鹿考古10号』
8	占仁屋	蘇刈	蘇刈集落遺跡			Ŏ	
9	古仁屋	嘉鉄	嘉鉄サト遺跡			Ŏ	
10	占仁屋	清水	清水集落遺跡			Ŏ	
11	古仁屋	手安	手安集落遺跡			<u> </u>	
12	西方	古志	古志サト遺跡			0	
13	西方	久 慈	り 久慈イメ遺跡 久慈イメ遺跡				
14	西方	久 慈	<u> </u>	 			役所跡
15	西方	人 慈	久慈· 工多遺跡 久慈集落遺跡				1×171四小
	西方			87-8-0			
16		管 鈍 西土貝	管鈍集落遺跡 西土貝城區		0		[帝国自用小市里达数:
17		西古見	西古見城跡	87-2-0			「鹿児島県の中世城郭」
18		西古見	西占見集落遺跡	87-9-0		0	『西古見集落誌』
19	実 久	実 久	実久集落遺跡	87-10-0		0	
20	実 久	芝	芝タンマ遺跡			0	
21	実 久	芝	芝集落遺跡			0	
22	実 久	薩川	薩川集落遺跡			0	
23	実 久	瀬武	瀬武サト遺跡			0	
24	実 久	阿多地	阿多地イバタ遺跡				
25	実 久	須子茂	須子茂集落遺跡	87-11-0		\circ	試掘調査実施
26	実 久	武名	武名チノウラ遺跡				通称「グスコ」
27.	実 久	俵	俵サト遺跡				
28	実 久	瀬相	瀬相ムラウチ遺跡			0	
29	実 久	西阿室	西阿室集落遺跡	87-12-0	0	0	
30	鎮 西	花 富	花富ヒラタ遺跡	87-20-0			
31	鎮西	伊子茂	伊子茂ナカサト遺跡			0	
32	鎮西	於斉	於斉集落遺跡	87-22-0	0	Ö	
33	鎮西	押角	押角ムラウチ遺跡			0	
34	鎮西	勝能	勝能サト遺跡			Ö	
35	鎮西	諸数	諸数集落遺跡			Ŏ	
36	鎮西	生間	生間ミタ遺跡			Ŏ	
37	鎮西	渡連	渡連ムラウチ遺跡	87-21-0	0	0	
38	鎮西	渡連	渡連アンキャバ遺跡	87-13-0	Ö	<u> </u>	
39	鎮西	諸鈍	諸鈍トクハマ遺跡	87-15-0	<u> </u>	0	
-10	鎮西	諸鈍	諸鈍城跡	87-3-0			「鹿児島県の中世城郭」
11	鎮西	諸 鈍	諸鈍クリ遺跡	87-16-0			カロフロドウス(N * ^ F250人(1))
12	鎮西	諸鈍	諸鈍カネク遺跡	87-17-0			
13	鎮西	諸鈍	諸鈍サト遺跡	01-11-0			
41	鎮西	野見山	野見山オオサト遺跡	-			
	鎮西		秋徳集落遺跡				
15				 			
46	鎖帽	請阿室	請阿室集落遺跡	97 10 0		0	<u></u>
47	鎮西	池地	池地アガンマ遺跡	87-18-0	0	0	
18	鎮西	池地	池地オーコーバリ遺跡	87-19-0	0	0	P+ + I+d bbrate
19	鎮西	5 路	与路集落遺跡				『奄美博物館図録』

表1 確認遺跡一覧表



8



嘉徳集落

77H P		1								
7	, j	ガ	ナ	カトクアサト					図面	第5図
遺		亦	名	嘉徳アサト					写真	2.3.4.5.6.7
遺	跡	番	号	8 7-1-0	所	在	地	声 旧 良 甩	十 良 那 瀬 百	5内町嘉徳
(通	番)	(10075)	121	11.		此儿面乐	八面和傾	· [1] 元 元 元
	地	Ŧ	形	砂丘	時		代	縄文		
	備	ā	考							

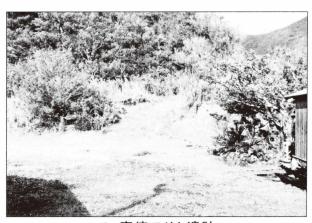
明直ぐらに致							
調査の種類	発掘調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 昭和49年 平成15年度・平成16年度					
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 約500㎡					
調査起因	開発工事	調 査 後 の 措 置 埋蔵文化財の記録保存					
	昭和49年に発掘調査が行わ	つれている。					
備考							
	書名 嘉徳遺跡(鹿児島	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·					
報告書	編著者名 河口貞徳・上村俊夫・ 平島勇夫・肱岡隆夫	多々良友博 発行年月日 1974年					
	編集機関 (住 所)						

	調査結	果
主な時代	主な遺構	主な遺物
		縄文式土器(嘉徳式土器・
縄 文	焼土遺構・石組遺構・ピット	嘉徳Ⅰ式土器・嘉徳Ⅱ式土器・
		面縄前庭式土器など)・石器

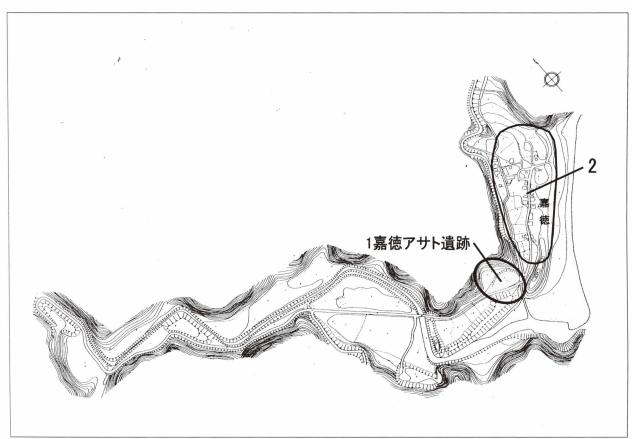
出土量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



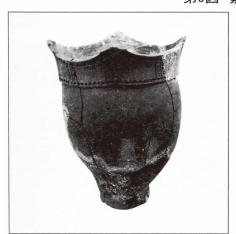
2 嘉徳アサト遺跡・嘉徳集落遺跡遠景



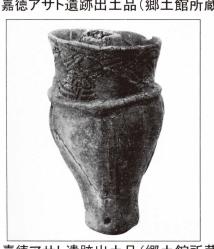
3 嘉徳アサト遺跡



第5図 嘉徳アサト遺跡位置図



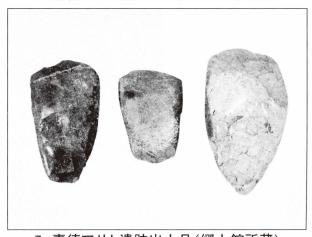
4 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



6 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



5 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



7 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)

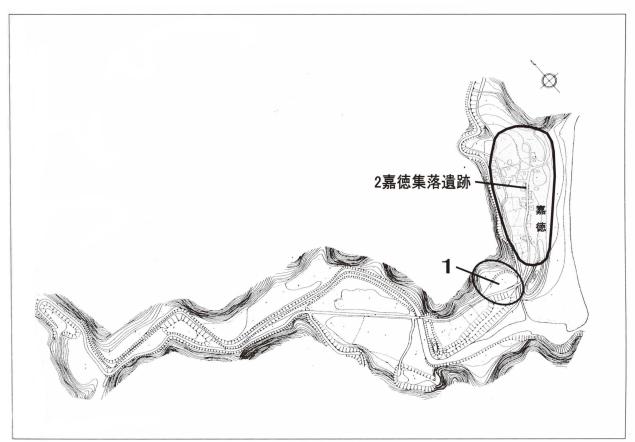
嘉徳集落

71H hm.	TOTAL									
フ	IJ.	ガ	ナ	カトクシュウラク					図面	第6図
遺	跡	Š.	名	嘉徳集落					写真	2 • 8 • 9 • 10
遺	跡	番	号	8 7-4-0	所	在	地	声 旧 包 甩	十自那滿百	三内町嘉徳
(通	番)	(10080)	121	11.	1년	此儿面乐	八面和附例	15.1点1 差1 12
地	1	开	4	砂丘	時		代	古代・中	世・近世	• 近代
備	Î	‡	夸	『サモト遺跡 (1)	• (2)]				

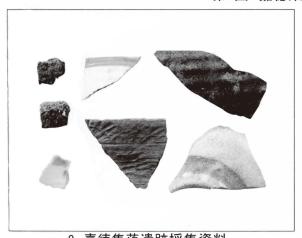
調査の種類	分布調査 瀬戸内町遺跡詳細分布調査	- 調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度			
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存			
備考						
	書名 奄美地区埋蔵文化					
報告書		長野真一 冨田逸郎 発 行 年 月 日				
		alate de les alates de la contrata del contrata de la contrata de la contrata del contrata de la contrata del contrata de la contrata de la contrata de la contrata de la contrata del contrata de la contrata del contrata del contrata de la contrata de la contrata del co				

		調	査	結	果		
主 な 時 代	主	な	遺	構	主な遺物		
古 代					兼久式土器・布目圧痕土器・		
中世		不	明		類須恵器・青磁・		
近 世					薩摩焼・陶磁器		

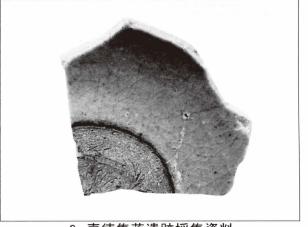
-				
١	出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



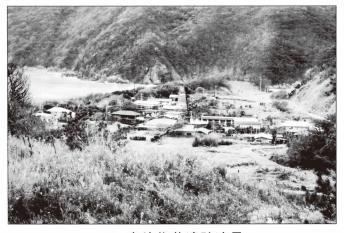
第6図 嘉徳集落遺跡位置図



8 嘉徳集落遺跡採集資料



9 嘉徳集落遺跡採集資料



10 嘉徳集落遺跡遠景

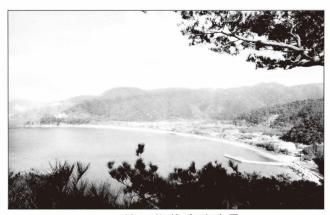
節子集落

11 1 X 11									
フリ	ガナ	セッコシュウラク	•			図面	第7図		
遺	5 名	節子集落				写真	11 • 12 • 13 • 14 • 15 • 16		
遺跡	番号	87-5-0	所在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町節子				
(通	番)	(10082)	171 11.	<u> </u>	比儿面尔	八面和傾戶下門間			
地	形	砂丘	時	代	縄文・古	代・中世	・近世・近代		
備考		『わきゃ島スィッコ	」(節子)』						
VHI	~7								

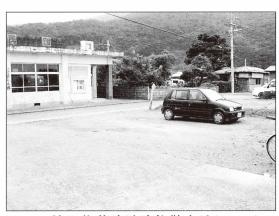
州丘 * 7 旧场									
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度						
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺						
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存						
	類須恵器の出土地点は、節	子集落遺跡の範囲外で	で、それぞれ単体で発見さ						
備考	れている。								
	書名 奄美地区埋蔵文化	奄美地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ							
報告書	編著者名 長野真一 冨田逸郎		手月日 1990年						
	編集機関 鹿児島県教育委 鹿児島県鹿児島	委員会 島市鴨池新町10-	- 1						

		調	査	結		果					
主な時代	主	な	遺	構		=	主	な	遺	物	
縄文・古代					縄文式土器・兼久式土器・						
中世・近世	不	不 明 布目圧痕土器・類須恵器・			景・青磁	•					
						白磁	玄・染	は付・原	產摩焼	・ 壺屋焼	

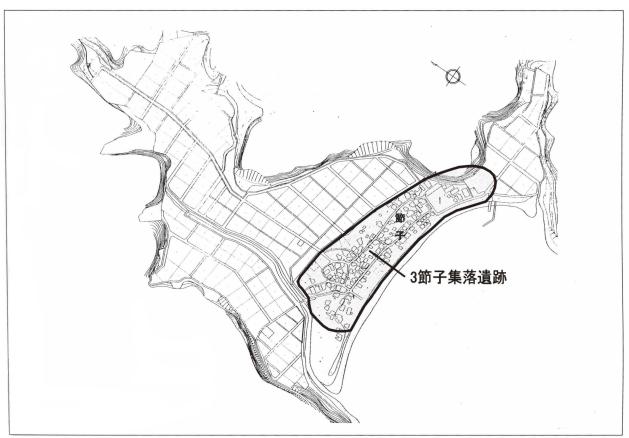
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



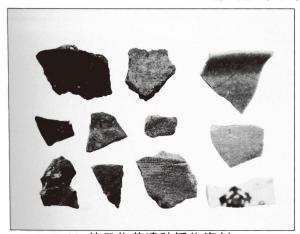
11 節子集落遺跡遠景



12 節子集落遺跡遺物散布地(ミャー)



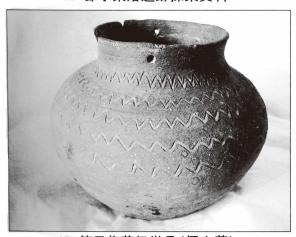
第7図 節子集落遺跡位置図



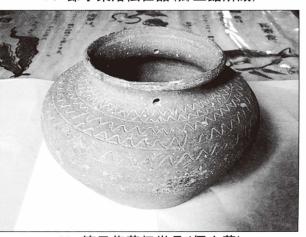
13 節子集落遺跡採集資料



14 節子集落伝世品(郷土館所蔵)



15 節子集落伝世品(個人蔵)



16 節子集落伝世品(個人蔵)

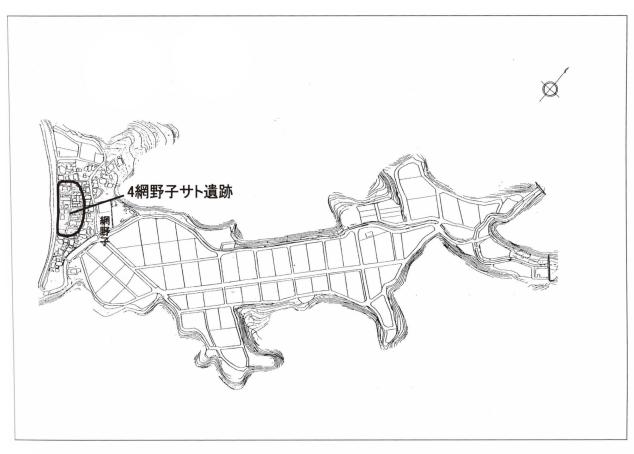
網野子集落

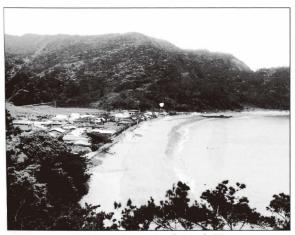
111 1- 1	7 / 1	. 1 11											
遺	リ B	ガ 东	ナ 名	アミノコサ 網野子	15)					図面 写真	第8図 17・18・19・20		
遺 (跡通	番番	号)			所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町網野子				
坩	<u>þ</u>	Ŧ	戶	砂	丘	時		代	中世・近世・近代				
備	前	=	号										

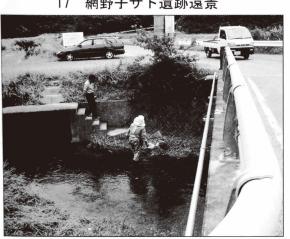
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成	以16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存	
備考	遺物の散布状況は、集落のあ 辺に集中している。	る砂丘上全体ではなく、公民館(ミャ	一) 周
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発行年月日	

		調	査	結	果				
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物
中 世							青磁・	白磁·	
近 世		不	明			ß	薩摩焼	・壺屋焼	É

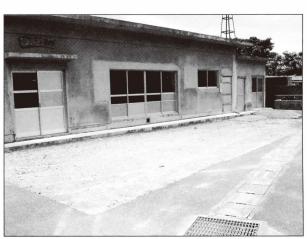
١	出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



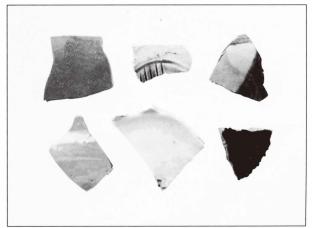




19 網野子サト遺跡調査風景



網野子サト遺跡遺物散布地 (ミャー)



20 網野子サト遺跡採集遺物

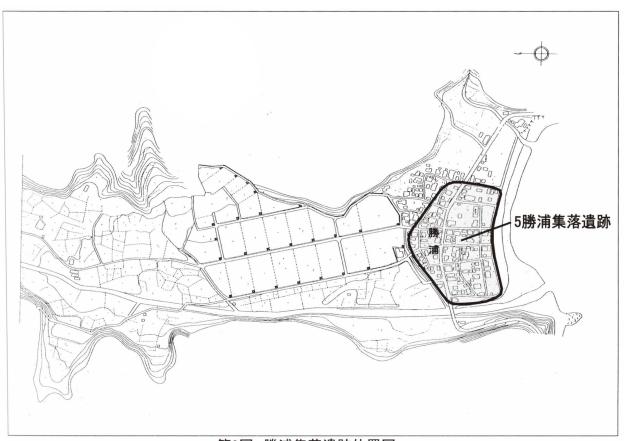
勝浦集落

7923 1113 7 1 C 1 H									
フリ 遺 路	ガナイ	カチウラシュウラク 勝浦集落	,			図面 写真	第9図 21・22・23・24		
遺跡(通	番 号 番)	8 7-6-0 (1 0 0 8 4)	所ィ	生 地					
地	形	砂丘	時	代	中世・近	世・近代			
備	考								

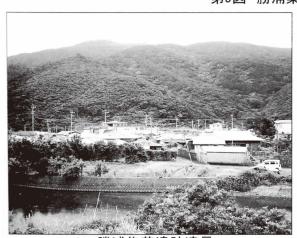
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年	月日	平成元 平成15年度・平	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教	対育委員会 調 査 [面積り	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の打	巴握 調査後の	の措置も	見状保存	
備考	土器は小片であり、不	〒目を有するものが 	ほとんど	である。	
,	書名 奄美地区均	且蔵文化財分布調金	查報告書	П	
報告書		·野真一 ·田逸郎	発行年	月日 19	990年
		k教育委員会 k鹿児島市鴨池新岡	町10-	1	

	調	查	結	果			
主な時代	E な	遺	構	主	な	遺	物
中 世 近 世	不	明		布目圧症	夏土器	• 青磁·	• 薩摩焼

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第9図 勝浦集落遺跡位置図



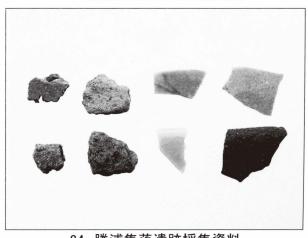
21 勝浦集落遺跡遠景



22 勝浦集落遺跡遺物散布地



23 勝浦集落遺跡遺物散布地(トネヤ)



24 勝浦集落遺跡採集資料

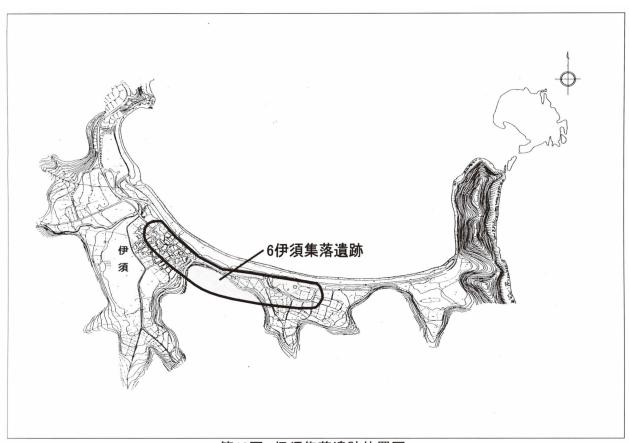
伊須集落

D 7337111						
フ リ ガ ナ	イスシュウラク				図面	第10図
遺跡名	伊須集落				写真	25 · 26 · 27 · 28
遺跡番号	8 7-7-0	所 在	地	曲旧良旧	十自那滿言	三内町伊須
(通番)	(10086)		TIE.	胚儿苗界	八面和枫厂	
地 形	砂丘	時	代	弥生・古	代・中世	・近世・近代
備考						

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度		
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
備考	伊須集落遺跡の中央部分がは、海路の歴典が異なる記		いる。遺跡の東部と西部で		
//用	は、遺跡の性格が異なる可能	101生がめる。			
	書名 奄美地区埋蔵文	化財分布調査報告書	<u></u> <u></u> ∃ II		
報告書	編著者名 長野真- 富田逸郎	肾 第 行 ⁴	年月日 1990年		
		鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1			

		調	査	結	果
主 な 時 代	主	な	遺	構	主な遺物
古 代					弥生式土器・土師質土器・
中 世		不	明		青磁・青花・
近世					染付・薩摩焼

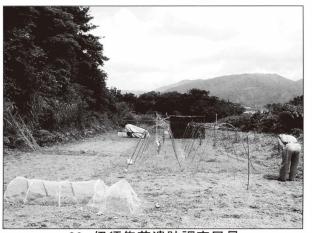
THE RESERVE AND ADDRESS OF THE PARTY OF THE			
出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



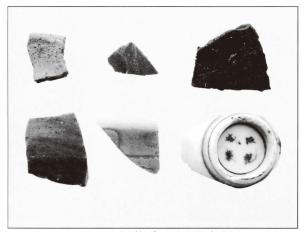
第10図 伊須集落遺跡位置図



25 伊須集落遺跡遺物散布地(ミャー)



26 伊須集落遺跡調査風景



27 伊須集落遺跡採集資料



28 伊須集落遺跡採集資料

皆津崎

フ リ ガ ナ	カテツカイツ					図面	第11図
遺跡名	嘉鉄カイツ					写真	29.30.31.32.33
遺跡番号	8 7-1 4-0	所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	三内町皆津
(通番)	(10100)	121	الم	20		ノて四川市内東ノ	1,1-1,1-1,1-1
地 形	砂丘	時		代	古代・近々	代	
備考	「奄美における」	「奄美における土器文化の編年について」(『鹿考古10号』)					
1/m /与	『やどり73'』						

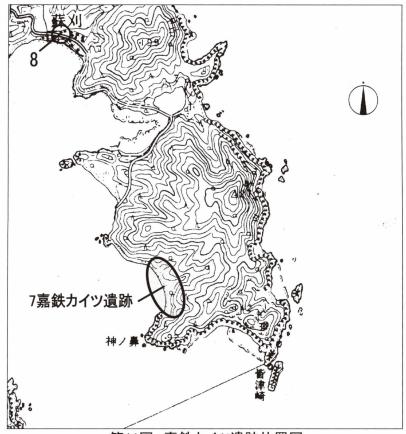
的的一百一个人口口这个					
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日		F・平成元年 ・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	砂丘全体		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置			
備考	砂採取工事により遺跡の大部分が消滅している。				
	書名 奄美地区埋蔵文代	比財分布調査報告書	 II		
報告書	編著者名 長野真一 富田逸郎		年月日	1990年	
		鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1			

		調	査	結	i	果				
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物
								兼久式	土器・	
古 代		不	明				7	午目 圧犯	良土器・	
								貝	類	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



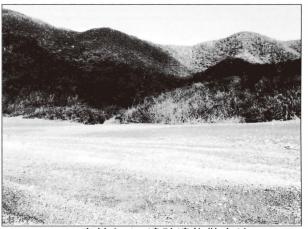
29 船にて調査地に向う(琉球大学池田教授調査指導)



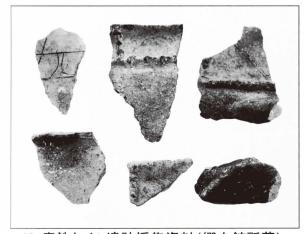
第11図 嘉鉄カイツ遺跡位置図



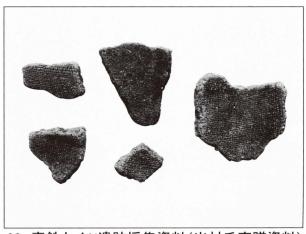
30 嘉鉄カイツ遺跡遠景



31 嘉鉄カイツ遺跡遺物散布地



32 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(郷土館所蔵)



33 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)

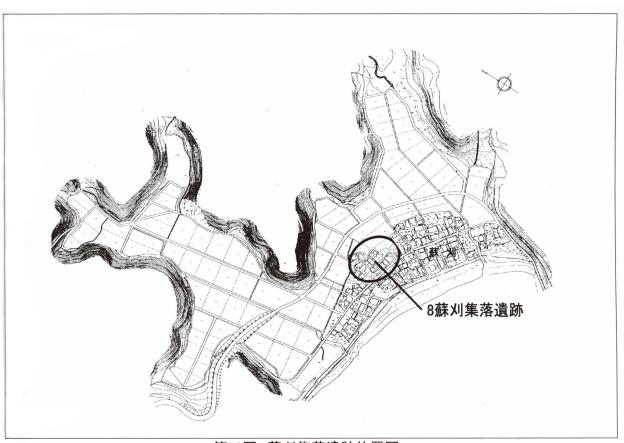
蘇刈集落

7/14 TH			
フリガナ遺跡 3	ソカルシュウラク 蘇刈集落		図面 第12図 写真 34・35・36
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町蘇刈
地 形	砂丘	時 代	中世・近世・近代
備考			

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度		
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
	遺物の散布状況は、集落のあ	る砂丘上全体ではな	なく、集落中央山側に集中し		
備考	ている。埋め立てや基盤整備	前で破壊されている可能性が高い。			
	書名 (副書名)				
報告書	編著者名	発行生	 月 日		
	編集機関 (住 所)				

		調	査		結	果				
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物
中 世		類須恵器・青磁・					•			
近 世		不	明			薩摩焼・陶磁器				
			,							

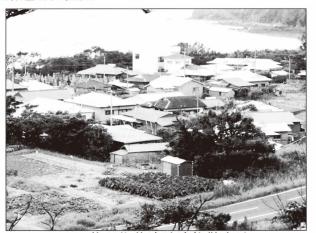
出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



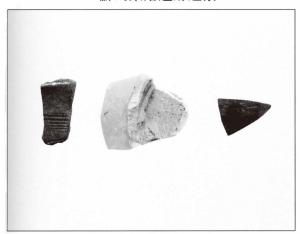
第12図 蘇刈集落遺跡位置図



34 蘇刈集落遺跡遠景



35 蘇刈集落遺跡遺物散布地



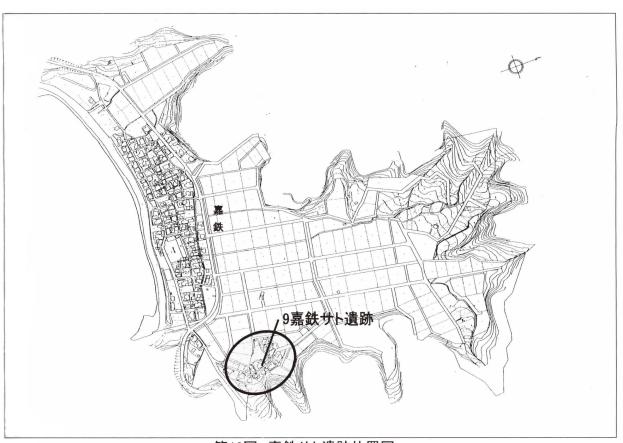
36 蘇刈集落遺跡採集資料

嘉鉄集落

カロンハフト・ロ										
フ リ カ	ガ ナ	カテツサト 嘉鉄サト					図面 写真	第13図 37·38·39·40		
	番 号		所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉鉄				
地	形 平地 時 代 中世・近世・近代		世・近代	ž						
備	考									

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度				
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考	遺物の散布状況は、集落のある砂丘ではなく、集落東側の山裾に集中している。					
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発行年月日				

		調	查	結	果			
主 な 時 代	主	な	遺	構	=	主な	遺	物
中 世					類須恵器・青磁・			
近 世		不	明		青花・赤絵・染付・			
					薩摩焼・壺屋焼			
出土量	出土量 少量			資料の)保管場所 ┃瀬戸内町立図書館・郷土館			



第13図 嘉鉄サト遺跡位置図

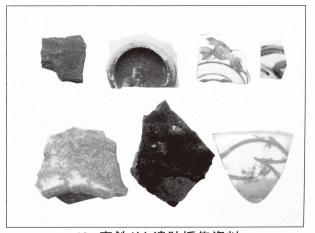




38 嘉鉄サト遺跡遠景



39 嘉鉄サト遺跡遺物散布地



40 嘉鉄サト遺跡採集資料

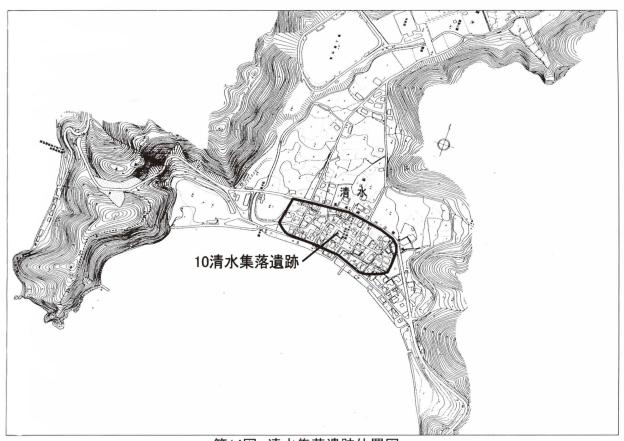
清水集落

111/1/2/2/1016	-								
遺	ガ 防 名	セイスイシュウラク 清水集落				図面 写真	第14図 41・42・43		
遺 (通	番 号 番)		所 右	E 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町清水				
地	形	砂丘	時	代	中世・近世・近代				
備	考								

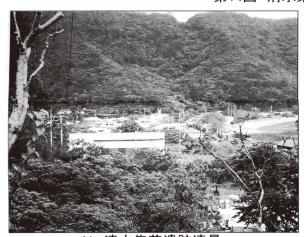
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度		
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
備考					
	書名 (副書名)				
報告書	編著者名	発行生	手月日		
	編集機関 (住 所)				

主 な 時 代 主 な 遺 構 主 な 遺 物 中 世 類須恵器・青磁・ 近 世 不 明 褐釉陶器・染付・			調	査	結	果				
	主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物
近 世	中 世						類	頁恵器	・青磁	•
	近 世		不	明			褐彩	油陶器	・染付	•
壺屋焼					-			壺屋	燒	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



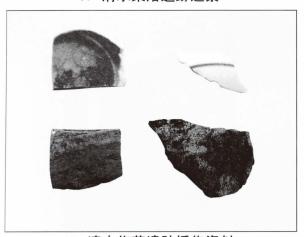
第14図 清水集落遺跡位置図



41 清水集落遺跡遠景



42 清水集落遺跡遺物散布地



43 清水集落遺跡採集資料

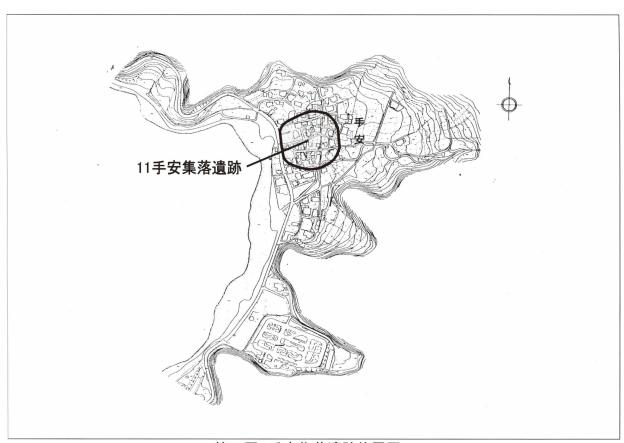
手安集落

フリガナ 遺跡 名	テアンシュウラク 手安集落				図面 写真	第15図 44·45·46·47	
遺跡番号	7 久米市	所 右	王 地	鹿児島県		三内町手安	
地形	平 地	時	代	中世・近世・近代			
備考							

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発行生	手月日
	編集機関 (住 所)		

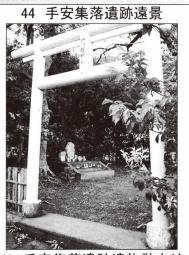
		調	查		結	果				
主な時代	主	な	遺	構			主	な	遺	物
中 世										
近 世		不	明					上器・紫	頁須恵器	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館

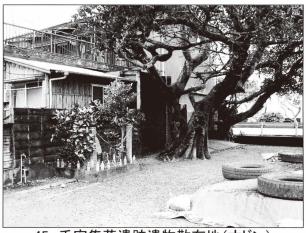


第15図 手安集落遺跡位置図

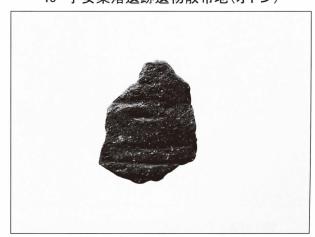




46 手安集落遺跡遺物散布地

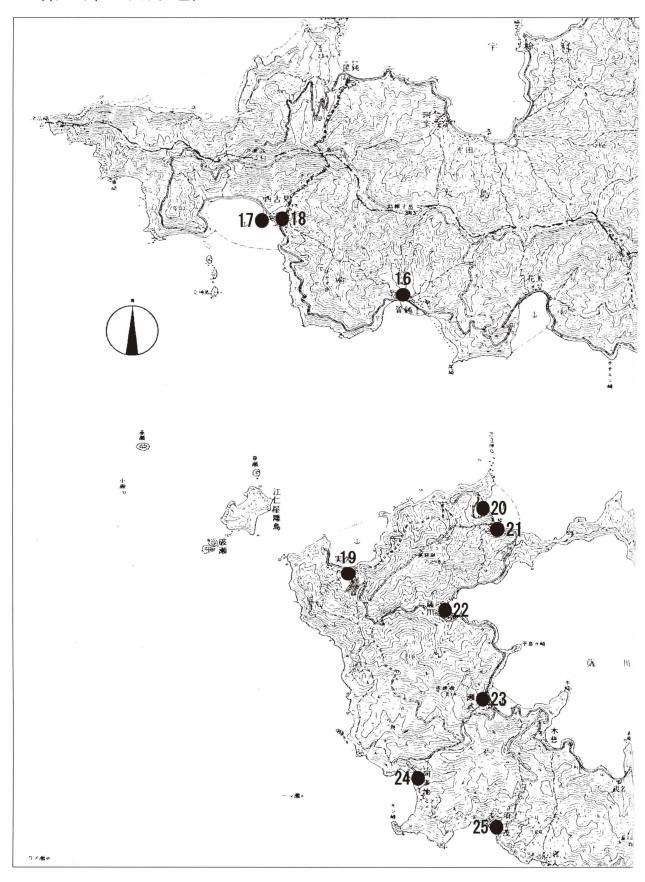


45 手安集落遺跡遺物散布地(オドン)

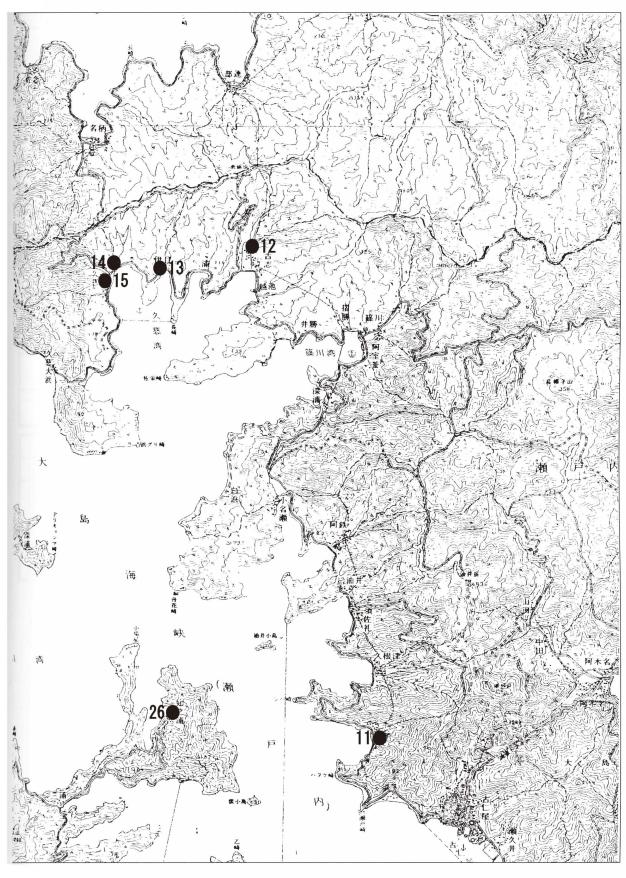


47 手安集落遺跡採集資料

第3節 西方地区



第16図 西方地区遺跡分布図



12古志サト遺跡 13久慈イメ遺跡

14久慈マエダ遺跡 15久慈集落遺跡

16管鈍集落遺跡 17西古見城跡

18西古見集落遺跡

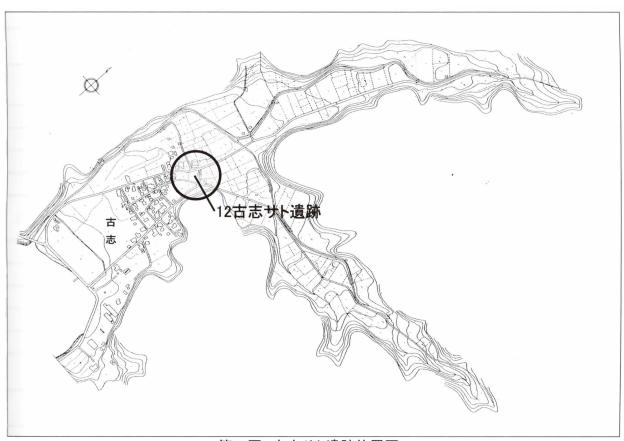
古志集落

H-C /KIA										
フリ 遺 路	ガ 赤 名	コシサト 古志サト					図面 写真	第17図 48・49・50		
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町古志				
地	形	平地	時		代	中世・近世・近代				
備	考									

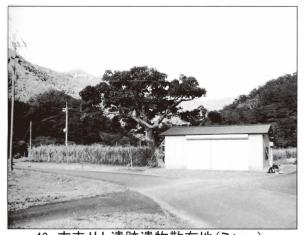
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度				
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
	遺物の散布状況は、集落のあ	る平地全体ではなく、ミャー周辺 に集中して				
備考	いる。					
	書名 (副書名)					
報告書	編著者名	発行年月日				
	編集機関 (住 所)					

		調	査	糸	洁	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中 世							類	須恵器	・青磁	•	
近世		不	明				白磁	弦・染作	ナ・薩摩		

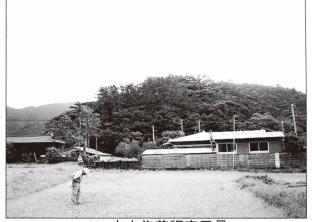
Г	出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



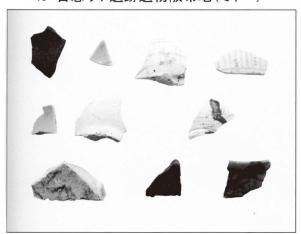
第17図 古志サト遺跡位置図



48 古志サト遺跡遺物散布地(ミャー)



49 古志集落調査風景



50 古志サト遺跡採集資料

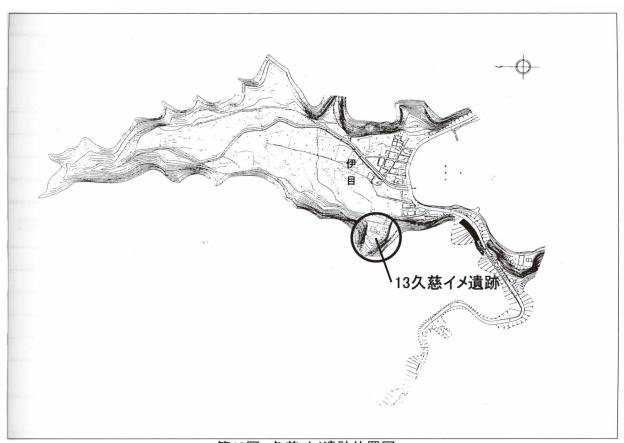
伊目集落

D H JCTI									
フリ 遺 過	ガ 赤 名	^{クジイメ} 久慈イメ				図面 写真	第18図 51・52・53		
遺 (通	番 号 番)		所 在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町伊目				
地	形	丘 陵	時	代	近世・近代				
備	考								

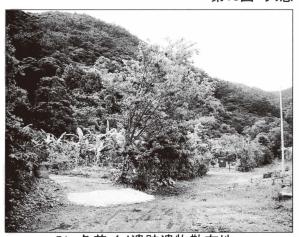
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度		
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
備考	遺物の散布状況は、集落の形陵に集中する。	が成されている平地で	ではなく。老山家のある丘		
	書名 (副書名)				
報告書	編著者名	発 行 年	 月 日		
	編集機関 (住所)				

		調	査	結	果				
主な時代	主	な	遺	構		主	な	遺物	
近 世		不	明			染作	ナ・壺屋	を焼・陶器	

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



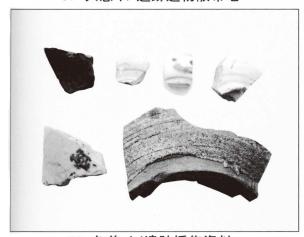
第18図 久慈イメ遺跡位置図



51 久慈イメ遺跡遺物散布地



52 久慈イメ遺跡遺物散布地(老山家)



53 久慈イメ遺跡採集資料

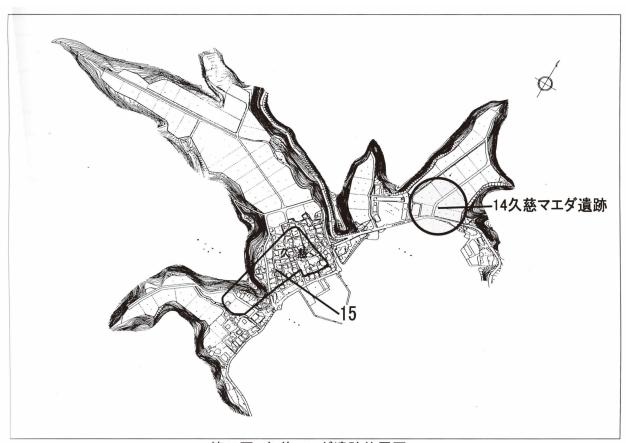
久慈集落

7 (7)										
フリ 遺	ガ 赤 名	クジマエダ 久慈マエダ					図面 写真	第19図 54・55		
遺	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈				
地	形	平 地	時		代	中世・近世・近代				
備	考	小字名「前田」								

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存			
備考	役所跡。 工事で消滅している可能性が	る。				
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関	発 行 4	手月日			
	(住所)					

		調	查	糸	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中世		不	明					須恵	話器		

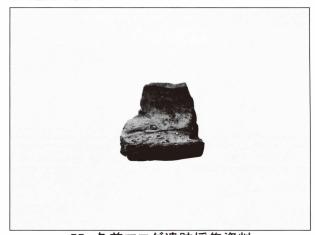
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第19図 久慈マエダ遺跡位置図



54 久慈マエダ遺跡遺物散布地



55 久慈マエダ遺跡採集資料

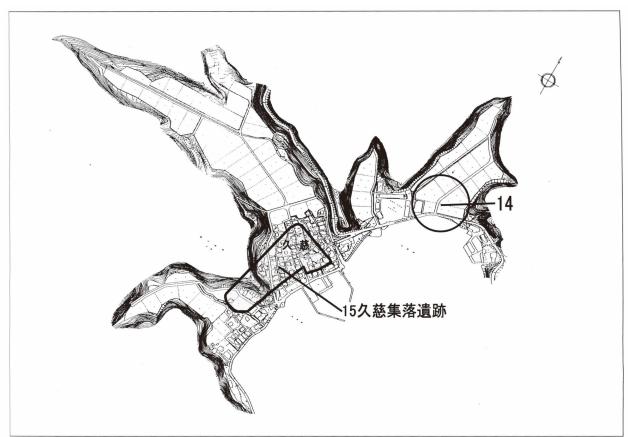
久慈集落

7 (7)	/ TH										V		
遺	リ 助	ガ 亦	ナ名	クジシュウ 久慈集						図面 写真	第20図 56・57		
遺 (跡通	番番	号)			所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈				
士	也	Ŧ	肜	平	地	時		代	中世・近世・近代				
ſī	前	7	考										

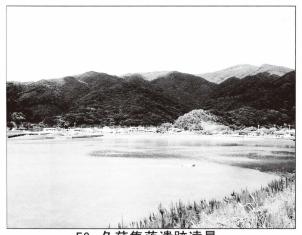
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
報告書	書名 (副書名) 編著者名	発 行 组	F H H
新 古 青 	編集機関 (住 所)	第 行 =	F

		調	査	j	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中 世							類	須恵器	・青磁	•	
近世		不	明				布目	圧痕土	器・壺	屋焼	

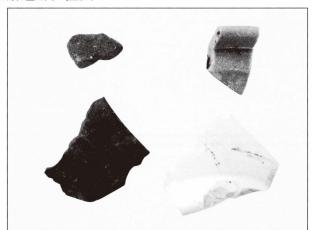
出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第20図 久慈集落遺跡位置図



56 久慈集落遺跡遠景



57 久慈集落遺跡採集資料

管鈍集落

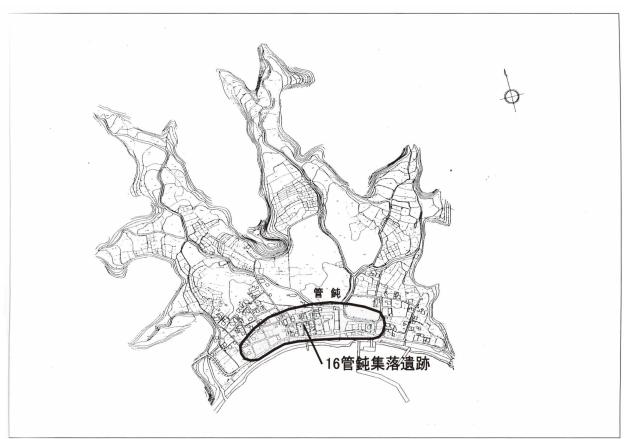
フリ	ガナ	クダドンシュウラク					図面	第21図
遺	亦 名	管鈍集落					写真	58 · 59 · 60
遺跡	番号	87-8-0	所 在 地 鹿児島県大島郡瀬戸内町管鈍				5 内町答鈷	
(通	番)	(10088)	121	11.	걘	此儿面乐	八面和傾	. 1. 1 日 元四
地	形	砂丘	時		代	古代・中世・近世・近代		
備	考							

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度				
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存				
備考							
	(副書名)	上財分布調査報告書	 ∃ II				
報告書	編著者名 長野真一 冨田逸則						
		鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1					

		調	查	結	果
主な時代	主	な	遺	構	主な遺物
古 代					兼久式土器・布目圧痕土器・
中 世		不	明		青磁・白磁・
近 世					染付・壺屋焼

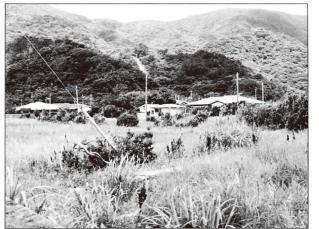
出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



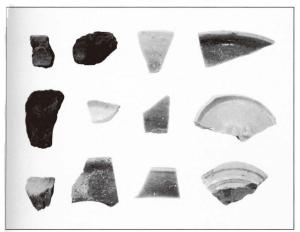
第21図 管鈍集落遺跡位置図



58 管鈍集落遺跡遠景



59 管鈍集落遺跡遺物散布地



60 管鈍集落遺跡採集資料

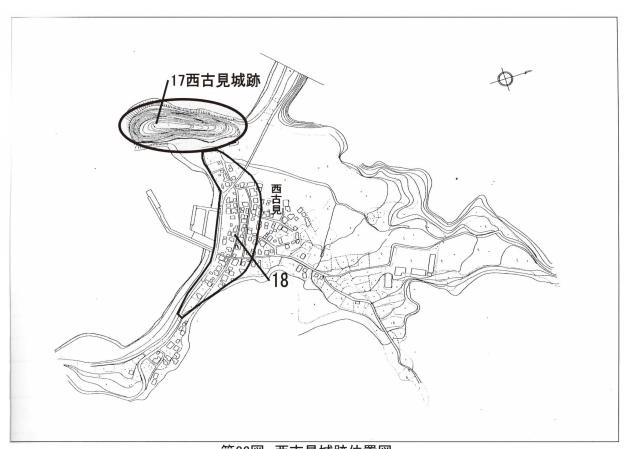
西古見集落

<u> </u>	716							
フリ	ガナ	ニシコミグスクアト					図面	第22図
遺	跡 名	西古見城跡					写真	61
遺跡	番 号	8 7-2-0	所	在	地		十自那滿言	5 内町西士目字兼仏
(通	番)	(10076)	121	11.	715	鹿児島県大島郡瀬戸内町西古見字		
地	形	丘 陵	時		代	中世		
備	考	別称「海城」						

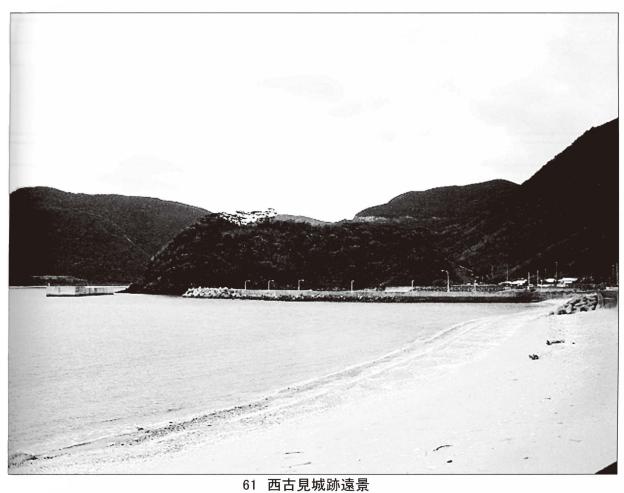
网 土 * > 1 1 3 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1								
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	昭和62年 平成15年度・平成16年度					
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺					
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存					
備考	「海城」で記載 現況:自然公園, 残存度:消	「海城」で記載 現況:自然公園,残存度:消滅,地名:兼久						
	書名 (副書名) 鹿児島県の中t	世城館跡						
報告書	編著者名 吉永正史・五! 三木靖	味克夫 発 行 st	年月日 1987年					
	編集機関 鹿児島県教育委 (住 所) 鹿児島県鹿児島	兵員会 島市鴨池新町10-	- 1					

		調	査	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中 世		不	明				不	明		

出土量	資料の保管場所	



第22図 西古見城跡位置図



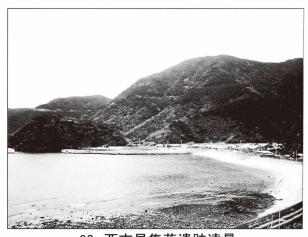
西古見集落

<u> </u>	C							
フリ	ガナ	ニシコミシュウラク					図面	第23図
遺	跡 名	西古見集落					写真	62 • 63 • 64 • 65 • 66
遺跡	番 号	87-9-0	所	在	地	曲旧 自	十 良 那 滿 言	5内町西古見
(通	番)	(10090)	171	11	71 <u>C</u>	此儿面尔	八面和傾力	771四月四元
地	形	砂丘	時		代	弥生・古	代・中世・	・近世・近代
備	考	『西古見集落誌』	「西古見	出土	の土器	(破片) は	こついて」	里山勇廣
7/用	5							

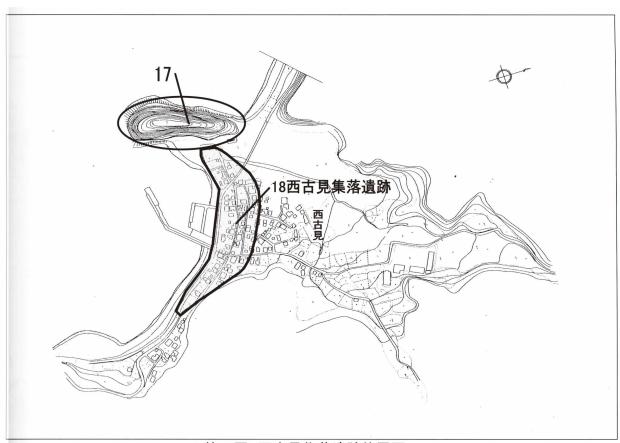
問 査 の 種 類 表面採集調査		調査年月日	昭和60年・平成元年 平成15年度・平成16年度				
調査機関	名瀬市奄美歴史民俗資料館・ 鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存				
備考							
	書名 奄美地区埋蔵文化	比財分布調査報告書	≛Ⅱ				
報告書	編著者名 長野真一 富田逸則		年月日 1990年				
編集機関 鹿児島県教育委員会 (住 所) 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1							

		調	査	糸	古	果			
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物
古 代						弥生式士	器・ス	セン當っ	弌土器・
中 世		不	明			兼久式	土器・	青磁・壺	屋焼・
近世						ゴオ	マウラ製	腕輪・釒	泆滓

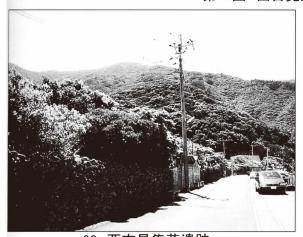
出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



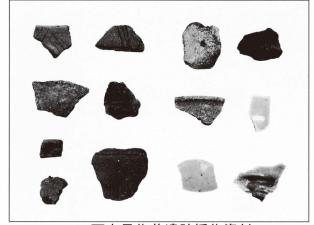
62 西古見集落遺跡遠景



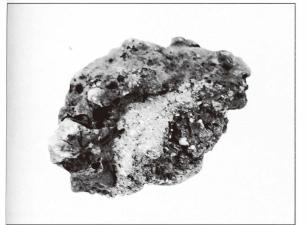
第23図 西古見集落遺跡位置図



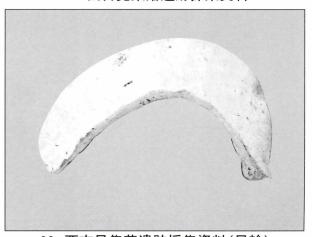
63 西古見集落遺跡



64 西古見集落遺跡採集資料

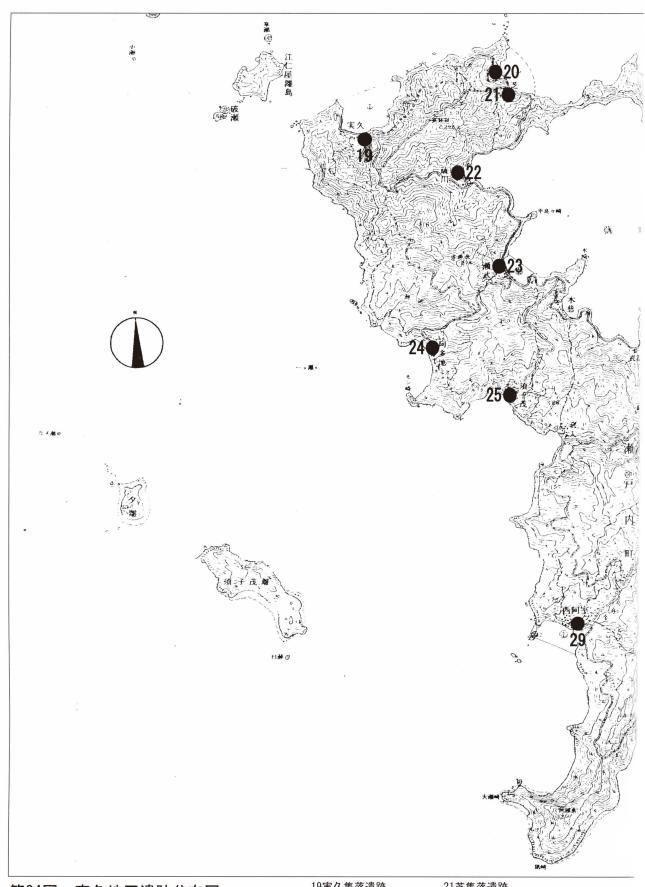


65 西古見集落遺跡採集資料(フイゴ)



66 西古見集落遺跡採集資料(貝輪)

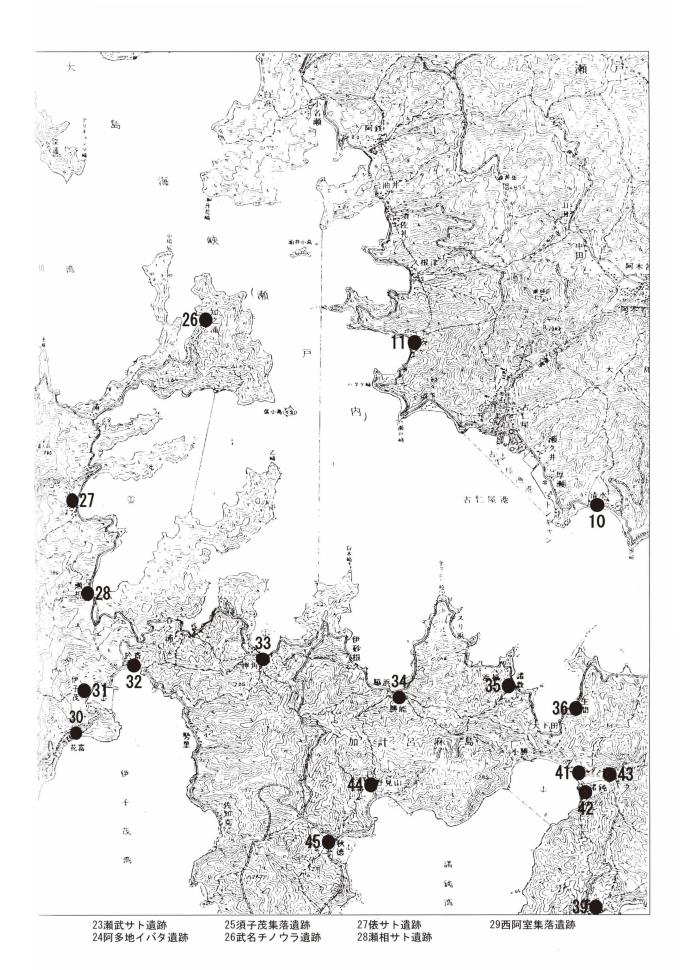
第4節 実久地区



第24図 実久地区遺跡分布図

19実久集落遺跡 20芝タンマ遺跡

21芝集落遺跡 22薩川集落遺跡



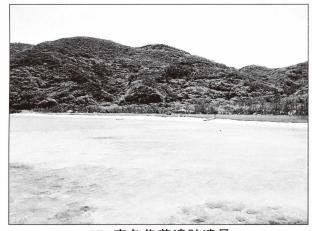
実久集落

JC / C/C I'I							
フリ	ガナ	サネクシュウラク				図面	第25図
遺	亦 名	実久集落				写真	67.68.69.70.71.72
遺跡	番号	8 7-1 0-0	武	所 在 地 鹿児島県大島郡瀬戸内町実久			
(通	番)	(10092)	ולו י		此儿面乐	八面和附列	
地	形	砂丘	時	代	中世・近世・近代		
備	考						

明旦の日本					
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度		
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
備考					
	書名 奄美地区埋蔵	文化財分布調査報告書	書Ⅱ		
報告書	編著者名 長野 富田		年月日 1990年		
		鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1			

	調	査	結	果					
主な時代主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中世						土器	・青磁		
近世	不	明				染付	• 陶器		

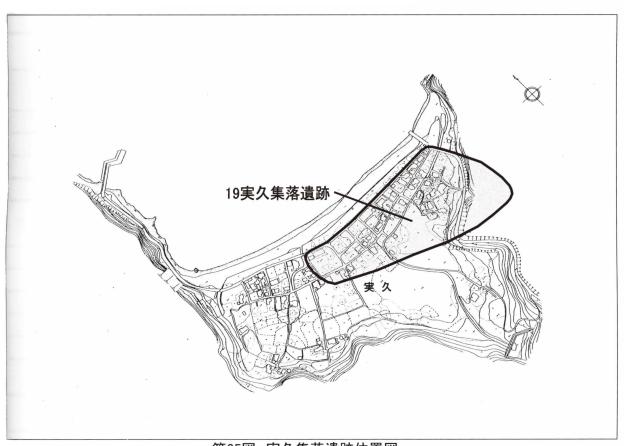
II I 里 少 里 質科の休官場所 機戸内町立図音館・郷_	出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
--------------------------------------	-----	-----	---------	--------------



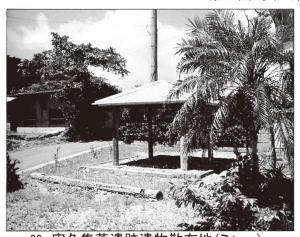
67 実久集落遺跡遠景



68 実久集落遺跡遺物散布地



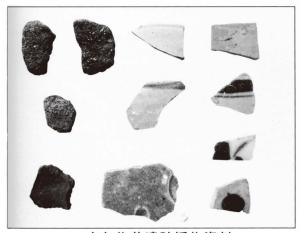
第25図 実久集落遺跡位置図



69 実久集落遺跡遺物散布地(ミャー)



70 実久集落遺跡(実久三次郎神社)



71 実久集落遺跡採集資料



72 実久集落遺跡採集資料

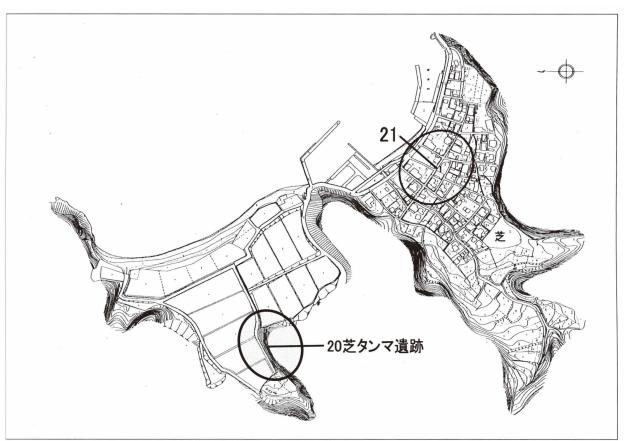
芝集落

<u>~/</u>								
フリ	ガナ	シバタンマ					図面	第26図
遺跡	5 名	芝タンマ					写真	73 • 74 • 75
遺跡	番号		所	在	地	新旧自 . 旧	十 自 那 滿 言	5.大町女
(通	番)		ולא	1工	116	鹿児島県大島郡瀬戸内町芝		
地	形	砂丘	時		代	中世・近	世・近代	
備	考	小字名「タンマ」						
νm								

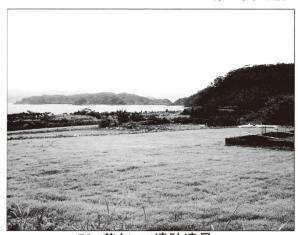
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度				
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考	農地整備事業により消滅して	と地整備事業により消滅している可能性がある。				
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発行年月日				

		調	査	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中 世 近 世		不	明			土器	・類須	恵器・	染付	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第26図 芝タンマ遺跡位置図



73 芝タンマ遺跡遠景



74 芝タンマ遺跡遺物散布地



75 芝タンマ遺跡採集資料

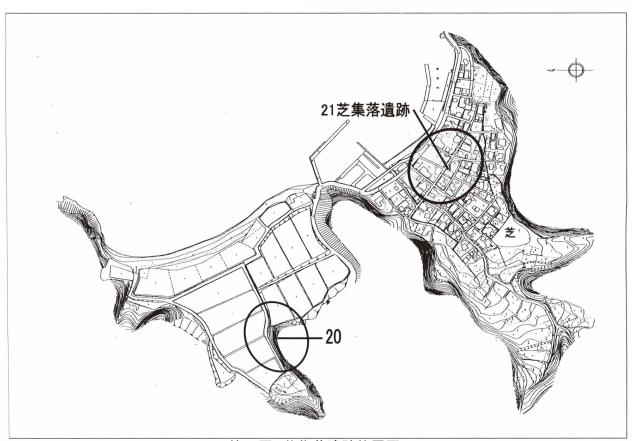
芝集落

~ / / / /							
フ リ 遺 遇	ガ 赤 名	シバシュウラク 芝集落				図面	第27図 76·77·78·79
退	小 口	人 来俗				写真	10.11.18.19
遺 (通	番 号 (番)		所 在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	可内町芝
地	形	砂丘	時	代	中世・近	世・近代	
備	考						

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	退蔵文化財包蔵地の把握 調査後の措置現状保存					
備 考	遺物の散布状況は、集落の中心(ミャー付近)に集中している。					
	書名 (副書名)					
報告書	編著者名	発 行 年	三月日			
	編集機関 (住 所)		·			

	調	査 糸	i 果		
主な時代	主な	遺構		主な	遺物
中世				類須恵器	• 青磁 •
近 世	不	明		褐釉陶器	・染付

出 十 量	小 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第27図 芝集落遺跡位置図

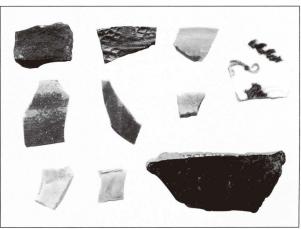


76 芝集落遺跡遠景





78 芝集落遺跡遺物散布地(アシャゲ)



79 芝集落遺跡採集資料

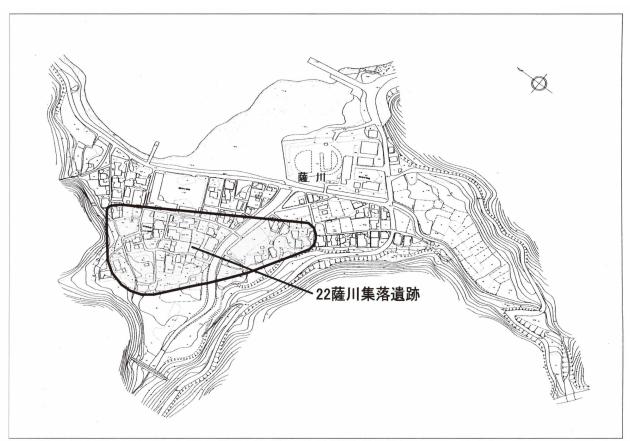
薩川集落

19327 17	<u> </u>								
遺	リ ガ 跡	ナ 名	サツカワシュウラク 薩川集落					図面 写真	第28図 80・81・82
	跡 番 通 番			所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	5内町薩川
地	;	形	平 地	時		代	古代・中	世・近世・	・近代
備		考							

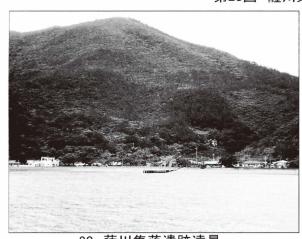
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置)措置現状保存			
備考	遺物の散布地は広大だが、特付近である。	めの散布地は広大だが、特に集中して散布しているのは、学校・ミャー 丘である。				
報告書	書名 (副書名) 編著者名	発 行 4	平月日			
	編集機関 (住 所)					

		調	査		結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
古 代							土	器・類	須恵器		
中 世		不	明				青磁	兹・染作	寸・薩摩	* 焼	
近 世											

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



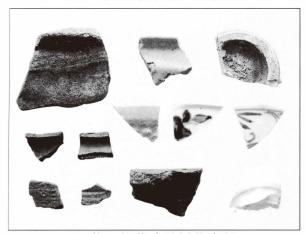
第28図 薩川集落遺跡位置図



80 薩川集落遺跡遠景



81 薩川集落遺跡遺物散布地(ミャー)



82 薩川集落遺跡採集資料

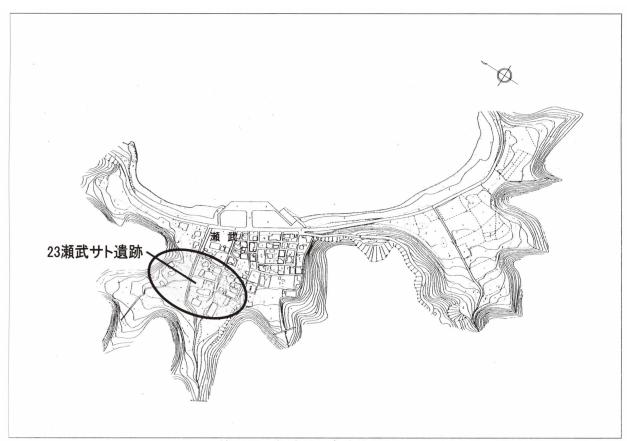
瀬武集落

THE VICTOR								
フリ 遺 路	ガ 赤 名	セダケサト 瀬武サト					図面 写真	第29図 83・84・85
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県		5内町瀬武
地	形	平 地	時		代	中世・近	世・近代	
備	考							

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考	遺物の散布状況は、集落の山	物の散布状況は、集落の山手側(武家・稲留家)に集中している。				
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発行名	F 月 日			

	調	査	結	果
主な時代主	な	遺	構	主な遺物
中 世				類須恵器・青磁・白磁・
近 世	不	明		染付・印判手・
				薩摩焼・壺屋焼

┃ 出土量 ┃ 少量 ┃	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
--------------	---------	--------------



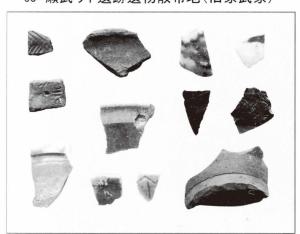
第29図 瀬武サト遺跡位置図



83 瀬武サト遺跡遺物散布地(旧家武家)



84 瀬武サト遺跡遺物散布地(アシャゲ)



85 瀬武サト遺跡採集資料

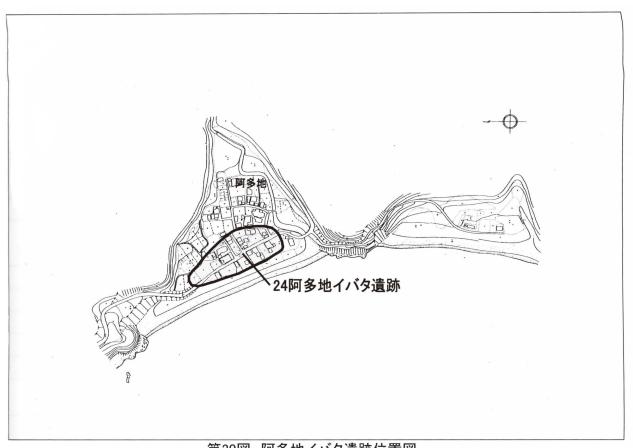
阿多地集落

1127011								
フリカ 遺 跡	ナ 名	アダチイバタ 阿多地イバ タ					図面 写真	第30図 86・87・88
		113201					プ兵	00 01 00
遺 跡 番 (通 番			所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	可内町阿多地
地	形	砂丘	時		代	古代・中	世・近世・	・近代
備	考							

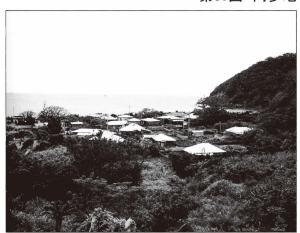
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発行生	平月日
	編集機関 (住 所)		

		調	査	結	果
主 な 時 代	主	な	遺	構	主な遺物
古 代					兼久式土器・滑石混入土器・
中 世		不	明		類須恵器・青磁・
近 世					褐釉陶器・染付・薩摩焼

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



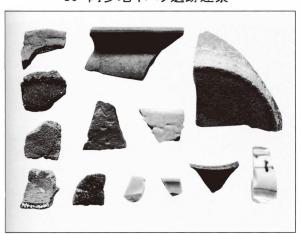
第30図 阿多地イバタ遺跡位置図



阿多地イバタ遺跡遠景



87 阿多地イバタ遺跡遺物散布地(ミャー)



88 阿多地イバタ遺跡採集資料

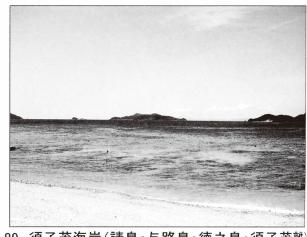
須子茂集落

<u> </u>	C11							
フリ	ガナ	スコモシュウラク					図面	第31図
遺	跡 名	須子茂集落					写真	89 • 90 • 91 • 92 • 93
遺跡	番 号	8 7-1 1-0	所	在	地	声 児 良	大良郡滿言	5内町須子茂
(通	番)	(10094)	121	714	16	此儿面不	八面和柳月	7月1月月1月
地	形	砂丘	時		代	弥生・古	代・中世・	・近世・近代
備	考							

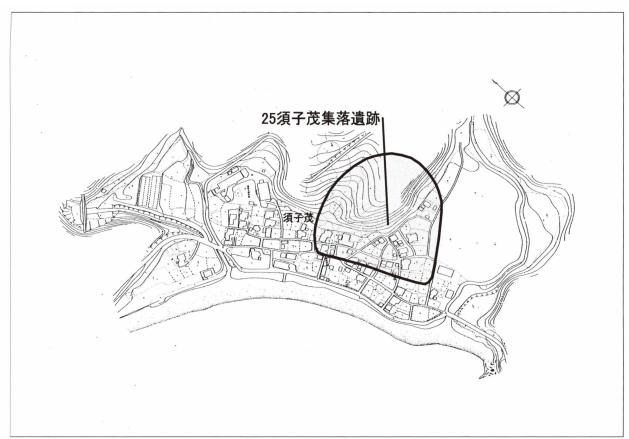
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度		
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存		
備考	平成16年に試掘調査実施	Ē _o			
	書名 奄美地区埋蔵文化	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ			
報告書	編著者名 長野真一 冨田逸則	分	手月日 1990年		
	編集機関 鹿児島県教育委 (住 所) 鹿児島県鹿児島	兵員会 場市鴨池新町10-	- 1		

	調	查	結	果
主な時代	主な	遺	構	主な遺物
弥生・古代				弥生式土器・スセン當式土器・
中世・近世	不	明		兼久式土器・青磁・類須恵器・
				陶器・ガラス玉・ゴホウラ貝殻

,				
	出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



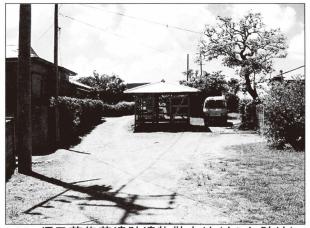
89 須子茂海岸(請島·与路島·徳之島·須子茂離)



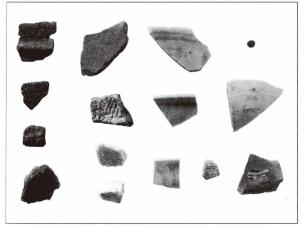
第31図 須子茂集落遺跡位置図



90 須子茂集落遺跡遠景



91 須子茂集落遺跡遺物散布地(カミヤ跡地)



92 須子茂集落遺跡採集資料



93 須子茂集落伝世品(郷土館所蔵)

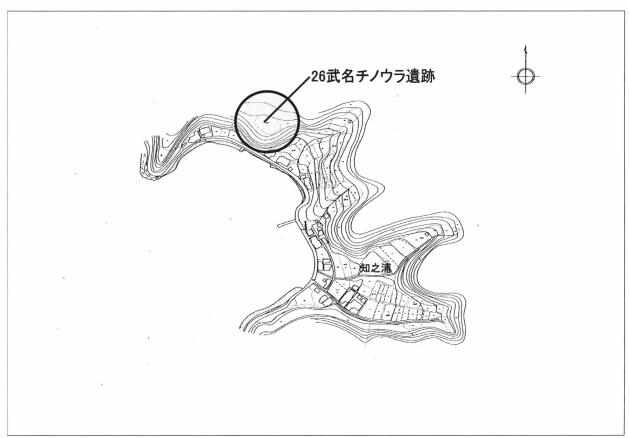
知之浦集落

フリガナ	タケナチノウラ			図面	第32図
遺跡名	武名チノウラ			写真	94 • 95
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在 均	也 鹿児島県	具大島郡瀬戸	三内町知之浦
地 形	丘 陵	時 作	中世		
備考					

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積集	落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置現	状保存
備 考	遺物の散布地は、集落の奥の)丘陵である。通称は「	「グスコ」である。
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発行年。	月日
	編集機関 (住 所)		

		調	査	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中世		不	明				青	磁		

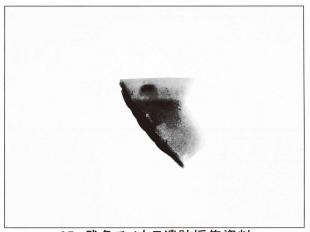
出 十 島	小	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
山上里	り 里	資料の休官場所	(根) [1] 五四音品 加工品



第32図 武名チノウラ遺跡位置図



94 武名チノウラ遺跡遠景



95 武名チノウラ遺跡採集資料

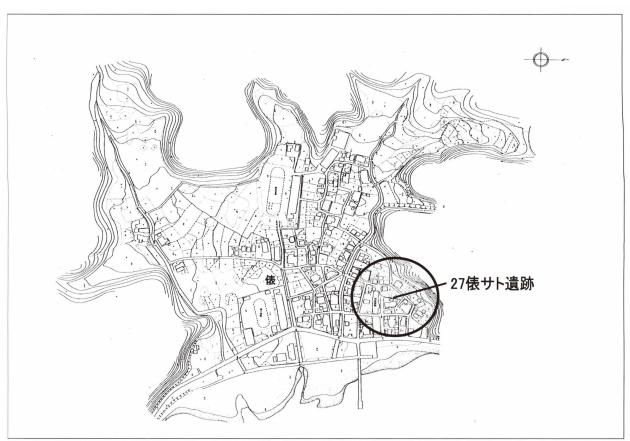
俵集落

フリガナ 遺跡 名	_{ヒョウサト} 俵サト				図面 写真	第33図 96·97·98·99
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	- 三内町俵
地 形	平 地	時	代	中世・近	世・近代	
備考						

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存
備 考		
	書名 (副書名)	
報告書	編著者名	発 行 年 月 日
	編集機関 (住 所)	

	調	查	結	果			
主な時代	主な	遺	構	Ë	E な	遺	物
中世					白磁・	褐釉陶器	
近 世	不	明			染付	・薩摩焼	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



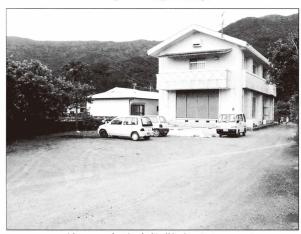
第33図 俵サト遺跡位置図



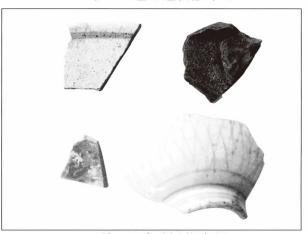
96 俵サト遺跡遠景



97 俵サト遺跡遺物散布地



98 俵サト遺跡遺物散布地(ミャー)



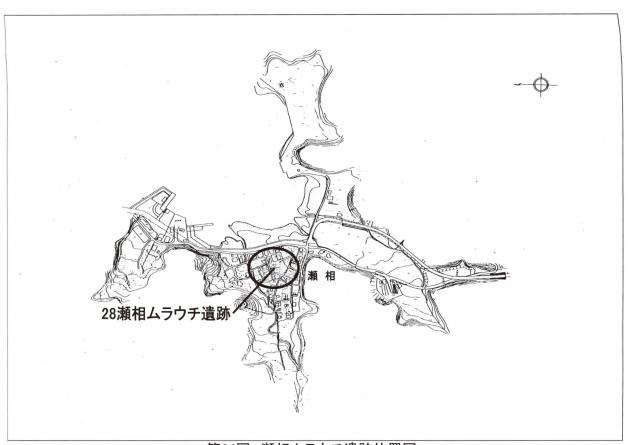
99 俵サト遺跡採集資料

Mert I.	- 44-44
州山土	
(本日 小)	集落

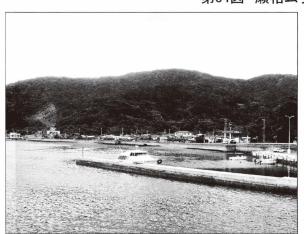
TON THE PICTOR			
フリガナ 遺 跡 名	セソウムラウチ 瀬相ムラウチ		図面 第34図 写真 100・101・102
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬相
地 形	平 地	時 代	中世・近世・近代
備考			

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
	遺物の散布状況は、集落全体	ではなく、集落の中	中心 (ミャー) に集中して
備考	いる。		
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発行生	 月 日
	編集機関 (住 所)		

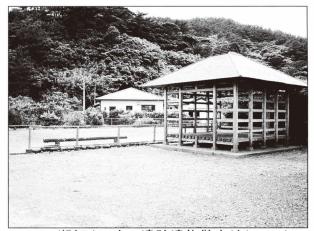
		調	査	弁	洁	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中 世											
近 世		不	明			-	青磁	な・染作	ナ・薩摩	を焼	
山上島	415	旦		次	料のは	日 2 年 1 日 日	こ 油	二九町	- 公园事	合宁 。 917	7 上台



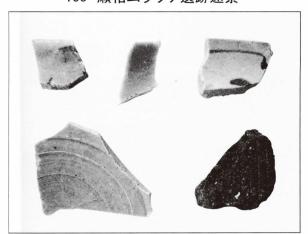
第34図 瀬相ムラウチ遺跡位置図



100 瀬相ムラウチ遺跡遠景



101 瀬相ムラウチ遺跡遺物散布地(ミャー)



102 瀬相ムラウチ遺跡採集資料

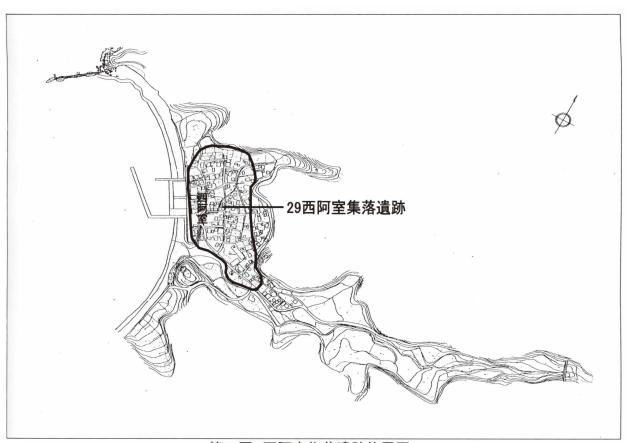
西阿室集落

<u> </u>	41 F							
フリ	ガナ	ニシアムロシュウラク					図面	第35図
遺	跡 名	西阿室集落					写真	103 · 104 · 105
遺跡	番号	8 7-1 2-0	所	在	地	声 但自ll	七	5内町西阿室
(通	番)	(10096)	721	11.	IE.	此儿面尔	八面印积)	. [1] [2] [2] [2]
地	形	平 地	時		代	中世・近	世・近代	
備	考	平成11年分布調查	至、旧名	「金	:久原・	見取原」を	を含む	

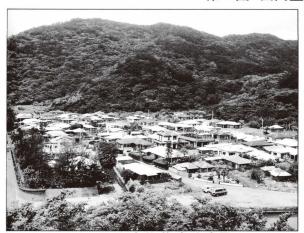
調査の種類	分布調査 農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年・平成11年 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備 考			
	書名 奄美地区埋蔵文	化財分布調査報告書	≟ Ⅱ
報告書	編著者名 長野真- 富田逸郎		年月日 1990年
	編集機関 (住 所)		

		調	查		結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中 世							土	器・類	須恵器	•	
近 世		不	明				青磁	• 白磁	• 褐釉降	同器・	
								染付•	薩摩焼		

出十量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
	/ 単	東小小	



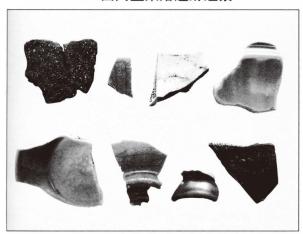
第35図 西阿室集落遺跡位置図



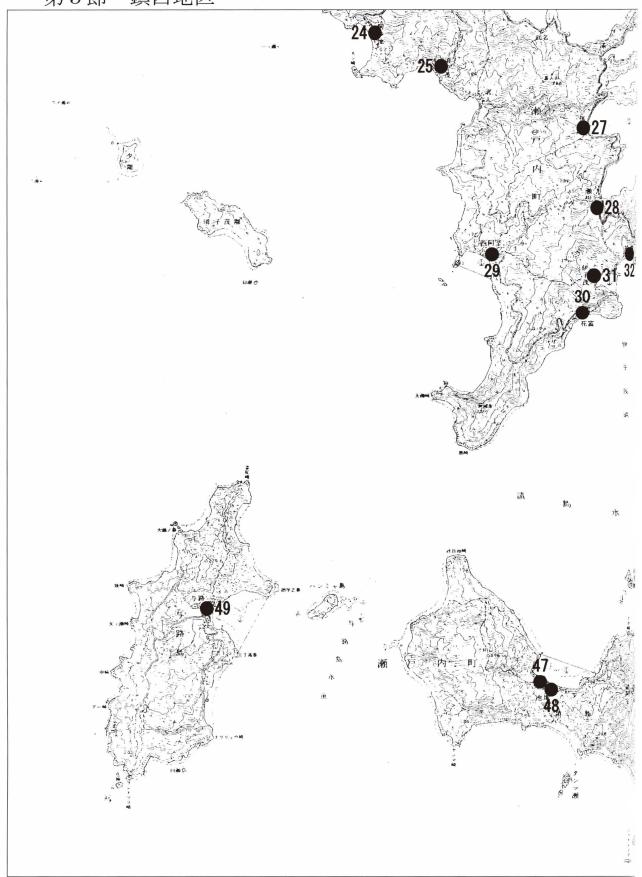
103 西阿室集落遺跡遠景



104 西阿室集落遺物散布地(ミャー)

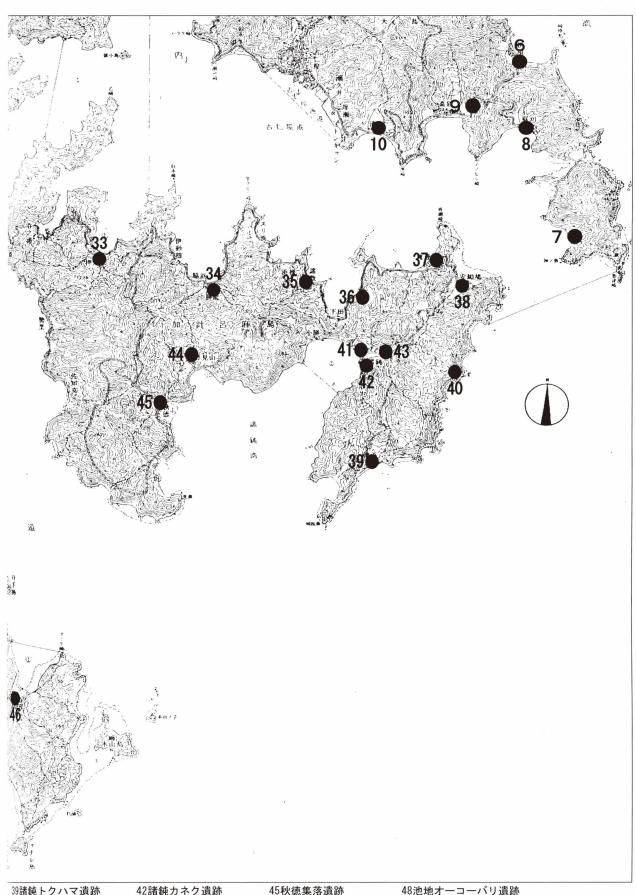


105 西阿室集落遺跡採集資料



第36図 鎮西地区遺跡分布図

30花富ヒラタ遺跡 31伊子茂ナカサト遺跡 32於斉集落遺跡 33押角ムラウチ遺跡 34勝能サト遺跡 35諸数集落遺跡 36生間ミタ遺跡 37渡連ムラウチ遺跡 38渡連アンキャバ遺跡



39諸鈍トクハマ遺跡 40諸鈍城跡 41諸鈍クリ遺跡

42諸鈍カネク遺跡 43諸鈍サト遺跡 44野見山オオサト遺跡 45秋徳集落遺跡 46請阿室集落遺跡 47池地アガンマ遺跡

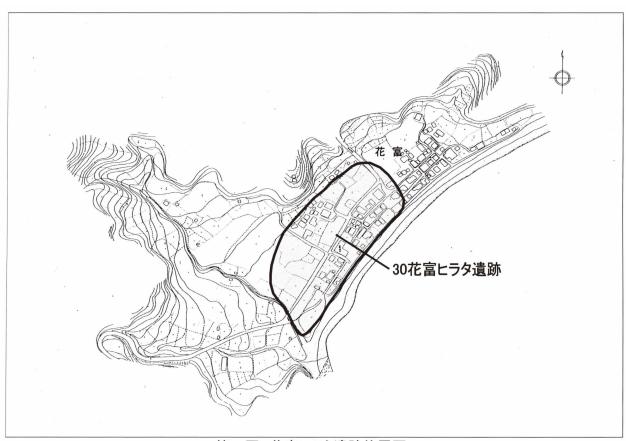
48池地オーコーバリ遺跡 49与路集落遺跡 花富集落

フリ	ガナ	ケドミヒラタ					図面	第37図
遺	东 名	花富ヒラタ					写真	$106 \cdot 107 \cdot 108$
遺跡	番 号	8 7-2 0-0	所	在	地		大良歌滿言	三内町花富平田
(通	番)	(11384)	121	714	76	此几面外	/(四/41/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1/1	1,141,10.田 十田
地	形	砂丘	時		代	縄文・中	世・近世・	・近代
備	考	平成11年農政分布	下調査					
1)H	7	小字名「ヒラタ」						

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度			
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積集	落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考						
	書名 (副書名)					
報告書	編著者名	発行年	月日			
	編集機関 (住 所)					

		調	査	結	果				
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺物	J
縄 文									
中 世		不	明			土	器・青	磁・染付	
近 世									

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



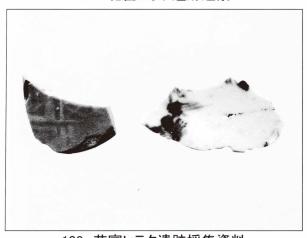
第37図 花富ヒラタ遺跡位置図



106 花富ヒラタ遺跡遠景



107 花富ヒラタ遺跡遺物散布地(ミャー)



108 花富ヒラタ遺跡採集資料

伊子茂集落

0 1/2/	~ I H							
フリ 遺 遇	ガ 赤 名	^{イコモナカサト} 伊子茂ナカサト					図面 写真	第38図 109・110・111・112・113
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	三内町伊子茂
地	形	平地	時		代	縄文・近	世・近代	
備	考							

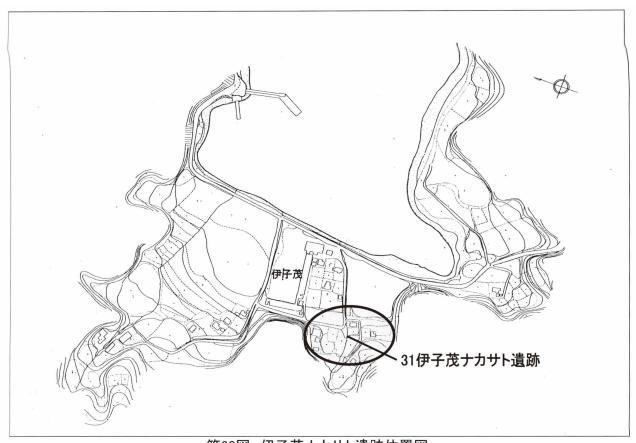
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考						
	書名 (副書名)					
報告書	編著者名	発行生	手 月日			
	編集機関 (住 所)					

	調	查	結	果				
主な時代主	な	遺	構		主	な	遺	物
縄 文								
近 世	不	明				石器	• 染付	

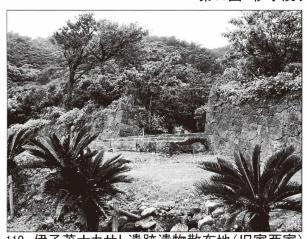
出 土 量 少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----------	---------	--------------



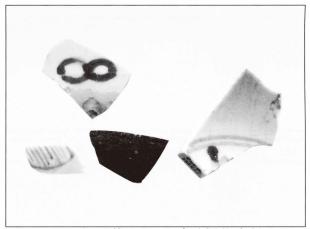
109 伊子茂ナカサト遺跡調査風景



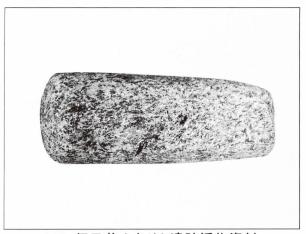
第38図 伊子茂ナカサト遺跡位置図



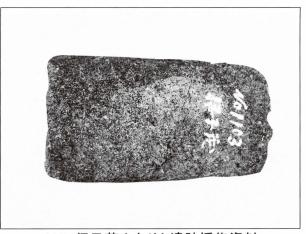
110 伊子茂ナカサト遺跡遺物散布地(旧家西家)



111 伊子茂ナカサト遺跡採集資料



112 伊子茂ナカサト遺跡採集資料



113 伊子茂ナカサト遺跡採集資料

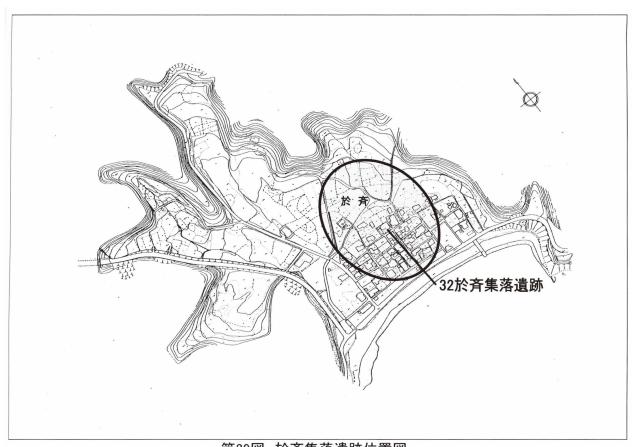
於斉集落

フ リ 遺	ガーナ ケ 名	オサイシュウラク 於斉集落					図面 写真	第39図 114・115		
遺	番 号 番)	8 7-2 2-0 (1 1 3 8 6)	所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町於斉				
地	形	砂丘	時		代	中世・近世・近代				
備	考	平成11年農政分布	市調査							

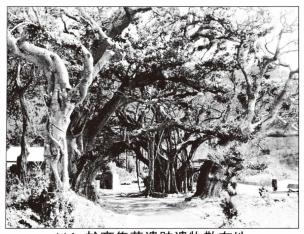
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発 行 年	手月日
	編集機関 (住 所)	·	

	調	查	結	果				
主な時代	主な	遺	構		主	な	遺	物
中世								
近 世	不	明			类	頁須恵器	景・染付	+

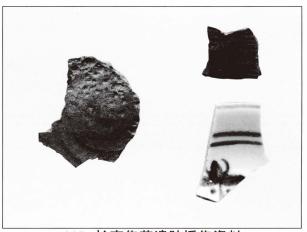
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
	ノ 単	[[] [] [] [] [] [] [] [] [] [



第39図 於斉集落遺跡位置図



114 於斉集落遺跡遺物散布地



115 於斉集落遺跡採集資料

押角集落

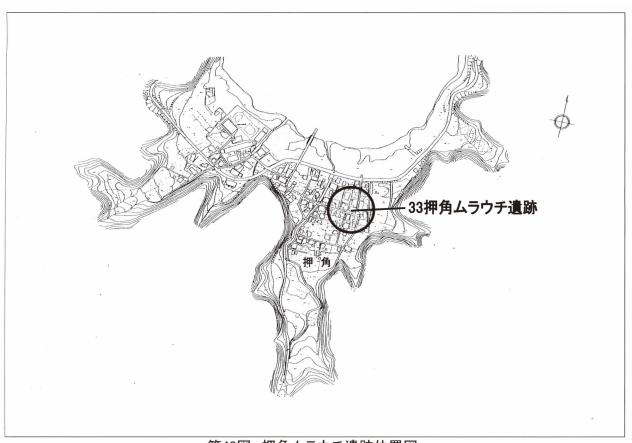
フリ 遺 路	ガ	^{オシカクムラウチ} 押角ムラウチ					図面 写真	第40図 116・117・118		
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県	児島県大島郡瀬戸内町押角			
地	形	平 地	時		代	中世・近世・近代				
備	考									

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落全体	ではなく、ミャー周辺に集中している。
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発行年月日

	調	査	結	果				·
主な時代主	な	遺	構		主	な	遺	物
中世								
近 世	不	明			青	磁・染	付・陶器	2

出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



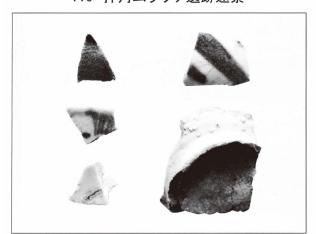
第40図 押角ムラウチ遺跡位置図



116 押角ムラウチ遺跡遠景



117 押角ムラウチ遺跡遺物散布地



118 押角ムラウチ遺跡採集資料

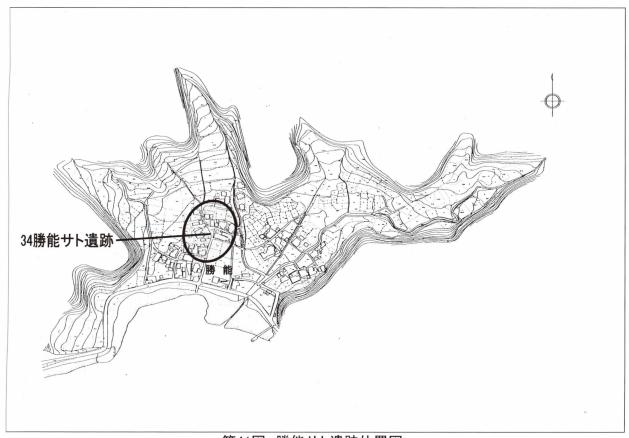
勝能集落

1477 1307 1011										
遺 路	ガ 赤 名	カチュキサト 勝能サト					図面 写真	第41図 119・120・121		
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県	場果大島郡瀬戸内町勝能			
地	形	平 地	時		代	中世・近世・近代				
備	考									

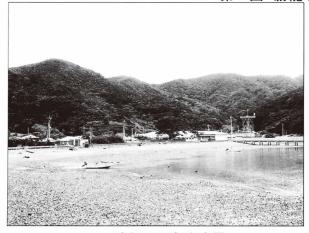
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落全体	ではなく、なのはな園の周辺に集中している。
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住 所)	発 行 年 月 日

	調	查	結	果				
主な時代主	な	遺	構		主	な	遺	物
中 世					=	上器・舞	領須恵器	i F
近 世	不	明				青磁	・陶器	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



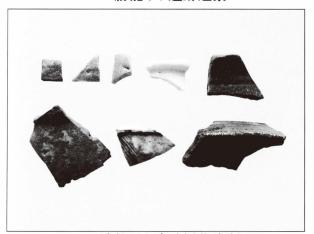
第41図 勝能サト遺跡位置図



119 勝能サト遺跡遠景



120 勝能サト遺跡遺物散布地



121 勝能サト遺跡採集資料

諸数集落

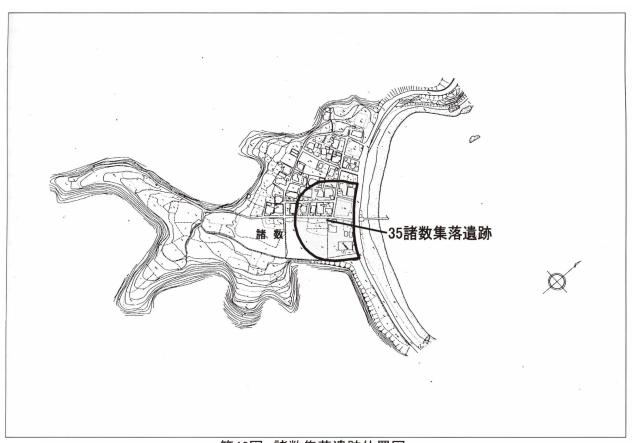
HH JYCZIC TH									
遺 跡	が ナ 名	ショカズシュウラク 諸数集落				図面 写真	第42図 122・123・124		
	番 号		所 在	地	鹿児島県	島県大島郡瀬戸内町諸数			
地	形	平 地	時	代	中世・近世・近代				
備	考								

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度		
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積集	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存			
備考	遺物の散布状況は、集落全体いる。	ではなく、公民館(ミャー)周辺に集中して		
報告書	書名 (副書名) 編著者名	発 行 年	月日		
	編集機関(住所)	I			

	調	査	結	果			
主な時代	主な	遺	構		主な	遺	物
中世					類須恵智	器・青磁	
近世	不	明			青花	• 陶器	

出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



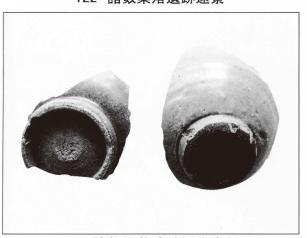
第42図 諸数集落遺跡位置図



122 諸数集落遺跡遠景



123 諸数集落遺跡採集資料



124 諸数集落遺跡採集資料

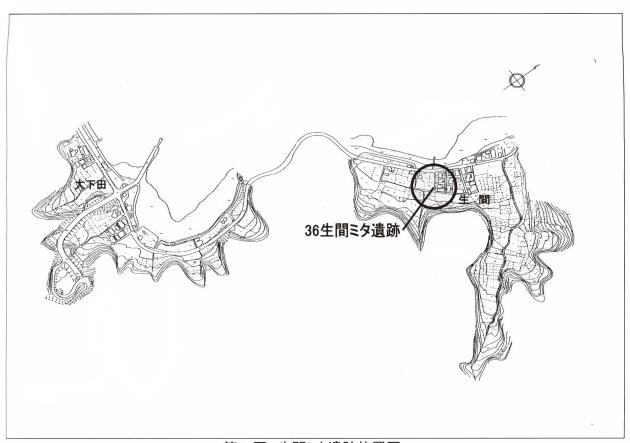
生間集落

フリガ 遺 跡	ナ名	イケンマミタ 生間ミタ					図面 写真	第43図 125・126・127		
遺 跡 番 (通 番	号)		所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町生間				
地	形	平地	時		代	中世・近世・近代				
備	与									

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落全体	ではない。
	書名(副書名)	-
報告書	編著者名	発 行 年 月 日
	編集機関 (住 所)	

		調	査	結	果					
主な時代	主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中 世		^								
近世		不	明			類須	恵器・	青磁•	陶器	

I	出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



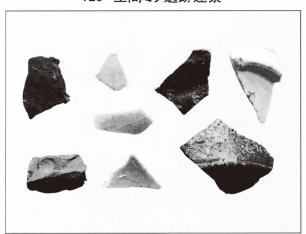
第43図 生間ミタ遺跡位置図



125 生間ミタ遺跡遠景



126 生間ミタ遺跡遺物散布地



127 生間ミタ遺跡採集資料

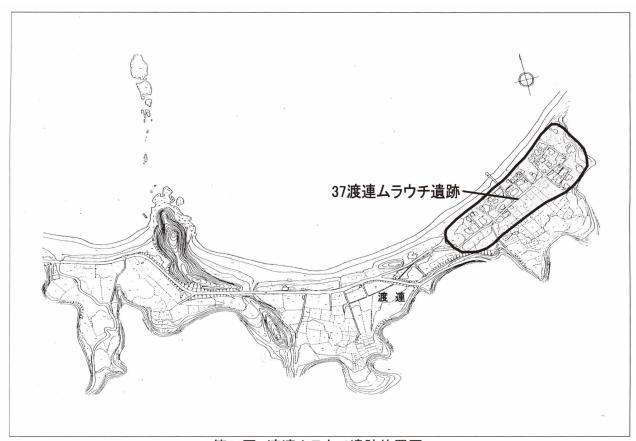
渡連集落

1/	又人工	木竹										
Г	フ	リ	ガ	ナ	ドレンムラウチ					図面	第44図	
L	遺	战	亦	名	渡連ムラウチ					写真	128 • 129 • 130 • 131	
Г	遺	跡	番	号	8 7-2 1-0	所	在	地	鹿児島県大島郡瀬戸内町渡連			
L	(通	番)	(11385)	///	1		дала дал	у с но	177122	
	坩	<u>h</u>	Ŧ	形	砂丘	時		代	古代・中	世・近世	・近代	
	俿	前	į	考	平成11年農政分							

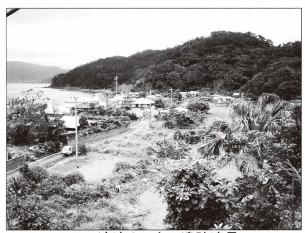
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度				
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺				
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存					
	加工途中と考えられるゴホウ	ラが4点採集できた	こ。ゴホウラの集積遺構が				
備考	存在する可能性がある。	F在する可能性がある。 					
	書名(副書名)						
報告書	編著者名	発行生	平月日				
	編集機関 (住 所)	-	·				

		調	査	結	果				
主な時代	主	な	遺	構		主	な	遺	物
中世						類	須恵器	青磁。	•
近 世		不	明				染付·	陶器•	
							ゴホウ	ラ貝殻	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第44図 渡連ムラウチ遺跡位置図



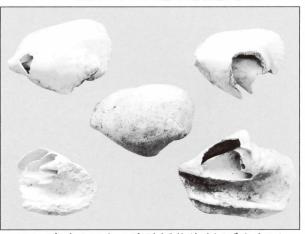
128 渡連ムラウチ遺跡遠景



129 渡連ムラウチ遺跡遺物散布地



130 渡連ムラウチ遺跡採集資料



131 渡連ムラウチ遺跡採集資料(ゴホウラ)

安脚場集落

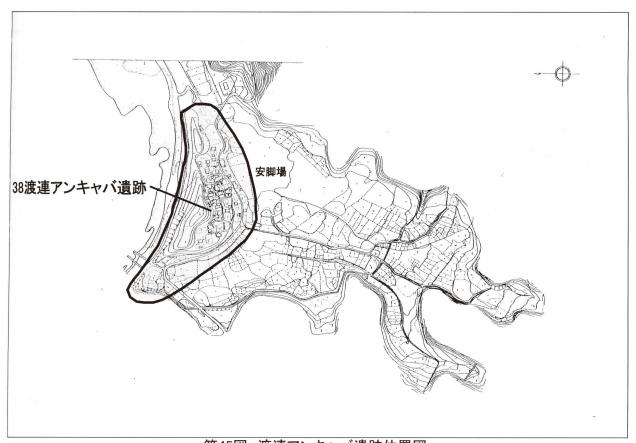
女	~ T LI								
フリ	ガナ	ドレンアンキャバ					図面	第45図	
遺	游 名	渡連アンキャバ					写真	132 · 133 · 134 · 135 · 136	
遺跡	番 号	8 7-1 3-0	所 在 地 鹿児島県				大島郡瀬戸内町安脚場		
(通	番)	(10098)	191	11.	با <u>ن</u>	比儿面不	八四和傾戶[1] 女师物		
地	形	砂丘	時		代	縄文・中	・近代		
備	考	平成11年農政分布	市調査「	仲田	原」を				

調査の種類	分布調査 表面採集訓	農政分布調査 調査	調査	手月 日		年・平成11年度 年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委	員会・瀬戸内町教育委員会	調査	面積	集落とそ	の周辺	
調査起因	埋蔵文化則	け包蔵地の把握	調査後	の措置	現状保存		
備考							
	書名(副書名)	奄美地区埋蔵文化					
報告書	編著者名	長野真一 冨田逸郎			年月日	1990年	
編集機関 鹿児島県教育委員会 (住 所) 鹿児島県鹿児島市鴨池				f町10-	- 1		

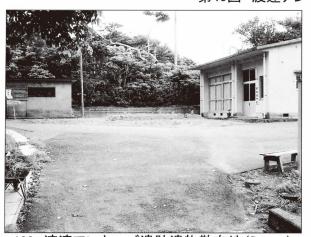
		調	査	結		果				
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物
縄 文					7	「器・条	減文	土器・	面縄前	前庭式土器・
中 世		不	明		募	喜徳式土	:器•	兼久云	七岩岩	• 類須恵器 •
近 世						青	磁·	フイゴ	・染付	・陶器
出十量	را/	量		~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~	·の保 ^を	管場所	瀬	戸内町	. 中國事	館・郷十館



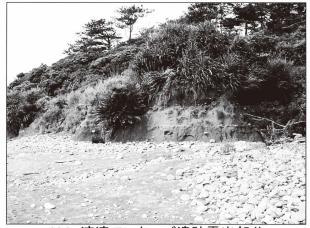
132 渡連アンキャバ遺跡 (郷土館所蔵)



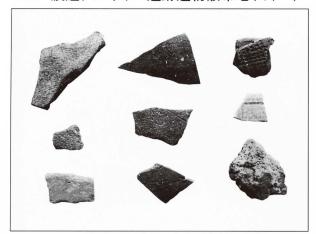
第45図 渡連アンキャバ遺跡位置図



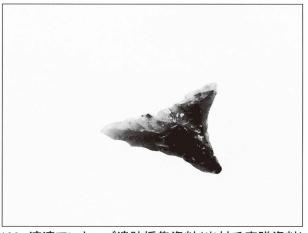
133 渡連アンキャバ遺跡遺物散布地(ミャー)



134 渡連アンキャバ遺跡露出部分



135 渡連アンキャバ遺跡採集資料



136 渡連アンキャバ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)

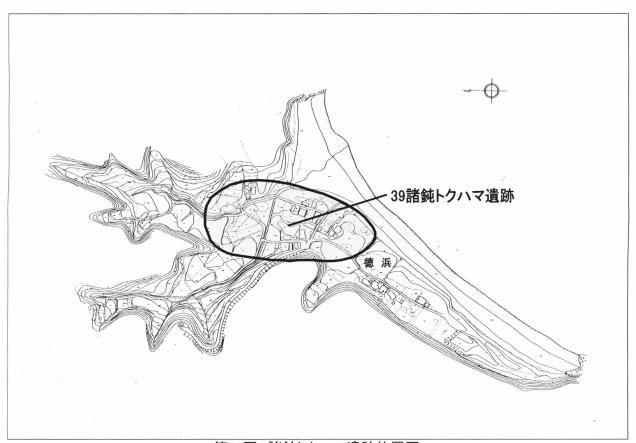
徳浜集落

<u> </u>	/ 1 1													
フ	IJ	ガ	ナ	ショドントクハマ					図面	第46図				
遺	莇		名	諸鈍トクハマ					写真	137 · 138 · 139 · 140				
遺	跡	番	号	8 7-1 5-0	所	在	地	曲旧良旧						
(通	番)	(11379)	ולו	111.	7月9月100000000000000000000000000000000000							
坩	地 形 砂丘		時		代	中世・近	世・近世・近代							
/ċ	±	=	<u> </u>	平成11年農政分布	 方調査									
101	備考			小字名「徳浜原」										

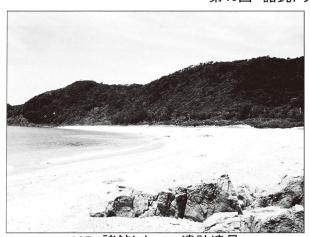
的直。少山场			
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるヤコウ	'ガイが採集できた。 	
	書名(副書名)		
報告書	編著者名	発行年	 月 日
	編集機関 (住 所)	·	·

	調	査	結	果					
主な時代	主な	遺	構		主	な	遺	物	
中世									
近 世	不	明			陶器	・ヤコ	ウガイ	貝殼	

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第46図 諸鈍トクハマ遺跡位置図



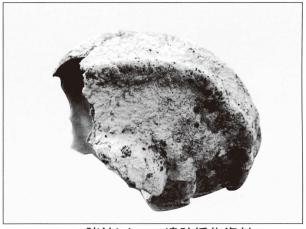
137 諸鈍トクハマ遺跡遠景



138 諸鈍トクハマ遺跡遺物散布地(神社御神体)



139 諸鈍トクハマ遺跡採集資料



140 諸鈍トクハマ遺跡採集資料

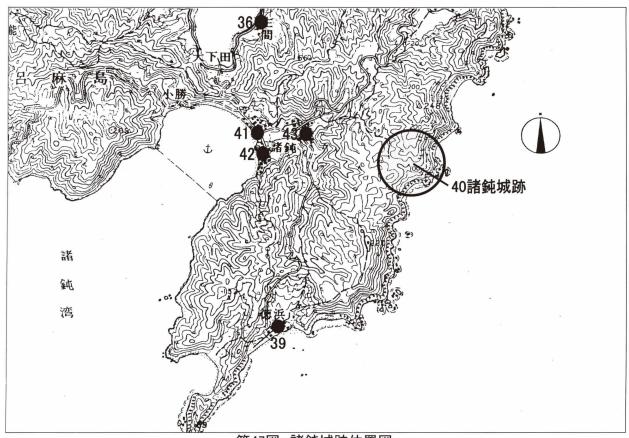
諸鈍集落

HUNCH	<u> </u>										
世 遺	ガ 弥 名	ショドングスクアト 諸鈍城跡					図面 写真	第47図 141・142・143・144			
遺 (通	番 号 番)	8 7-2-0 (1 0 0 7 6)	所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸内町諸鈍				
地	形	山頂	時		代	中世					
備	考	別称「フワームラ	テ」								

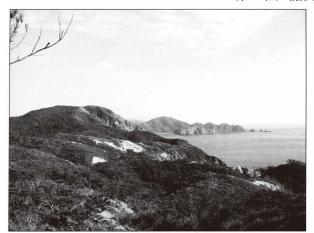
明旦、ひに跳									
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	昭和62年 平成15年度・平成16年度						
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺						
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存						
	現況:山林, 残存度:消滅,	地名:フワームテ							
備考	平成16年度に諸鈍城跡の調査を行った際には、城跡の正確な位置は確認でき								
	かなった。								
	書名 _(副書名) 鹿児島県の中‡								
報告書	編著者名 = 吉永正史・五 三木靖	味克夫 発行 名	手月日 1987年						
	編集機関 鹿児島県教育委 (住 所) 鹿児島県鹿児島	委員会 島市鴨池新町10-	- 1						

	語	直	結結	果				
主 な 時 代	主 た	遺	構		主	な	遺	物
中 世	7	「 明				不	明	

I	出土量	資料の保管場所	



第47図 諸鈍城跡位置図



141 諸鈍城跡遠景



142 諸鈍城跡調査風景(ファームテ)



143 諸鈍城跡調査風景



144 諸鈍城跡調査風景

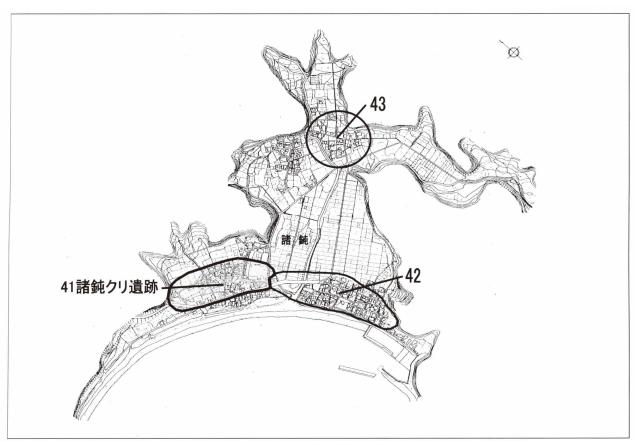
諸鈍集落

HINDINIT											
フリ	ガナ	ショドンクリ					図面	第48図			
遺	亦 名	諸鈍クリ					写真	145 · 146 · 147			
遺跡	番 号	8 7-1 6-0	所	在	地	 鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍					
(通	番)	(11380)	別 住 地 庭兄島泉入島和瀬戸内町宿典 								
地	形	砂丘	時 代 中世・近			中世・近	世・近代				
備	考	平成11年農政分布	市調査								
7/用	与	小字名「繰原」									

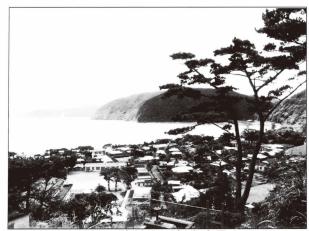
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
	書名 (副書名)		
報告書	編著者名	発行生	 月 日
	編集機関 (住 所)		

		調	査	結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構		主	な	遺	物	
中 世										
近 世		不	明				土器	• 陶器		

出 土 量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第48図 諸鈍クリ遺跡位置図



145 諸鈍クリ遺跡遠景



146 諸鈍クリ遺跡遺物散布地(大屯神社)



147 諸鈍クリ遺跡採集資料

諸鈍集落

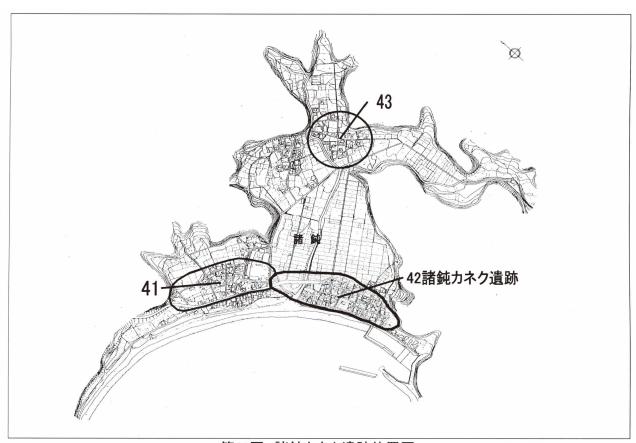
フリガナ 遺跡 名	ショドンカネク 諸鈍カネク					図面 写真	第49図 148・149・150・151		
遺 跡 番 号 (通 番)	8 7-1 7-0 (1 1 3 8 1)	所	在	地	鹿児島県	島県大島郡瀬戸内町諸鈍			
地 形	砂丘	時		代	中世・近世・近代				
備考	平成11年農政分布 小字名「金久原」	市調査							

調査の記録

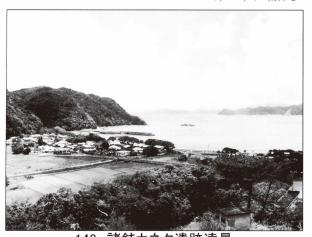
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成 1 1 年度 平成15年度・平成16年度			
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存				
備考						
	書名(副書名)					
報告書	編著者名	発 行 名	手月日			
	編集機関 (住 所)					

	調	查	結	果				
主な時代	主な	遺	構		主	な	遺	物
中世				土器・類須恵器				
近 世	不	明				青磁	• 陶器	

出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



第49図 諸鈍カネク遺跡位置図

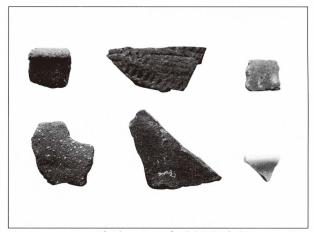




150 諸鈍カネク遺跡遺物散布地(ミャー)



149 諸鈍カネク遺跡遺物散布地(旧家林家)



151 諸鈍カネク遺跡採集資料

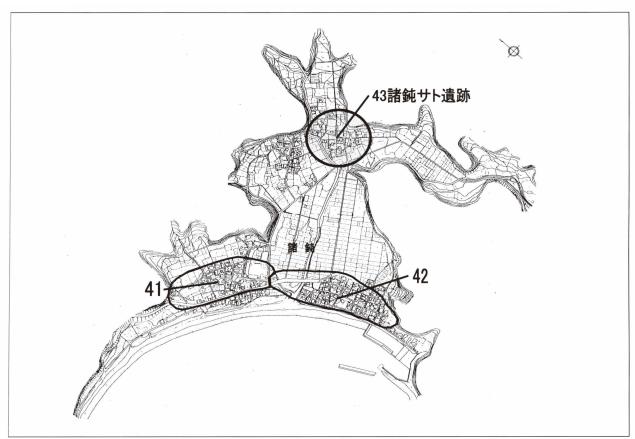
諸鈍集落

HUNCIL								
フリガ	ナ	ショドンサト					図面	第50図
遺跡	名	諸鈍サト					写真	152 · 153
遺 跡 番 (通 番			所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	可力町諸鈍
地	形	平地	時		代	中世・近	世・近代	
備	考	小字名「里原」						

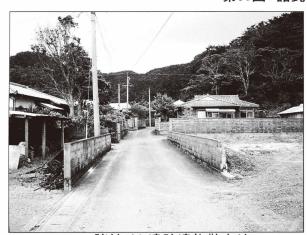
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
	書名(副書名)		
報告書	編著者名	発行生	 月 日
	編集機関 (住 所)	•	·

	調	查	3	結	果					
主な時代主	な	遺	構			主	な	遺	物	
中世						Е	二器・类	頁須恵器	뭄	
近世	不	明				青	磁・染	付・陶	器	
							寛永	通宝		

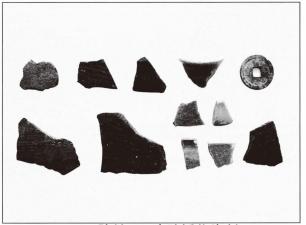
出 土 量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第50図 諸鈍サト遺跡位置図



152 諸鈍サト遺跡遺物散布地



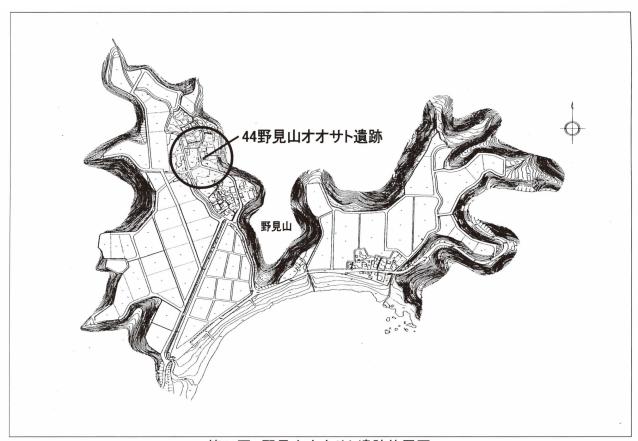
153 諸鈍サト遺跡採集資料

野見山集落

-1701117	~11							
フリ 遺 過	ガ 跡 名	ノミヤマオオサト 野見山オオサト				,	図面 写真	第51図 154・155・156
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	5内町野見山
地	形	平地	時		代	中世・近	世・近代	
備	考							

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度		
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存		
備考	遺物の散布状況は、集落全体	ではなく、公民館周辺に集中している。		
+11 <i>(</i> + - 3 -	書名(副書名)			
報告書	編著者名	発行年月日		
	編集機関 (住 所)			

	詩	査	結	果		
主 な 時 代	主な	造	構	Ξ	主な	遺物
中世				滑石混入土器・類須恵器		
近 世	不	明			青磁・染	付・陶器
出土量	少	量	資料の何	呆管場所	瀬戸内町	「立図書館・郷土



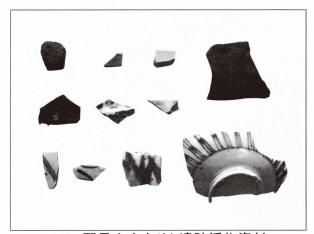
第51図 野見山オオサト遺跡位置図



154 野見山オオサト遺跡遠景



155 野見山オオサト遺跡遺物散布地



156 野見山オオサト遺跡採集資料

秋徳集落

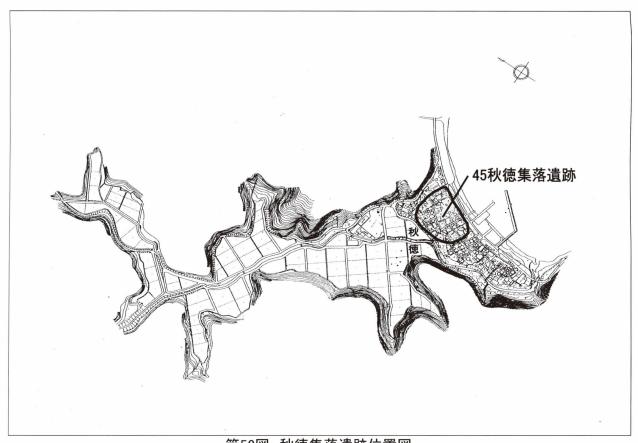
	7							
フリ	ガナ	アキトクシュウラク					図面	第52図
遺	亦 名	秋徳集落					写真	157 · 158
遺 (通	番 号 番)		所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	可内町秋徳
地	形	砂丘	丘 時 代 中世・近世・近代					
備	考							

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日 平成15年度・平成16年度					
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積 集落とその周辺					
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置 現状保存					
	遺物の散布状況は、集落のある砂丘全体ではなく、公民館周辺に集中し						
備考	いる。						
	骨製品が採集できた。						
	書名 (副書名)						
報告書	編著者名	発 行 年 月 日					
	編集機関 (住 所)						

	調査	結 果
主 な 時 代	主な遺	構主な遺物
中 世		
近 世	不明	青磁・陶器・骨製品
		,
		70 10 0 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10

出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



第52図 秋徳集落遺跡位置図



157 秋徳集落遺跡遺物散布地



158 秋徳集落遺跡採集資料

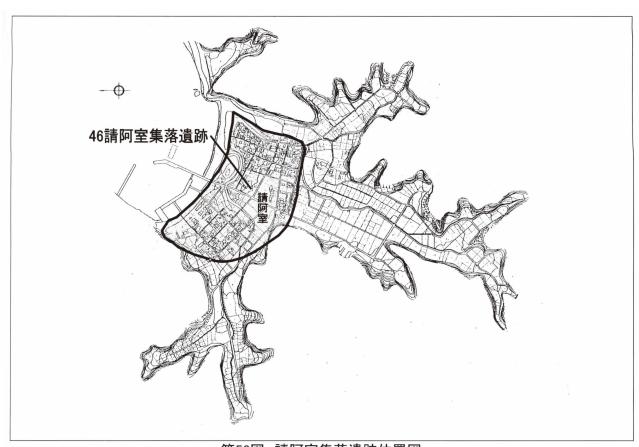
請阿室集落

H111 1	<u> </u>	- 1 11									
遺	IJ R	ガ 亦	ナ 名	ウケアムロ: 請阿室集						図面	第53図 159・160・161・162
思	Щ)),	4	明門 王身	尺份					写真	139 - 100 - 101 - 102
遺 (跡 通	番番	号)			所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	三内町請阿室
‡	也	Ŧ	形	砂	丘	時		代	古代・中	世・近世	• 近代
ĺ	前	ā	考								

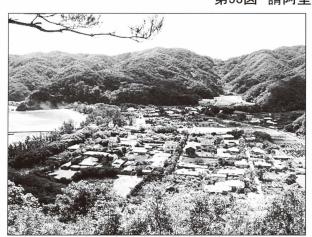
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるゴホウ	ラが採集できた。	
	書名(副書名)		
報告書	編著者名	発 行 4	手月日
	編集機関 (住 所)	·	

		調	查		結	果					
主 な 時 代	主	な	遺	構			主	な	遺	物	
古 代							兼久云	岩土力	・類須原	恵器・	
中 世		不	明					青磁・	染付·		
近 世							陶岩	号・ゴス	トウラ貝	貝殼	

出:	土 量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第53図 請阿室集落遺跡位置図



159 請阿室集落遺跡遠景



160 請阿室集落遺跡遺物散布地



161 請阿室集落遺跡採集資料



162 請阿室集落遺跡採集資料(ゴホウラ)

池地集落

100	<u> </u>									
遺	リ 助	ガ 介	ナ 名	イケジアガンマ 池地アガンマ					図面 写真	第54図 163・164・165・ 166・167・168
遺	跡 通	番番	号)	8 7-1 8-0 (1 1 3 8 2)	所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	5内町池地
爿	乜	Ŧ	形	砂丘	時		代	古代・中	世・近世・	·近代
俳	青	<u> </u>	考	平成11年農政分を 小字名「アカンマ」						

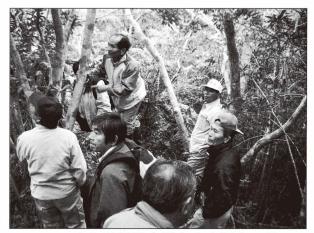
調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるゴホウ	プラが採集できた。	
	書名 (副書名)		,
報告書	編著者名	発行生	手月日
	編集機関 (住 所)		

	調	査	結	果
主な時代主	な	遺	構	主な遺物
中 世				土器・布目圧痕土器
近 世	不	明		類須恵器・青磁・白磁・
				染付・陶器・ゴホウラ貝殻

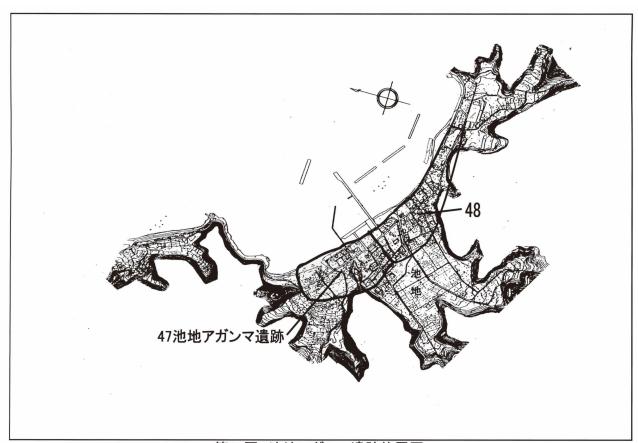
出土量 少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
--------	---------	--------------



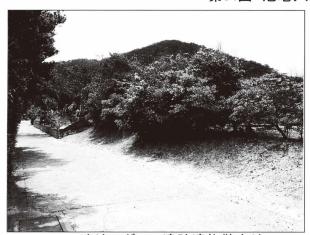
163 琉球大学地学巡検(チャート露出地点)



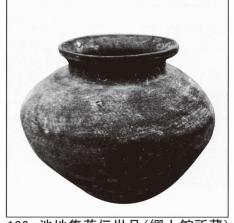
164 文化財保護審議会大山調査風景



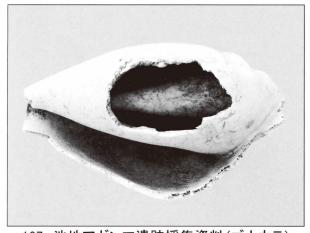
第54図 池地アガンマ遺跡位置図



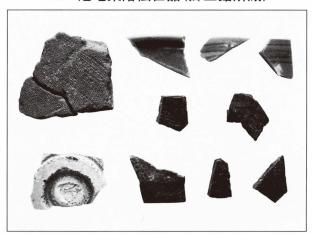
165 池地アガンマ遺跡遺物散布地



166 池地集落伝世品(郷土館所蔵)



167 池地アガンマ遺跡採集資料(ゴホウラ)



168 池地アガンマ遺跡採集資料

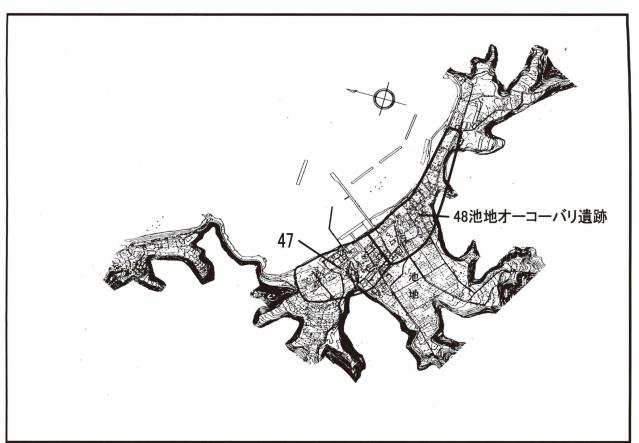
池地集落

10,07611								
フリ 遺 過	ガ 赤 名	イケジオーコーバリ 池地オーコーバ!	J				図面 写真	第55図 169・170・171
遺 (通	番 号 番)	8 7-1 9-0 (1 1 3 8 3)	所	在	地	鹿児島県		5内町池地
地	形	砂丘	時		代	中世・近	世・近代	
備	考	平成11年農政分布 小字名「オコバリ」						

明旦。クロ欧			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·				
調査の利	重 類	農政分布 表面採集		調査	手月 日		元成11年度 年度・平成16年度
調査機	差関	鹿児島県教育委	5員会・瀬戸内町教育委員会	調査	面積	集落とそ	の周辺
調査起	因	埋蔵文化	財包蔵地の把握	調査後	の措置	現状保存	
備	考						
		書名 (副書名)					
報告	書	編著者名			発行金	平月日	
		編集機関					

	調	查	結	果				
主 な 時 代 主	な	遺	構		主	な	遺	物
中 世								
近 世	不	明			土	器・染	付・陶器	器

出 土 量 少 量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



第55図 池地オーコーバリ遺跡位置図



169 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地



170 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地



171 池地オーコーバリ遺跡採集資料

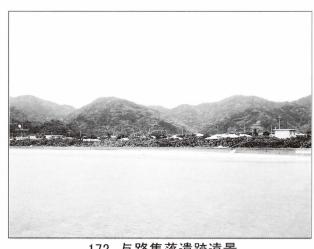
与路集落

J PH / CTH									
フリガ 遺 跡		ロシュウラ F路集落						図面 写真	第55図 172・173・174・175・176
遺 跡 番 (通 番	号)			所	在	地	鹿児島県	大島郡瀬戸	「内町与路
地 形		砂」	丘	時		代	古代・中	世・近世・	近代
備考			館展示図		J				

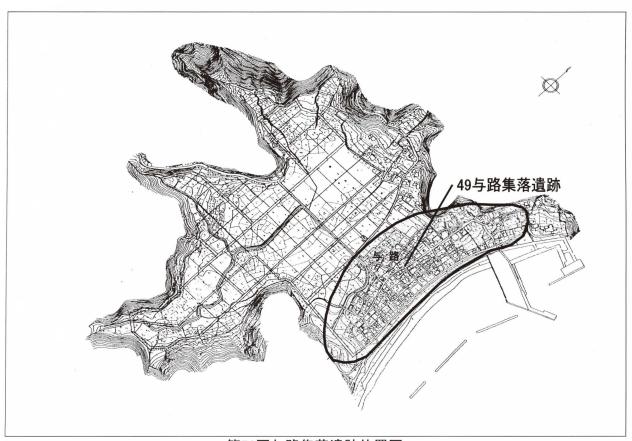
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるゴホウ	7ラが採集できた。	
	書名 (副書名)	_	
報告書	編著者名	発行生	 月 日
	編集機関 (住 所)		

		調	査	Ť	結	果					·
主 な 時 代	主	な	遺	構		Ξ	È	な	遺	物	
中 世						スセ	ン當	式土器	・兼久	式土器・	
近 世		不	明			類須恵	(器・	青磁•	白磁・	褐釉陶器	
						青花・南	薩摩姆	を・ 壷屋	屋焼・コ	「ホウラ貝	見殻
Ш 1. Е.	.15	. FI.		\/ fr.t	nlot a /		145	<u> </u>	나교크	₩ \\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	1 &+

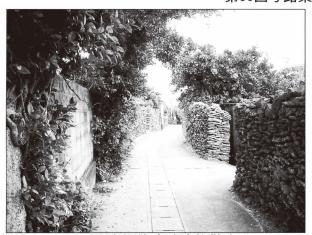
出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



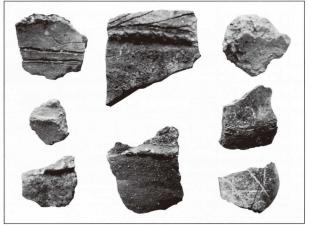
172 与路集落遺跡遠景



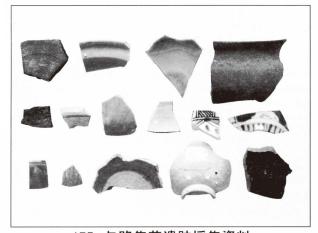
第56図与路集落遺跡位置図



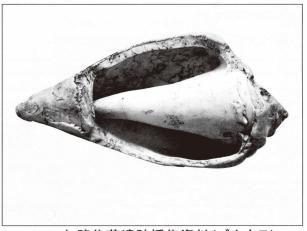
173 与路集落遺跡遺物散布地



174 与路集落遺跡採集資料



175 与路集落遺跡採集資料



176 与路集落遺跡採集資料(ゴホウラ)

第6節 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧

表2 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧表

古仁屋地区

所在集落 所在地詳細 部隊 施設 備考 文献初 阿木名 時部隊(陸軍) 糧秣倉庫管理ほか 昭和20年月 阿木名 海軍防備隊 昭和20年月 阿木名 海軍航衛隊 田村隊 阿木名 第2740部隊(40部隊) 田村隊 阿木名 独立混成第22連隊第3大隊 田村隊 阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 阿木名 海岸線一帯 昭和19年月 阿木名 海岸・山腹 坪兵約100名 昭和19年月 阿木名 海岸・山腹 坪兵約100名 昭和19年月 阿木名 接方山頂 陸海・空最後の砦として構築 昭和20年月 阿木名 機銃陣地 原本の場として構築 田和20年月 阿木名 東落から1時間ほどの山中 無線基地 原子所属 昭和19年月 阿子花崎 見張所 海軍所属 昭和19年月 阿子花崎 機銃陣地 第年所属 昭和19年月 阿子花崎 東上挺進基地第11大隊の一部 第566部隊・隊長卓野義 配備20年3 阿弥 海上挺進基地第29大隊の一部 第66部隊・隊長卓野義 配和20年3 京 東京第5566部隊・隊長卓野義 配和20年3 計算 阿弥 海上援進基地第29大隊の一部 東京第50	
阿木名 防衛隊(現地召集) 各部隊に配属・陣地構築ほか 昭和20年度 阿木名 海軍航空隊基地阿木名派遣隊 一 阿木名 第2740部隊(40部隊) 田村隊 阿木名 独立混成第22連隊第3大隊 田村隊 阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 昭和19年度 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 海岸・山腹 投郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 田和20年度 阿木名 長落から1時間ほどの山中 無線基地 田和20年度 阿子花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿子花崎 機銃陣地 下上挺進基地第11大隊の一部 下日本年度 日本日本度 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 阿姓 第25066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 阿姓 第25066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 阿姓 第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	
阿木名	
阿木名 海軍防備隊 (回来名 第2740部隊(40部隊) 四木名 第2740部隊(40部隊) 四木名 第2740部隊(40部隊) 四木名 四木名 四木名 四木名 四木名 四末名 四末名 四末名 四末名 四末名 四末名 一次事件 四十二 四十二 <td></td>	
阿木名 海軍航空隊基地阿木名派遣隊 阿木名 第2740部隊 (40部隊) 阿木名 独立混成第22連隊第3大隊 阿木名 四藤壕 阿木名 四藤草 阿木名 一次 阿大本 一次 阿子花崎 一次 阿共本 一次 阿共本 一次 阿子花崎 一次 阿共本 一次 阿子花崎 一次 阿子花崎 一次 阿子花崎 一次 阿子木 「中央 大阪	
阿木名 第2740部隊(40部隊) 阿木名 独立混成第22連隊第3大隊 阿木名 四村隊 阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 昭和19年度 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十 日本 日本 </td <td></td>	
阿木名 独立混成第22連隊第3大隊 田村隊 阿木名 隠蔽壕 昭和19年原 阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 昭和19年原 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十 阿木名 集落から1時間にどの山中 無線基地 田和19年度 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 機銃陣地 原長石川芳春陸軍少尉以下保証 配備120年度 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 阿姓 海上投進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義	
阿木名 隠蔽壕 昭和19年度 阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 海軍部隊非常用 昭和19年度 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十 阿木名 集落から1時間ほどの山中 無線基地 田和19年度 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 機銃陣地 「家長石川芳春陸軍少尉以下日本の一部」 「京長石川芳春陸軍少尉以下日本の一部」 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 「球第15066部隊・隊長卓野義」 昭和20年3年度	
阿木名 海岸線一帯 対戦車壕陣地 昭和19年度 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十 阿木名 集落から1時間ほどの山中 無線基地 四月花崎 四月花崎 月張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 昭和19年度 日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本	
阿木名 糧秣倉庫 海軍部隊非常用 昭和19年度 阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十 阿木名 集落から1時間ほどの山中 無線基地 四月花崎 四月花崎 月張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 機銃陣地 下上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 原鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	
阿木名 海岸・山腹 迎撃陣地 将兵約100名 昭和20年度 阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 四十名 阿木名 集落から1時間ほどの山中 無線基地 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 機銃陣地 下日本 阿野花崎 機銃陣地 下日本 阿田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	
阿木名 後方山頂 複郭陣地 陸・海・空最後の砦として構築 昭和20年度 阿木名 機銃陣地 阿木名 東落から1時間ほどの山中 無線基地 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年度 阿丹花崎 機銃陣地 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 隊長石川芳春陸軍少尉以下日本 17名 原鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3 原鉄 第2年7年末井林第20本隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義	
照本名 接対単地	
阿木名 複合 阿木名 集落から1時間 ほどの山中 無線基地 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年月 阿丹花崎 機銃陣地 隊長石川芳春陸軍少尉以下 47名 昭和20年3 配備 阿針 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)
阿木名 集落から1時間 ほどの山中 無線基地 海軍所属 昭和19年月 昭和19年月 阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年月 昭和19年月 阿共花崎 機銃陣地 隊長石川芳春陸軍少尉以下 47名 昭和20年3 配備 阿針 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	(3) (1)(1)(4) (1)
阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年月 阿丹花崎 機銃陣地 隊長石川芳春陸軍少尉以下 昭和20年3 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	1004
阿丹花崎 見張所 海軍所属 昭和19年原 阿丹花崎 機銃陣地 隊長石川芳春陸軍少尉以下 昭和20年3 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	1004
阿丹花崎 機銃陣地 阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 隊長石川芳春陸軍少尉以下 昭和20年3 配備 原鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	10
阿鉄 海上挺進基地第11大隊の一部 隊長石川芳春陸軍少尉以下 昭和20年3 10 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	B15D
阿欽 海上挺進基地第11人隊の一部 47名 配備 Ind 家上挺進其地第20土港の一部 球第15066部隊・隊長卓野義 昭和20年3	- 13 F 1
原分	H 13 D 12 S B
<u> </u>	月15日 1253
	1/2/3/6
球第19768部隊・隊長山本久徳陸軍大尉・隊員88名(戦隊41名・整備隊47名)昭和20年10月26日に広島県宇品にて編成、昭和20年1月18日に宇宙より沖縄に向け出航、天候悪化により奄美大島へ寄航。沖縄への航行不能となったため3月15日阿鉄に基地をおく。出撃待機のまま終戦。(典拠⑨)	月15日 ①②⑤⑩ ⑬
中隊長重田正陸軍中尉以下 昭和20年3 41名・マルレ特攻艇40隻 配備 四野ス た 世 世 120年3	102311
網野子 海岸一帯 迎撃散兵壕 昭和19年月 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日	
伊須 防衛隊(現地召集) 監視・連絡・陣地構築 昭和20年月 伊須 ※軍の上陸への備え 昭和20年月	
伊須 伊須湾奥、阿 大名川上流 複郭陣地 須手配備の第951海軍基地 航空隊古仁屋派遣隊が構築 昭和20年6	
伊須カノン砲陣地	10
伊須 散兵壕	10
ウラソコ 軍用桟橋 皆津崎砲台陣地との連絡用 大正10年月	
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年	
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 本美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 四和16年1	₹ ①
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年	1
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 おおおいます ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	受 ① 0月ごろ ①②
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長丸子正一陸軍中尉 昭和16年1 配備 中隊長桑久保邦男陸軍大局・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連 日の奄美大島要塞重砲兵連 昭和17年9	き ① 0月ごろ ① 2 月配備 ①25
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長丸子正一陸軍中尉 昭和16年1日 市隊長桑久保邦男陸軍大隊 中隊長桑久保邦男陸軍大局・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 田和17年9日	き ① 0月ごろ ① 2 月配備 ①25
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長丸子正一陸軍中尉 昭和16年1日 古津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第4中隊 中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要率重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要率重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要率重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島要率重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本和17年9日24日の金美大島を設定している。 日本17年9日24日の金美大島を設定している。 日本17年9日24日の金美大島を設定している。 日本17年9日24日の金美大島を設定している。 日本17年9日24日の金美大島を設定している。 日本17年9日の金美大島を設定している。 日本1	き ① 0月ごろ ① 2 月配備 ①25
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第6中隊 中隊長桑久保邦男陸軍大院第6中隊 中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本日の金美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本日の金美大島である 日本日の金属を表しておよりである 日本日の金庫である 日本日の	を ① ①月ごろ ①② 月配備 ①②5 を ① ①
ウラソコ 皆津崎毎美大島要塞重砲兵連隊第2大隊水軍上陸への備え 隊長岩本陸軍少佐 中隊長丸子正一陸軍中尉 中隊長桑久保邦男陸軍大隊第6中隊昭和16年1 配備皆津崎奄美大島要塞重砲兵連隊第2大 隊第6中隊中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備皆津崎海軍防備隊派遣隊将兵約20名 約60名昭和20年度 第24年間皆津崎要塞野砲隊八木隊皆津崎管津崎24cm榴弾砲4門 第60名大正10年1皆津崎皆津崎第1砲台大正10年1	を ① ①月ごろ ①② 月配備 ①②⑤ ② ① ① ① ① ① ① ① ② ② ② ② ② ② ② ③ ② ③ ② ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③ ③
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長桑久保邦男陸軍大院等の4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 中隊長桑久保邦男陸軍大院衛 皆津崎 海軍防備隊派遣隊 将兵約20名 昭和17年9日 皆津崎 ウラソコ海軍電波探知機隊 約60名 田和20年度 皆津崎 世球局 24cm福弾砲4門 大正10年1日 皆津崎 世津崎第2砲台 大正10年1日 大正10年1日 皆津崎の表備として) 大正10年1日 大正10年1日	度 ① 0月ごろ ① 2 月配備 ①25 度 ① ⑩ ⑪ 1月着工 ①25⑦ 1月着工 ①25⑦
ウラソコ 皆津崎毎美大島要塞重砲兵連隊第2大隊隊長岩本陸軍少佐大正10年度皆津崎奄美大島要塞重砲兵連隊第2大 隊第6中隊中隊長丸子正一陸軍中尉 中隊長桑久保邦男陸軍大 尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連 隊の部隊縮小後の配備昭和17年9 昭和17年9 日の奄美大島要塞重砲兵連 隊の部隊縮小後の配備皆津崎海軍防備隊派遣隊 ウラソコ海軍電波探知機隊 皆津崎将兵約20名 約60名 八木隊昭和20年度 日本町20年度 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月 大正10年月	度 ① 0月ごろ ① 2 月配備 ① ② 5 度 ① ⑩ 1月着エ ① ② ⑤ ⑦
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 田和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 日本17年9日24日ので第2年日ので書業重修の部を紹介を表するとのの主義を表するとの表す。 日本17年9日24日ので書業を表するます。 日本17年9日24日ので書業を表するよどの表す。 大正10年1日の本書をおよりの表備としてのます。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の本書を表するとの表す。 大正10年1日の主意を表するとの表す。 大正10年1日の主意を表する。 大正10年1日の主意を表する	度 ① 0月ごろ ① 2 月配備 ① ②5 度 ① 0 1月着工 ① ②57 1月着工 ① ②57 ほ ① ① 0 1月 1 ① ② 57 1月 1 ① ② 57 1
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第6中隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第6中隊 中隊長東7正一陸軍中尉昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和20年度 皆津崎 海軍防備隊派遣隊 将兵約20名 昭和20年度 日本約20名 日本約20名 <td>度 ① 0月ごろ ① 2 月配備 ① ②5 度 ① 0 1月</td>	度 ① 0月ごろ ① 2 月配備 ① ②5 度 ① 0 1月
ウラソコ 海岸・山腹一帯 迎撃陣地 米軍上陸への備え 昭和20年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 隊長岩本陸軍少佐 大正10年度 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊 中隊長丸子正一陸軍中尉 配備 皆津崎 奄美大島要塞重砲兵連隊第4中隊 中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 昭和17年9日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備 皆津崎 海軍防備隊派遣隊 将兵約20名 昭和20年度 皆津崎 ウラソコ海軍電波探知機隊 約60名 八木隊 皆津崎 世寨野砲隊 人本面10年1日 大面10年1日 皆津崎 世津崎第2砲台 大面10年1日 大正10年1日 皆津崎 弾薬庫 弾薬庫2箇所 大正10年1日 皆津崎 中域元を活発所1、正式名称「掩蓋式観測所」(篠崎連男氏より徳永茂二氏宛書所による) 大正10年1日 皆津崎 東城・武・武・武・武・武・大正10年1日 大正10年1日 皆津崎 東城・武・武・武・武・武・武・大正10年1日 大正10年1日 「大正10年1日 大正10年1日 大正10年1日 「大正10年1日 大正10年1日 大正10年1日 「大正10年1日 大正10年1日 大正10年1日 「大田10年1日 大正10年1日 大正10年1日 「大田10年1日 大田10年1日 大田10年1日 「大田10年1日 大田10年1日 大田10年1日 「大田10年1日	を ① 0月ごろ ① 2 月配備 ① 2 5 更 ① 0 1 1月着工 ① 2 5 1 1月着工 ① 2 5 7 を ① 0 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

皆津崎	I		官舎			10
皆津崎			機銃陣地	約15名		10
皆津崎			探照灯	M.1.0.1		10
勝浦	山腹·山頂付近		迎撃陣地		昭和19年度	1
勝浦	海岸線一帯		対戦車壕		昭和19年度	1
勝浦	海岸線		散兵壕			10
嘉鉄	海岸·山腹一帯		迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	1
嘉徳	鳥の峰山	陸軍対空監視隊			昭和20年度	110
嘉徳			迎撃陣地		昭和20年度	1
嘉徳			散兵壕		昭和20年度	1
久根津			海軍航空隊秘密基地	瑞雲水上爆撃機待機繋留	昭和19年度	1210
久根津			兵舎	搭乗将兵宿泊用	昭和19年度	110
小名瀬			特攻艇繋留基地	阿鉄挺進第29戦隊所属艇約	昭和20年度	(1)(10)
古仁屋		陸軍策域如本美士息	14 MACKET E-10	30隻		(1)(5)
	現古仁屋高校	陸軍築城部奄美大島支部		 要塞司令官井上二一陸軍大	大正9年10月開庁	1245
古仁屋	敷地	奄美大島要塞司令部		佐	昭和19年5月廃止	10(13(14)
古仁屋		奄美大島要塞重砲兵連隊		西部第2740部隊、連隊長宮 内陽輔陸軍大佐、2個大隊6 個中隊の甲編成、現役兵と 予備兵の混合部隊、総員約 1400名(典拠②)・昭和19年5 月15日に「重砲兵第6連隊」 に改称	昭和16年9月編成	24510 (4)
古仁屋		奄美大島要塞憲兵古仁屋分遣隊		隊長中條好憲兵少尉(典拠 ①)·志賀憲兵上等兵(典拠 ⑤)	昭和16年9月編成	124
古仁屋		軍令憲兵奄美派遣隊		要塞司令部内駐屯	昭和16年度	1
古仁屋		憲兵隊(勅令·軍令)				10
古仁屋	瀬久井	奄美大島要塞歩兵第19部隊		春田隊・約350名	昭和16年度	110
古仁屋	瀬久井	奄美大島要塞歩兵第28中隊		西部第19部隊·中隊長東陸軍中尉(典拠⑤)·中隊長春田陸軍中尉以下120名(典拠①)	昭和16年9月編成	124
古仁屋		奄美大島要塞歩兵第119部隊		春田隊(約120名)	昭和16年度	1
古仁屋	大湊	奄美大島要塞無線通信隊			昭和16年度	1
古仁屋		奄美大島要塞通信隊			昭和16年9月	4
古仁屋		陸軍無線通信隊				10
古仁屋		陸軍無線有線通信隊				(10)
古仁屋		第32軍航空情報隊		隊長江頭千年陸軍少尉	昭和18年度	<u>(1)</u>
古仁屋		陸軍船舶部隊気象班		隊長谷口勝久陸軍中尉(晚部隊)	昭和18年度	110
古仁屋		兵器廠船舶工兵第26連隊第3中		球第16744部隊·隊長篠田直 也陸軍少尉	昭和19年10月ごろ	1)(2)(10)
		<u>隊1小隊(暁部隊)</u>		也陸軍少尉		
古仁屋		船舶忠勇隊(救難隊)			昭和19年度	①③ ①
古仁屋		大本営陸軍部特務隊第2特務班		隊長石井直行陸軍中尉 球第7077部隊·中隊長久保	昭和19年度	
古仁屋	キャンマ山	特設警備第222中隊		井米栄陸軍中尉・126名	昭和19年度	1213
古仁屋		特設水上勤務第102中隊		球第8885部隊·中隊長田中 良男陸軍中尉·736名	昭和19年度	1)13
古仁屋		独立混成第22連隊第7中隊		球第7154部隊·隊長大石洋 陸軍中尉	昭和19年10月ごろ	12
古仁屋		—————————————————————————————————————		隊長関仁太郎陸軍中尉	昭和19年度	1
古仁屋		重砲兵第6連隊		「奄美大島要塞重砲兵連隊」 を改称・球2740部隊・連隊長 宮内陽輔陸軍大佐(昭和19 年7月より末松五郎陸軍中 佐)昭和19年3月に沖縄に第 32軍(球軍)創設、奄美大島 要塞各部隊もその下に編入 される	昭和19年5月15日 改称	25
古仁屋		沖縄憲兵古仁屋分遣隊		10名	昭和20年8月	213
古仁屋		船舶気象隊古仁屋班		谷口勝久陸軍中尉	昭和20年8月	25
古仁屋		船舶通信独立第2大隊第2中隊第 3小隊 陸軍要塞電波警戒隊		小隊長嘉納大信陸軍少尉	昭和20年8月	2(13)
古仁屋		<u>比千久坐电似言</u>	 軍用桟橋(大湊地先)	 軍用物資・船舶繋留	大正12年度	100
古仁屋			司令部専用船·鴫丸	砲台監視連絡船(鉄鋼船)	大正12年度	1
古仁屋	瀬久井		兵舎5棟(バラック)	医務室・衛兵所・練兵場	昭和16年度	1
	現古仁屋中学校		奄美大島陸軍病院	球第2782部隊·病院長永田 一男軍医少佐	昭和16年9月編成	2413
古仁屋			船舶砲兵団司令部の出 張所 第800星駅総貨物度主任	隊長花里博陸軍少尉	昭和19年度	1
古仁屋			第32軍野戦貨物廠古仁 屋出張所 第32軍野戦兵器廠古仁	20名	昭和20年8月	12513
古仁屋			第32単野戦共命隊占1_ <u>屋出張所</u> 第7野戦船舶廠古仁屋出	20名	昭和20年8月	12513
古仁屋			張所	村田義一陸軍少尉・20名	昭和20年8月	1)(5)(3)
			115			

古仁屋			第7船舶輸送司令部沖縄 支部古仁屋出張所	筑瀬猛陸軍少尉・30名	昭和20年8月	213
古仁屋			機銃砲台	海軍所属	昭和20年	1014
古仁屋		高射砲小隊		小隊長船間満蔵陸軍少尉	昭和16年10月ごろ	24
<u>(高知山)</u> 古仁屋 (高知山)		重砲兵第6連隊本部		隊長末松五郎陸軍中佐·高	配備 昭和19年高地山へ 移動	21013
古仁屋 (高知山)		重砲兵第6連隊第3中隊		浜田光保大尉・38式野砲2 門・重砲兵第6連隊の最終配 備	昭和19年	210
古仁屋(高知山)		特設防衛通信隊		暗号班10名·有線班10名·無線班20名	昭和20年3月29日 配属	13
古仁屋(高知山)		独立混成第22連隊第7中隊		大石隊·220名(内現地召集 兵約40名)		10
古仁屋 (高知山)			高射砲台	10cm高射砲2門(典拠②)迎 撃陣地・監視所・軍道(典拠 ①)	昭和16年9月設置· 昭和17年9月撤去	1245 10
古仁屋 (高知山)			複郭陣地		昭和19年	2
古仁屋 (高知山)			機関砲			10
古仁屋 (高知山)			機銃陣地			10
古仁屋 (高知山)			洞窟陣地			10
古仁屋 (高知山)			野砲陣地			10
	海岸·山腹一帯		迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	1
節子		陸軍球第2740部隊		楠見隊長以下約30名	昭和19年度	110
節子	海岸·山腹一帯 蘇刈部落裏側		迎撃陣地		昭和19年度	1
蘇刈			複郭陣地		昭和19年度	2
蘇刈	海岸·山腹一帯		迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	1
手安	南大島自動車 学校裏山麓		陸軍弾薬庫	3基•附属建物数棟	昭和7年構築(典 拠:現地案内板)	1210
手安	于仅农山底		衛兵所	瀬久井歩兵19部隊より派遣	昭和5年度	1110
手安			弾薬庫監視員官舎	要塞司令部より陸軍曹長駐 在	昭和5年度	1
手安			工廠			10
<u>手安</u> 手安		 第951海軍基地航空隊古仁屋派	兵舎			10
・ ・ <u>(須手)</u> 手安		造隊		隊長石川正海海軍航空大尉 		1251
(須手)		沖縄海軍航空隊古仁屋派遣隊			昭和19年4月設置	13
手安 (須手)		海軍大島防備隊分遣隊		瀬相の海軍防備隊本部より派遣		10
手安 (須手)			海軍航空隊古仁屋基地	通信所・兵舎・地下施設・高 射機関砲陣地(4箇所)・医務 室・施設部・掩体壕・指揮所・ スリップ・弾薬庫(典拠①)	昭和15年建設	191011
手安 (須手)	下間崎ほか		対空機銃陣地	3ヶ所(典拠⑩)	昭和18年度	1110
手安(須手)			防空壕	昭和19年の兵舎焼失後は兵 舎として使用	昭和18年度	1
手安 (須手)			揚陸用滑走路	水上機引揚用	昭和18年度	1
(須手)	伊須湾奥、阿 木名川上流		複郭陣地	第951海軍基地航空隊古仁 屋派遣隊が移駐	昭和20年6月ごろ	5
手安 <u>(須手)</u>			水上偵察機			10
手安 (須手)			探照灯			10
油井	学校·集会場	防衛隊(現地召集)		60名	昭和18年度	110
油井		油井岳2740部隊		隊長大石陸軍中尉・典拠⑩ では「暁部隊」	昭和18年度	110
油井	ж +-		海軍爆撃機待機基地	E会 里洋 顺 C E E +	昭和18年度	110
油井ホノホシ	油井岳		高射砲台	兵舎·軍道·将兵駐屯	昭和18年度 昭和19年	20
ホノホシ			カノン砲台陣地 迎撃陣地	陸里川馬 敵の上陸への備え	昭和19年	1)
ホノホシ			散兵壕	敵の上陸への備え	昭和20年度	1
ホノホシ			機銃陣地			10

西方地区

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
久慈	久慈湾		軍港	明治初めごろから軍港扱い		1
久慈	海岸(現存)		海軍給水タンク	煉瓦造り	明治44年度	1
久慈			海軍燃料補給所	兵員約10名	明治44年度	1
久慈		第44震洋隊	震洋艇格納壕	マル四特攻隊・隊長三木十 郎海軍中尉・隊員180名・震 洋艇約50隻	昭和20年3月配備	120

				亜土目の日本中はまるの名		
管鈍		陸軍部隊一時駐屯		西古見の兵舎完成までの約 1ヶ月間、約200名が民家や 集会場に仮宿	昭和19年度	110
管鈍	海岸·山腹一帯		迎撃陣地		昭和20年度	1
花天	海岸·山腹一帯		迎撃陣地		昭和19年度	1
花天			特別攻撃隊海軍魚雷艇	約150名		10
古志		海軍駐屯		約50名		10
古志	山頂		高射砲台	陸軍所属・将校約45名	昭和19年度	110
古志	山中		兵舎			10
			XII	約1個小隊駐屯・小学校に宿 治	27. f	
篠川	小学校	陸軍黒木隊		泊	昭和1/年度	1
篠川			輸送艦船停泊地	陸·海軍共用	昭和17年度	1
篠川			船舶避難港			10
西古見		奄美大島要塞重砲兵連隊第1大隊		大隊長前田一水陸軍少佐	昭和16年9月配備	1258
		奄美大島要塞重砲兵連隊第1大				
西古見		隊第1中隊		中隊長原田種文陸軍中尉	昭和16年9月配備	158
西古見		奄美大島要塞重砲兵連隊第2中 隊		中隊長喜友名朝光陸軍大 尉・昭和17年9月25日の奄美 大島要塞重砲兵連隊の部隊 縮小後の配備	昭和17年9月配備	125
西古見		重砲兵第6連隊第2中隊		中隊長森本松次郎大尉·重	昭和19年	2
	\h.			砲兵第6連隊最終配備	-ылы - СТ	1
西古見	浦底	陸軍・海軍駐屯		一般住民立ち入り禁止		1
西古見		奄美大島要塞重砲兵連隊派遣隊		小川隊		10
		第4中隊1小隊 要塞野砲隊迫撃砲隊	野砲			
西古見		安盛野紀隊坦拏紀隊	野砲 陸軍独立守備隊基地(陸	┃ ┃ 砲台は戦後破壊、弾薬庫・兵	十正0年美工・七工	10
西古見	池堂				E. C.	8
	西古見の西北		軍要塞)	<u>命俗料庫跡は現仔</u> 28cm榴弾砲4門・弾薬庫・繋	11年完成	1256
西古見	にあたる高地		西古見第1砲台	船場・監守衛舎	大正10年9月着工	70
西古見	第1砲台の西 方約3キロの崖 鼻・弾薬庫は 曽津高崎灯台 の地続き		西古見第2砲台	15cmカノン砲4門・観測所・弾 薬庫	大正10年9月着工	1256
西古見			砲台監守衛舎	鉄筋コンクリート2棟ほか付	大正10年度	1)
四口元			地口無り用言	属建物	八正10年度	U
西古見	兵舎跡から曽津高崎灯台のほうへ約2kmほどのぼったがいまなた。 はか、舗装を中、舗装道路ではたかります。 ・マンカの上		掩蓋式観測所	典拠①⑥⑧では「監視所」、 正式名称「掩蓋式観測所」 (篠崎達男氏より徳永茂二氏 宛書簡による)	大正12年度	168
西古見			軍用桟橋	鴫丸繋船·物資揚陸用	大正12年度	1
	山麓3ヶ所現存		弾薬庫	兵器廠·地雷	大正12年度	1)
	山鹿3ケ川現代			共命廠 地苗		
西古見	± 4± 10. E		探照灯		昭和16年度	110
西古見	車崎地区		38式野砲2門		昭和19年	2
西古見	西古見砲台近く		複郭陣地		昭和19年	2
西古見			92式水中聴音遠操機雷		昭和20年度	1
西古見			防潜網		昭和20年度	1
西古見	曽津高崎山頂		 海軍電波探知機	灯台近くに兵舎があった。貯	昭和20年度	168
9 9 V 9 ROW				水タンク現存 	1 150	
西古見 西古見	陸軍要塞北側 の山中・地元 で「キュラヤマ」 と呼んでいる山 の中腹あたり		官舎 大尉壕·准尉壕	現存するが大尉壕の入口が 埋まっている		(1) (6) (8)
	池堂の旧陸軍 兵舎跡を戸倉 山のほうへ約 80mの左側、 山手のほう		弾薬庫			60
西古見			兵器廠			10
西古見			兵舎			10
西古見			砲台陣地			10
	池堂		陸軍兵舎跡			6
西古見				大島護衛部隊(海軍)所属·下	177 £0.4 c /= #	
<u>曽津高崎)</u> 西古見			特設見張所	士官3名·兵6名 海軍所属·将兵約20名·92式	昭和18年度	1340
計算高崎) 西古見			特設防備衛所 	水中聴音遠操機雷·防潜網	昭和18年度	131014
自津高崎)			海軍電波探知機			10

実久地区

			天八地区			
	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
阿多地		海軍防備隊派遣隊		中村隊・将兵約50名	昭和19年度	11
阿多地	海岸一帯・岬・ 山腹		迎撃陣地		昭和19年度	1
乙崎	LL 11/2	宮本隊		下士官5名·兵45名	昭和18年度	1
乙崎		出口隊			昭和18年度	1
乙崎			機銃砲台	海軍所属	昭和18年度	11014
乙崎			高射砲台		昭和18年度	13
乙崎			見張所	海軍所属	昭和20年	11014
嘉入		川村隊·木吉隊		下士官5名·兵49名	昭和19年度	1
嘉入			仮兵舎	茅葺	昭和19年度	1
嘉入			探照灯	海軍所属	昭和19年度	1
嘉入			平射砲台	海軍所属	昭和19年度	11014
嘉入	海岸·山腹一帯		迎撃陣地		昭和19年度	1
		陸軍監視隊				10
木慈			海軍採石場	施設構築用材として珪岩を 採石	昭和17年度	1
実久		奄美大島要塞重砲兵連隊第1大 隊第2中隊		中隊長黒葛清治陸軍中尉	昭和16年10月ごろ 配備	125
実久		奄美大島要塞重砲兵連隊第1中 隊		中隊長黒葛清次陸軍大尉・昭和17年9月25日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮 小後の配備	昭和17年9月配備	125
実久		重砲兵第6連隊第1中隊		黒葛清次大尉·重砲兵第6連 隊最終配備	昭和19年	2
実久		照空隊		海軍所属	昭和20年	14)
実久		第1大隊		大隊長前田一水陸軍少佐		1
実久		第3中隊				1
実久			実久砲台	15cmカノン砲4門・観測所・繋 船場・弾薬庫・看守衛舎など	大正10年8月着工	1257
実久	山頂		弾薬庫	2ヶ所	大正10年度	1
実久	H.X.		砲台監守衛舎	鉄筋コンクリート造り・陸軍下 士官常時駐在	大正10年度	1
実久			要塞砲・カノン砲	第2中隊の装備・要塞砲2門・ カノン砲2門	大正10年度	1
実久			陸軍軍用桟橋	司令部所属船鴫丸他軍用艦 艇用	大正10年度	1
実久			探照灯台	2台·海軍防備隊派遣隊·加 治兵曹長他26名	昭和18年度	1
実久	実久砲台の固 定砲の近く		複郭陣地		昭和19年構築	2
実久			軍用道路	軍用桟橋から山頂砲台まで		1
実久 江仁屋離)		対潜防備隊		実久電波探知機	昭和18年度	1
工厂 <u>医融</u> 実久 江仁屋離)		海軍防備隊派遣隊		大森隊·水中聴音機·92式水中聴音遠操機雷·防潜網	昭和19年度	110
実久 (江仁屋離)			江仁屋離砲台	7cmカノン砲2門・観測所・監 守衛舎(典拠®)15cmカノン砲 4門(典拠①)兵舎・弾薬庫。 軍用桟橋(典拠⑩)昭和19年 撤去(典拠②)	大正10年10月宿 一下。	1257
実久 江仁屋離)			防備衛所	将兵約20名	大正11年度	123
実久 <u>江仁屋離)</u>			高角砲台	石井大尉他約40名·平射砲 台兵員15名	昭和17年度	1
実久 <u>江仁屋離)</u>			高射砲台	橋本少尉他約30名	昭和17年度	131014 15
実久 <u>江仁屋離)</u>			弾薬庫		昭和17年度	1
薩川		防衛隊(現地召集)			昭和19年度	1
薩川			軍港	南進基地·艦隊泊地指定	明治41年度	110
薩川	後方山頂		迫撃砲台陣地		昭和18年度	1
芝		防衛隊(監視隊)(現地召集)			昭和19年度	1
芝	海岸線一帯		迎撃陣地		昭和19年度	1
芝			高射砲陣地	武田隊構築		10
須子茂		迫撃砲小隊		A-CORL HOW I AND A LIVE		3
須子茂			平射砲台	海軍防備隊派遣隊·中村兵 曹長他約32名駐屯	昭和19年度	13101
須子茂			迎撃陣地	渡辺兵曹長他約47名	昭和19年度	1
須子茂			探照灯台		昭和19年度	1
須子茂	海岸·道路		(地雷敷設)		昭和19年度	1

須子茂			兵舎	4棟		10
瀬相		大島根拠地隊		大島防備隊·海軍通信隊	昭和16年9月編成· 昭和17年1月廃止	13)
瀬相		大島防備隊		司令谷口秀志海軍大佐・昭 和20年4月15日に「大島方面 隊」に改称	昭和16年	12510 14
瀬相		海軍通信隊		迫擊砲台·高射砲台·平射砲 台	昭和16年	121014
瀬相		近藤部隊・飯島隊・西泉隊・中目 隊ほか			昭和16年度	1
瀬相		照空隊			昭和16年度	1
瀬相		第17号大島輸送隊			昭和16年度	1
瀬相		大島附近防備部隊			昭和17年1月	14)
瀬相		大島方面隊		「大島防備隊」を改称・司令 長官加藤唯男海軍少将	昭和20年4月15日 改称	513
瀬相		大島護衛部隊	大島護衛部隊本部		昭和20年4月	14)
瀬相		迫撃砲小隊				3
瀬相			海軍病院		昭和16年度	1
瀬相			艦船用給水ダム		昭和16年度	1
瀬相			艦艇	駆逐艇5艇·掃海艇·監視艇· 敷設艇	昭和16年度	1
瀬相			機銃砲台	7基・照空隊の装備	昭和16年度	110
瀬相			高角砲台	照空隊の装備	昭和16年度	1
瀬相			壕内指揮所·見張所	海軍佐藤参謀	昭和16年度	1
瀬相			防備衛所		昭和16年度	1
瀬相			兵舎		昭和16年度	1
瀬相			見張所		昭和20年	14)
瀬相			海軍防空見張所			10
瀬相			高射砲台	海軍所属	昭和20年	3(10(14)(15)
西阿室		海軍機銃砲隊		宮本隊・壕構築・地雷敷設	昭和19年度	110
西阿室		海軍防備隊派遣隊高射砲隊		米田海軍少尉他約48名	昭和19年度	110
西阿室		機雷敷設隊		瀬相の海軍防備隊本部より派遣	昭和19年度	1
西阿室		迫撃砲小隊				3
西阿室	海岸·山腹一帯		迎撃陣地		昭和19年度	1
西阿室	山頂		高角砲台		昭和19年度	1
西阿室	ワキン丘の上		対空機関砲台		昭和19年度	1
西阿室	海岸道路一帯		(地雷敷設)		昭和19年度	1
西阿室	山頂		機銃砲台			10
西阿室	西阿室港口		(機雷敷設)			10
俵		海軍防備隊(森山隊·石井隊·林 隊)		瀬相の海軍防備隊本部より 派遣	昭和19年度	110
俵			機銃砲台	海軍所属	昭和20年	10(14)
俵			兵舎			10
俵			糧秣倉庫			10
平松山		横川部隊		横川海軍中尉·伊藤海軍兵 曹長	昭和19年度	1
平松山		海軍派遣隊				10
平松山			軍用桟橋	木造	昭和19年度	1
平松山			高射砲台	海軍所属	昭和19年度	131014
平松山			機銃陣地			10
平松山			防空見張所			10
三浦		海軍設営隊	海軍設営隊本部	将兵約60名	昭和16年度	110
三浦			艦船用給水ダム	サキバルの岸壁まで導水管 敷設	昭和16年度	1
三浦			高射砲台		昭和16年度	13
三浦			兵舎·徴用工宿舎		昭和16年度	1
三浦		第17震洋隊	震洋艇格納壕	総員185名(士官7名·本部員 13名·搭乗員50名·整備隊員 43名·基地隊員72名·震洋艇 (一型)53隻)(典拠⑫)	昭和19年11月21日	12512
三浦			燃料備蓄補給基地		昭和20年度	1

#蓄補給基地 **鎮西地区**

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
	海岸・山腹・山 頂一帯		迎撃陣地		昭和18年度	1
秋徳	海岸·山腹·山 頂一帯		複郭陣地		昭和18年度	1
秋徳 (サキニ		海軍防備隊秋徳派遣隊		将兵約50名駐屯・典拠⑩で は海軍対潜監視隊	昭和18年度	110
秋徳 (サキニ		防備隊(現地召集)		現地部隊に編入	昭和18年度	1
秋徳 (サキニ			平射砲台	海軍所属	昭和20年	314
池地		防衛隊(現地召集)		請阿室部隊・道路に地雷敷 設	昭和19年度	110
池地	道路		(地雷敷設)		昭和19年度	1
伊子茂		海軍防備隊派遣隊		約60名		

伊子茂	/27##10		迎撃陣地		昭和19年度	1
伊子茂	伊子茂港入口		(機雷敷設)	 海軍防備隊派遣隊秋徳対潜		10
請阿室		海上監視隊		海車防備隊派遣隊代徳州暦 監視隊より2、3名派遣・交代 勤務	昭和19年度	110
請阿室		防衛隊(現地召集)		監視隊に編入、敵潜監視	昭和19年度	1
請阿室	道路		(地雷敷設)		昭和19年度	1
於斉		海軍派遣工作隊		瀬相-於斉間トンネル建設・ 約20名	昭和19年度	110
於斉		機雷敷設隊		海軍派遣隊約20名	昭和19年度	1)
於斉		迫擊砲小隊			昭和19年度	13
於斉	海岸線一帯		対戦車壕		昭和19年度	1
於斉			(地雷敷設)		昭和19年度	1
勝能			高射砲陣地		昭和19年度	1
花富		海軍防備隊派遣隊			昭和19年度	1
花富	伊子茂小学校	防衛隊(現地召集)			昭和19年度	1
花富			迎撃陣地		昭和19年度	1
佐知克	海里 		迎撃陣地		昭和19年度	1
佐知克 佐知克	海岸・岬一帯		散兵壕 対戦車壕		昭和19年度 昭和19年度	1
諸数			刈 料 早 塚			
(スリ浜)		海軍通信隊			昭和19年度	1110
諸数 (スリ浜)			機銃陣地	海軍所属		10
諸鈍		軍用道路構築派遣隊		陸軍2719部隊より派遣	昭和17年度	1
諸鈍		諸鈍湾機雷敷設隊	(機雷敷設)	海軍将兵約20名	昭和19年度	110
諸鈍		防衛隊(現地召集)		現地部隊に編入	昭和19年度	1
諸鈍		海軍防備隊派遣隊第4中隊		小口隊		10
諸鈍		迫擊砲小隊 時軍部隊派遣隊第3中隊		京百咲 44.4.4		3
諸鈍 諸鈍		陸軍部隊派遣隊第3中隊	味宝服为为人味业	宮原隊・約40名	加加拉克	10
<u> </u>	 海岸・山腹		陸軍野砲砲台陣地 迎撃陣地	陸軍2740部隊より派遣	昭和17年度 昭和18年度	1
	海庄·山版			N/ = 1 = 14 = 15 = 11 = 15		
諸鈍	1- H . I . M-		迫撃砲台陣地 		昭和18年度	1
諸鈍諸鈍	海岸·山腹	 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大	複郭陣地		昭和18年度 昭和16年10月ごろ	1
珀蚆 (徳浜)		隊第5中隊		中隊長小口敏之陸軍中尉	配備	125
諸鈍 (徳浜)		要塞重砲兵連隊			昭和18年度	1
諸鈍		要塞野砲隊派遣隊	砲台·兵舎			10
諸鈍	海岸·山腹一 帯		迎撃陣地		昭和19年度	1)
諸鈍	海岸・山腹一		複郭陣地		四和19年度	1
勢里	海岸・岬一帯		散兵壕		昭和19年度	1
渡連	7-271 - 112		軍馬揚陸休養地		12	10
渡連		奄美大島要塞重砲兵連隊第2大		大隊長岩本儀助陸軍少佐	昭和16年10月ごろ	125
<u>(安脚場)</u> 渡連		<u>隊</u> 奄美大島要塞重砲兵連隊第2大			配備 昭和16年10月ごろ	125
(安脚場)		隊第4中隊		中隊長浜田光保陸軍中尉 中隊長浜田光保陸軍中尉・	配備	1023
渡連 (安脚場)		奄美大島要塞重砲兵連隊第3中 隊		昭和17年9月25日の奄美大 島要塞重砲兵連隊の部隊縮 小後の配備	昭和17年9月配備	25
渡連 (安脚場)		海軍防備隊派遣隊				10
渡連 (安脚場)		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊		官舎・兵舎・弾薬庫・観測所・ 探照灯・陸軍特設見張所・カ ノン砲・機関砲陣地		10
(安脚場) 渡連 (安脚場)		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	安脚場砲台	探照灯・陸軍特設見張所・カ	大正10年7月着工・ 昭和19年撤去	
(安脚場) 渡連 (安脚場) 渡連		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	安脚場砲台	探照灯・陸軍特設見張所・カ ノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋 船場・弾薬庫・看守衛舎など		
(安脚場) 渡連 (安脚場) 渡連 (安脚場) 渡連		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊		探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋船場・弾薬庫・看守衛舎など (典拠⑦) 陸軍下士官が常時駐在 要塞重砲兵第4中隊の装備・	昭和19年撤去 大正10年度 大正9年ごろ設置	1257
(安脚場) 渡脚連場) (安期連連場) (安期連連場) (安期連連場) (安期連連場)		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	砲台監守衛舎 弾薬庫	探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋船場・弾薬庫・看守衛舎など(典拠⑦) 陸軍下士官が常時駐在 要塞重砲兵第4中隊の装備・弾薬庫2箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・	昭和19年撤去 大正10年度 大正9年ごろ設置 (典拠:現地案内	1257 1
(安) 渡脚 連場) (安) 渡脚 連場) (安) 渡脚 連場) (安) 渡脚 連場) (安) 渡脚 連場)		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	砲台監守衛舎	探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋船場・弾薬庫・看守衛舎など(典拠⑦) 陸軍下士官が常時駐在 要塞重砲兵第4中隊の装備・ 弾薬庫2箇所	昭和19年撤去 大正10年度 大正9年ごろ設置	1257
(安 (安 (安 (安 (安 (安 (安 (安 (安 (安		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	砲台監守衛舎 弾薬庫 貯水池	探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋船場・弾薬庫・看守衛舎など(典拠⑦) 陸軍下士官が常時駐在 要塞重砲兵第4中隊の装備・弾薬庫2箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・貯水池3箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・貯水池3箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・開水池3箇所	昭和19年撤去 大正10年度 大正9年ごろ設置 (典拠:現地案内 昭和16年度	1257 1 1
(安 渡脚 連場) 変度 渡脚連場) 変度 渡脚連場) 渡脚連場) 連場 連場 連場 連場 連場 連場 連場 連場 連場 連場		要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊	砲台監守衛舎 弾薬庫 貯水池 掩蓋式観測所	探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲陣地 15cmカノン砲4門・観測所・繋船場・弾薬庫・看守衛舎など(典拠⑦) 陸軍下士官が常時駐在 要塞重砲兵第4中隊の装備・弾薬庫2箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・貯水池3箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・貯水池3箇所 要塞重砲兵第4中隊の装備・開水池3箇所	昭和19年撤去 大正10年度 大正9年ごろ設置 (典拠:現地案内 昭和16年度 昭和16年度	1257 1 1 1

渡連			海軍特設防備衛所		昭和16年構築(典 拠:現地案内板)	13104
渡連(カネンテ崎)				海軍所属·海軍後藤少尉他 約78名	昭和17年度	131014
渡連 (カネンテ崎)			探照灯台		昭和19年度	1
渡連 (待網崎)		海軍防備隊派遣隊		隊長斎藤海軍中尉・約70名	昭和18年度	110
渡連 (待網崎)			高射砲台	海軍所属	昭和18年度	131415
渡連 (待網崎)	渡連山頂		対空高角砲陣地	海軍所属	昭和19年度	110
渡連 (待網崎)			探照灯台	海軍高木少尉	昭和19年度	ŒŒ
渡連 (待網崎)			兵舎	2棟、将校2名・下士官16名・ 兵89名	昭和19年度	1
呑之浦		第18震洋隊		隊長島尾敏雄海軍中尉·隊 員183名·震洋艇52隻	昭和19年11月21日 配備	(1)(2)(5)(10) (12)
呑之浦			震洋艇格納壕	○四艇52隻・両岸に壕12	昭和19年度	110
呑之浦			兵舎·練兵場		昭和19年度	110
野見山		海軍防備隊野見山派遣隊		約17名·兵舎·軍道·将兵駐 屯7名	昭和18年度	110
野見山		防衛隊(現地召集)		部隊に編入・陣地構築	昭和18年度	1
野見山			迎撃陣地		昭和18年度	1
野見山			複郭陣地		昭和18年度	1
与路		海軍奄美大島防備隊		瀬相の海軍防備隊本部より 派遣	昭和19年度	1
与路		海軍与路島派遣隊		下士官7名·兵48名	昭和19年度	1
与路		防衛隊(現地召集)			昭和19年度	110
与路		海軍防備隊派遣隊砲隊		上前田隊		10
与路		照空隊		奥隊		10
与路			探照灯台	隊長上前田兵曹長·松崎兵 曹長	昭和19年度	110
与路			弾薬庫		昭和19年度	1)10
与路			発電所		昭和19年度	1100
与路			兵舎	3棟	昭和19年度	1
与路			平射砲台	海軍所属	昭和19年度	131014

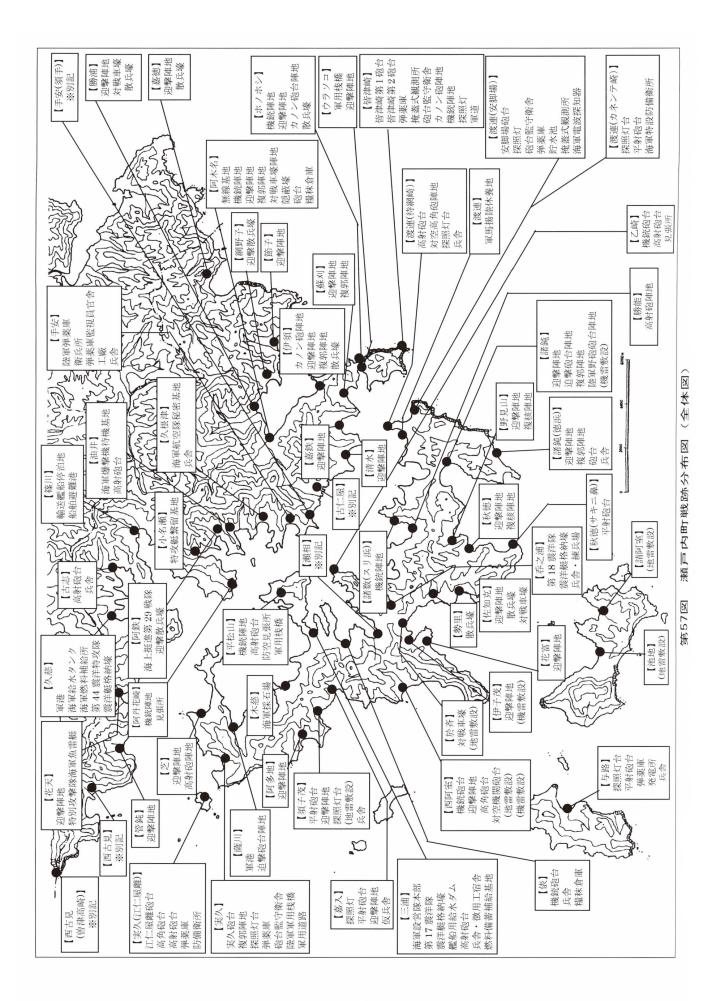
奄美大島の他地域に配備された部隊

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
字検村屋鈍		奄美大島要塞重砲兵連隊第1大 隊第3中隊		中隊長葉山陸軍中尉	昭和16年10月ごろ 配備	25
宇検村屋鈍			38式野砲4門		昭和16年·昭和17 年9月撤去	⑤
		第32軍航空情報隊第2電波警戒 隊		球第19564部隊·隊長江頭千年陸軍少尉·30名	昭和20年8月	213
		電信第36連隊無線小隊の1個分 隊			昭和20年8月	2
笠利町		特設警備第220中隊		球第7075部隊·中隊長原田 輝夫陸軍中尉	昭和20年8月	213
名瀬市		特設警備第221中隊		球第7076部隊·中隊長黒木 安見陸軍大尉	昭和20年8月	213

表作成 河津 梨絵

【注】典拠欄の記号は以下の文献を示している。

- ① 屋崎一『大島海峡周辺における軍事施設及び装備概況(戦争記録)』(1995)
- ② 篠崎達男『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録』(1998)
- ③『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録』巻末収録資料
- ④ 篠崎達男「奄美大島要塞について」(『しまがたれ』第9号 しまがたれ同好会 2000)
- ⑤ 篠崎達男「大東亜戦争中における奄美守備隊の回顧」(『しまがたれ』第7号 しまがたれ同好会 1999)
- ⑥『平成八年 西方地区現地調査報告書~西古見·管鈍·花天~』瀬戸内町文化財保護審議会(1996)
- ⑦ 净法寺朝美『日本築城史』原書房(1971)
- ⑧ 西古見慰霊碑建立実行委員会『西古見集落誌』西古見慰霊碑建立実行委員会(1994)
- ⑨『平成9年度 文化財会報』瀬戸内町文化財保護審議会(1998)
- ⑩「瀬戸内町内における旧陸・海・空の軍事施設及び部隊の駐屯並に空襲被害概要」 (屋崎一編『わが町の戦中戦後を語る』瀬戸内町中央公民館 1989)
- ⑪ 梶山瑞雲『瑞雲飛翔 第六三四海軍航空隊水爆瑞雲隊・戦闘記録・私記』(2002)
- ⑩木俣滋郎『日本特攻艇戦史 震洋・四式肉薄攻撃艇の開発と戦歴』光人社(1998)
- ⑩特設防衛通信隊記念誌新版下編集委員会『記録のない過去 特設防衛通信隊記念誌』特設防衛通信隊記念誌頒布委員会(2000)
- ⑩防衛庁防衛研究所戦史室『沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社(1968)
- ⑤防衛庁防衛研究所戦史室『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社(1968)



第58図 瀬戸内町戦跡分布図(分記図)

第5章 考 察

第1節 遺物散布地の民俗空間

町 健次郎

一、はじめに

奄美大島南部に位置する瀬戸内町の森林山地面積は全体の約87%を占め、概して、人々が暮らす56 集落は砂丘地を含む扇状地状の平野部に立地している。

平成 15 年度~16 年度にかけて実施された瀬戸内町埋蔵文化財の表採調査では、遺物がほぼ全ての集落で採集され、しかも民家が密集する現在の居住域から多く見つかっていることは、通史としてのシマの歩みを空間にとらえようとした場合、ここに重層的で密な居住空間の存在を指摘することができよう。本稿では、その居住空間の時代的連続性が有機的に説明されていくための、今後の研究進展の一助として、ある法則性をもって遺物が表採された空間について、これまでの民俗研究の見解を元に言及をすすめてみることにしたい。まず、瀬戸内町域に現在も残っている祭祀空間の概観にふれたのち、遺物散布地との関係性について若干の考察を加えてみることにしたい。

二、瀬戸内町域の民俗空間

集落を意味する民俗語彙である「シマ」は、日常、今も生きている言葉である。シマ内部の空間は民 家が棟を密集させている中にも、道や川を境界にしていくつかの区画がなされている。

区画名には、請阿室、池地、嘉鉄のように「ハン(班)」と呼んで浜下りなどの民俗行事の単位として機能しているレベルもあるが、その呼称は比較的新しいとみられ、「アガリ(東)」、「イリ(西)」などの方位観をもとにしたものの他、中でも頻度が高いものとして「カネク(金久)」と「サト(里)」がそれ以前の区画呼称を示す語彙として多く認められ、それぞれ「ウィ・ウェ(上)」、「ナカ・ナハ(中)」、「シャー・シタ(下)」といった接頭語をつけて、再分化した区画名として存在している。

「カネク」・「サト」は共に琉球列島全域的に広がる地名語彙でもある。カネクは主に砂地をさし、海岸に接する砂丘地帯側に多く見受けられる。一方のサトは比較的に人家が集中する現在の居住区域に重なり、瀬戸内町域では「ミャー」という広場を含んでいる場合が多くみられる。その位置は海岸に面している場合もあるが、加計呂麻島の諸鈍や伊子茂のように海から離れた山手内陸側である場合もある。

シマの空間デザインは、信仰生活の根幹を成してきたノロ祭祀の神観念が深くかかわっている。シマを背後で取り囲む山々は、いずれも農耕生産に関わる均一な山ではなく、立ち入りを禁じた聖域としての山が存在し、人々が通行する日常生活の道の他にも「カミミチ(神道)」が断片的に記憶されている。

ノロに関する定義的説明は筆者の手に余るが、少なくとも奄美諸島が琉球王国に属していた時代、ノロが役人層とともに王府から就任や役地給付を受けて王国の祭祀制度の中に組み込まれていたことは、16世紀初頭から17世紀初頭にかけての年代が確認される辞令書から知ることができる。ノロ祭祀組織は「親ノロ」を頂点として、成員全体は「神人衆(カミニンジュウ)」とよばれ、成員はそれぞれ神役として名を持っている。必ずしも全てのシマに共通しているわけではないが、「イガミ」、「スドゥガミ」といった名が連なる。全て女性による成員構成である中に、唯一、男性で参加する役をグジとよぶ。

加計呂麻島では、海の彼方からカミを迎える祭りを「ウムケ(御迎)」、送りの祭りを「オーホリ(御送)」

とよび、前者は旧暦 2 月、後者は旧暦 4 月に行なわれていた。いずれもトネヤでの祭りであり、浜まで出てカミを送迎した。また、稲の祭りは「アシャゲ」を祭場として、旧暦 6 月の「アラホバナ(新穂花)」や旧暦七月の「ミナクチ(水口)」が行われた。祭りの対象となる作物は稲のみではなかった。栗の祭りとして「フーウンメ(栗折目)」が旧 7 月、「コーシャ(山芋)」や「ハヌス(甘薯)」の芋の祭りとして旧暦 11 月には「フユンメ」が行われた。

瀬戸内町域におけるノロ祭祀は、目撃談が一切なく早い時期に廃れたとみられるシマも多くある。シマによって衰退していった年代に差はあるが、近年まで継続していたものとしては、加計呂麻島の旧実 久村域や与路島では昭和 40 年~平成の初め頃まで、請島では大正時代初め頃まで続いていた。大島側でも、西古見や管鈍をはじめとして年配者の幼少の記憶に祭祀の様子が残っているシマもある。そこでは本来の祭祀の成員構成より縮小された形でほぼ個人単位に近い行われ方であったようである。

ノロ祭祀の残像は、関係した空間や地名などに語彙として今も断片的に残っているが、どのシマにも 平均的に残っているわけではない。瀬戸内町内56集落のうち、特に須手・伊目・呑之浦・佐知克・勢 里・知之浦・安脚場といったシマはその語彙に乏しい。これらのシマは耕地を求めて作場へ移住するな どして形成されたとみられ、その母体とみられるそれぞれのシマ(手安<須手>・久慈<伊目>・押角< 呑之浦>・於斉<佐知克・勢里>・武名<知之浦>・渡連<安脚場>)の管轄にあったとみられる。

加計呂麻島をはじめとする瀬戸内町域の民俗空間については、奄美諸島でもこの地域に比較的にノロ祭祀が存続していたこともあって、これまで多くの研究者が報告や論考を行ってきた。中でも祭祀が存続していた昭和30年代に調査した伊藤幹治、クライナー・ヨーゼフの報告と論文は重要な基礎資料となっている(注1)。また、調査に沿って民俗空間図もいくつか提出されてきたが、特に全域的網羅の試みが成されたものとしては高橋一郎と松原武実による報告があげられる(注2)。

紙面の都合上、瀬戸内町立郷土館調査による空間図は別の機会に示すこととして、ここではノロ祭祀 にかかわる民俗空間関連語彙のいくつかを列挙し、若干の解説を加えておきたい。

$(1) \in V_{+}$

シマ空間の中心的広場をさす。比較的に人家集中地帯の内にあるので、はじめて訪れた集落でも、ある程度容易にみつけることができる。 現在は公民館施設や土俵がある広場であることが多く、秋になると豊年祭の場となるほか、道が狭い集落内にあっては臨時の駐車スペースにもなる。また、子どもの遊び場のひとつでもあり、年配者の涼み場所、ゲートボールの練習場にもなる。世代を超えた共同利用広場が現在的ミャー空間の機能であるとはいっても、シマ内の広場がすべてミ



177 武名のミャー

ャーの呼称を持っているわけではない。あくまでも聖地性が伴った広場であることが条件である。

ミャーは祭祀空間の中心地点であり、聖地性を持っている。加計呂麻島西部域のミャーにはアシャゲが現存しているように、かつては大島南部域のミャーにもアシャゲが建っていた。油井や花天などでは昭和 30 年代までそれが建っていたことが記憶されており、大島南部西端の西古見で、今もミャーに該当する広場をアシャゲと呼んでいることはその名残りである。シマタテガナシ・トネヤはミャーと隣接している。また、ミャーには「カミミチ(神道)」が続いていることが多く、「カミヤマ(神山)」と総称される山の聖地と海とを結ぶ線上にある。今も与路島のように、葬儀で墓地に向かう際にミャーを通ることを堅く禁じていることも聖地として意識されていることのあらわれである。

シマによっては、ミャーの聖地性よりも共有広場としての性格が重視され、埋め立て工事など近年の 諸事情で作られた広場をミャーとした他、容易に移転されているケースもある。請阿室や久慈では、明 治期以降から数えて三度の移転がなされている。

(2)シマタテガナシ・イビガナシ

ミャーの一角に、主に自然石をひとつ祀っている場合が多い。加計 呂麻島の須子茂・武名・瀬相などに残されている。於斉のシマタテガ ナシは山川石の墓石のうしろに小さな自然石を三つ並べている。油井 のシマタテガナシは自然石がひとつではなく複数である。与路ではミ ャーと隣接した小高い丘一帯をさしている。

シマタテガナシ・イビガナシとよばれていなくとも、ミャーの一角 に自然石を祀っている場所として、小名瀬・手安・蘇刈・伊須・請阿



178 武名のシマゴスガナシ

室・西阿室・安脚場・実久があげられる。そのうち、古志・俵で「グジ墓」、手安・伊須で「ウジガミ」 と呼ばれている。これらの祀られ方との関連性の説明は今後の課題である。

徳浜・西古見では墓地にシマタテガナシが位置している。阿多地はシマ内のデイゴの木の下から墓地に移転された。勝浦ではトネヤ敷地内に、瀬武ではアシャゲ内の棚に祭られている。久慈では墓地にシマタテガナシとよばれる古墓が中央にあるが、シマ全体では管理されていない。久慈でいうところのシマタテガナシとは、各家筋の遠い先祖をさす言葉であるという。

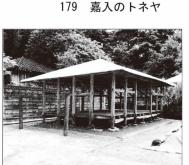
このように断片的に記す各シマの事例の中にも、シマタテガナシを神とはいっても、そこに墓的な性格が同時にみえており、遠い先祖、シマの開祖を祀っているとみられる。一方、イビガナシの呼称の「イビ」は聖域や自然石の神体をさして琉球列島全域に広がる語彙であるが、その確かな語源は未だ明らかにされていない。

(3)トネヤ

シマの宗家とみられる。屋号を各戸につける慣習がないこの地域にあって、 トネヤという屋号的呼称は、ほぼ各シマに存在していたとみられる。トネヤ はミャーと隣接して立地している。普段は人が住む民家であるが、ノロ祭祀 との関わりにおいては、神の送迎祭の場ともなる。藩政時代の与人など役人 を輩出した家については別に「トノチ(殿地)」と称されることが多い。

トネヤの戸主は、代々世襲でグジとよばれる役を継ぐ。グジは唯一男性として参加していた。服装は特別に神衣(カミギン)や祭祀具を身につけることはなく、日常の衣服で参加していたようである。俵には、特別にグジに与えられた耕地である「グジ田」と「グジ畑」の場所が伝承されている。

近年までノロ祭祀が続いていた加計呂麻島の須子茂・嘉入のトネヤは、 グジの住居と祭場の機能が分離した非居住型であった。グジの転居など 諸事情で、シマの伝統的信仰が廃れつつある中での変容形とみられる。



180 三浦のアシャゲ

(4)アシャゲ

「アシャゲ」語彙は奄美諸島全島的に認められるが、施設として現

存しているのは宇検村の一部と加計呂麻島西部域のみである。ミャーの一角に、比較的にトネヤの近く に建てられている。アラホバナ・ミナクチといった稲作に関わる祭りが行われていた。

アシャゲの形態は大きく二つに分けられる。武名・瀬武のように地面に数本の掘っ立て柱を立てたものは、かつては瀬相・諸数にあった。地面にコンクリートをはっている実久・俵のものも同じ形態とみてよいだろう。また、須子茂・阿多地・三浦・木慈のように、床が作られ、柱には桁が入っているタイプは、かつては嘉入・於斉にも見られた。

(5)カミミチ(神道)

本町全域的に残っている。かつては直線的につながっていたとみられるが、現在は断片的に記憶されている。その断片をたどっていくとミャーを基点として海・山方向へ続く場合と、背後の神山から神山へ、海とほぼ平行して続く道が認められる。神道の道幅は、通常の人々の生活で利用されている道とは違い、極端に狭いものがほとんどである。神道と接する家によっては、そのケ所のみブロック塀をあけていたりする。与路島の神道によっては、石垣の上部のみを取りさり、そこを神道としている。



181 須子茂の神道

(6)カミヤマ(神山)

神山とは、聖地である山の総称である。実際のシマ空間にあっては、様々な呼称が存在する。薪を取ることや石さえもそこから持ち運ぶことが忌まれている。神山の中でも、比較的に高い山を「オ(ウ)ボツヤマ」と呼んでいる。油井岳は上、中、下の三段階に分かれてオボツという聖域が山中にあったという。網野子のオボツも高い山である。オボツという呼称でなくとも、シマから見える一番高い山を第一級の聖地とみる例は、篠川や久慈などにみられる。その一方で、於斉のようにアカテツの樹々が茂る平地の森をさしている場合もある。



182 須子茂の神山 (中央の小高い山)

モリヤマ・ウガミヤマは比較的にシマに近い小高い山である。ノロが祭りの際に鉦を叩いて降りてきたといわれる山の多くがこれらである。その山に入ってみると、その頂上付近に平地が確認される場合が多い。グンギンは「権現」の訛りである。加計呂麻のみならず、大島側にも多く、蘇刈・嘉鉄・手安・久根津・油井・小名瀬などにある。シマによっては4~5つ存在する場合もある。山頂に屹立した形の自然石を数本立てられており、そこで旧暦9月9日に拝む。基本的に一族単位で拝むものであったようで、それが後にシマ全体の信仰対象として発展していったとみられる。その点からすると、グンギンがシマ住民意識として神山の範疇に含まれているかどうかはまだ検討の余地がある。

(7)ネリヤ

ノロ祭祀が消失した現在にあっては耳にすることが難しい語彙である。研究史の中では、海の方向にある聖域をさすとして「ネリヤ」の語彙が得られている。筆者は阿多地で「リュウグウ」との語彙を耳にしたが、それが示すところは同じ領域であるう。神の送迎祭の形式は、アダハと呼ぶススキを神役たちが



183 阿多地の浜辺

手に持って浜辺で行われた。海から迎えられた神は、トネヤでの祭祀の後、再び海の彼方へと神役たちによって送りだされた。

三、トネヤとミャーをめぐる時空

以上に、ノロ祭祀を基調としたシマの空間語彙とその様相にふれてみたが、次にこのような祭祀空間の在り方と遺物散布地として示された領域について若干の比較を試みることにしよう。

まず注目したいのは、シマの居住域内でも高い確率で遺物が表採されているトネヤ・ミャーの空間である。そこはシマの民俗空間上でも祭祀空間の中心性を持った位置にあるが、青磁片・類須恵器片にみる中世相当期という時代的傾向が示される島外からの外来品がそこから表採されていることは、現在に至るまでの時代的継続性として、その空間をどのように理解すればよいのだろうか。

勿論、このような設定の問題は本格的な発掘調査の後に検討されるべきであろうが、遺物の集中散布度合いから、前提として、中世相当期の青磁・類須恵器をシマ人の手に一様に行き渡った日用雑器としてではなく、シマ共同体内の政治権力の中心性に関わっていた遺物とみたならば一つの予察はできるだろう。それはトネヤとミャーの周辺が、中世相当期に何らかの中心性を保有していたが、後に続く琉球王府の支配、そして薩摩藩政下の近世期を経て近代に至る過程で失われていき、民俗誌に現れてくるような祭祀的中心性のみが、その空間に継承されてきたとする見方である。

この観点から民俗空間をみつめたとき、これまでの民俗学の研究蓄積にみえるシマ空間の語彙説明は もう一つの読み方が迫られるだろう。

(1)「グジ」呼称の語源について

その焦点はトネヤとグジにある。これまで民俗研究によるトネヤの語彙は、昇曙夢が提出しているように「里の刀禰」がすなわち里の長を意味することから、宗家としての性格も含め、その長の住居の意味として理解されてきた(注3)。この説についての異説反論の提出は過去に無く、定説的に今に指示されてきたといってよいだろう。

グジの語彙についても、トネヤの語彙理解の場合と同じく異説はない。多くは小野重朗が「男神人はグジ、グジヌシュといい、名称は宮司と関係があると思われる」と述べていることに代表されるように、「宮司」の解釈漢字が当てられて表記されてきた(注 4)。また、それは近年の研究者のみならず近世文書の表記にもみえ、1805年から三年の間、大島代官を勤めた本田孫九郎親孚による「大島私考」には「祭日ヲ用ルモノ能呂久米 $_{4}$ 大神 $_{5}$ ナリ其時祭ニ與ル男ハ $_{5}$ 2司ナリ $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{5}$ 1 $_{6}$ 1 $_{6}$ 2 $_{6}$ 3 $_{6}$ 3 $_{7}$ 3 $_{7}$ 4 $_{7}$ 5 $_$

「宮司」とはいうまでもなく神社神道に関わる神職のひとつであって一社の長をさす呼称であるが、 実は、それがノロ祭祀の語彙に含まれている理由について説明を試みた論考や語彙由来を説く決定的根拠を示した史料の提示は見当たらない。グジ語彙を神社神道の影響を受けた呼称とするならば、これまで記録・考察されてきたノロ祭祀にみる神観念から祭祀具にいたるまで、研究史上で神社神道の影響が指摘されていそうなものであるが、私見の範囲ではそれも見つけることができない。察するに、その音の相似する響きに加え、男性が務めている点や民衆の最前線で神と接触するという点において神社神道の宮司と通じることから、特に説明されるまでもなく「宮司」の表記が当て字されて用いられてきた感がある。

グジの語彙由来を漢字表記の「宮司」にみるのであれば、奄美諸島への神社神道の流入時期と過程を

踏まえた上での検討が必要であり、瀬戸内町一帯で神社の管理者を「宮司」ではなく「シャモリ(社守)」 と呼んでいることとの差についても、今後言及されていくべきだろう。

これまでの神社史研究では、奄美諸島への流入は時期的にさほど古いものではないと考えられている。 奄美諸島の神社の創建年代の類型化と考察を試みた薗田稔は、〈英雄祀霊〉・〈貴種慰霊〉・〈分霊勧請〉・ 〈国家祭祀〉の四つの類型をあげ、うち最も古い創建年代(琉球服属時代後期~17世紀)を伝承する英雄祀霊型の神社が、実際には近代に始まっており、為朝・平家が関わる貴種慰霊型の神社については、 伝承年代が12、13世紀までに遡るが、確実な歴史年代は薩摩藩政下の時代、多くは19世紀であること を指摘している。また、分霊勧請型についても近世期に広く分布しはじめているという(注6)。

このような研究レベルから奄美諸島への神社流入を藩政時代以降とみるならば、グジ呼称の由来である「宮司」語彙は藩政時代以降の比較的新しい語彙という見方が強い。もちろん、16世紀以前の琉球王国下にあったノロ祭祀主導の時代に、神社の信仰形式の流入とは別の次元で「宮司」語彙のみが奄美に流入していたという想定も即座に一蹴することはできないが、現段階で

のその証明は難しいだろう。

グジには「宮司」の他にもうひとつの表記がある。加計呂麻島・俵のミャーの一角には山川石製のゥボツガナシともよばれる石塔碑がそれである。正面には「大神郷司 月真柏子」向かって右面に「元文五庚申天十二月十四日」、左面に「秋目 平清七 表村 喜志智」と刻まれている。裏面に文字はない。この石塔を単純に墓とみるには、亡くなった人物の名と行年が不明である点から一考を要する。秋目の出身者と俵村の者が連名で碑を建てている理由もまた不明である。秋目とは薩摩半島南端の坊津の村名である。この石が山川石であることからすると、平清七なる人物はその石の調達に関わった者であろうか。喜志智についてもいかなる人物か詳細は不明である。



184 俵のゥボツガナシ

筆者はこの正面の「郷司」表記を「グジ」と読むものとみる。大島南部 の古志に「グジ墓」と伝える自然石を神山の麓に祀ってあるように、俵でもグジ墓と呼ぶ自然石をこの 石塔と向き合うように祀ってある。それは俵に二つのアシャゲと二人のグジがいたことと関係があるか も知れない。

この墓碑の「郷司」表記を「郡司」に同じと考えると、藩政期に七島とよばれた、奄美大島の北に連なるトカラ列島各島に置かれていた「七島郡司(シチトウグンジ)」の呼称が想起させられる。この秋目出身者が交易従事者として関わっていたのであれば、「七島郡司」のことは知識として持っていたとみるべきだろう。

「グジ」と「グンジ」、その音の相似から関連性にも一応ふれておくことにしよう。「七島郡司」とは、トカラ列島の島々に置かれた首長=郡司の総称である。紙屋敦之の研究によれば、その初見は 1718(享保三)年で、琉球国王が「琉球国司」と称することが決定されたことに対応するものとして、七島が琉球の属島であることが否定されて日本の属島として位置づけられていく 17世紀~18世紀初の過程に設置された島津藩の支配制度と説明されている。「七島郡司」呼称由来について紙屋敦之は、「旧記雑録」にある建武元(1334)年には黒島に黒島郡司が置かれたという記事について、それが七島郡司のモデルとなったことは考えられるが、その頃から七島にも郡司がいて、それが近世に至ったとは考えがたいとの見解を述べている(注7)。

この歴史学の指摘からすると、シマの長としての性格の一致から、たとえ奄美に「郡司」という役人制度がなかったとしても、民間レベルの語彙移入の可能性を見て、グジ語彙由来を「郡司」に求めたとしても、やはり「宮司」同様、それが近世期からのもので比較的新しいという見方となってくる。

(2)中世相当期の「グジ」像

奄美諸島のノロ祭祀は、琉球王国の祭祀形式の中に取り込まれていたために、沖縄本島周辺地域に通じてノロ・オボツ・イベ・アシャゲ(アサギ)といった祭祀語彙や祭祀具に共通点が多く認められるが、不思議なことにグジという祭祀語彙は沖縄県域に認められていない(注8)。しかも、奄美諸島内においてもグジ語彙は全域的ではなく、奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島一帯にのみ色濃い分布をみせている特徴がある。

こうした語彙分布を薩摩藩が琉球王国に侵攻した 1609 年を分岐点に、それ以前と以後の奄美諸島への神社神道の流入など信仰生活をめぐる状況変化の結果とみる大まかな分布解釈の読みをとるのであれば、ここでもグジ呼称が近世期以降の新しい呼び方という見方ができる。

しかし、一考すべき史料は存在する。琉球王府より奄美諸島にもたらされた辞令書である。加計呂麻島・須子茂に伝えられた辞令書を保有してきた池田家は、トネヤの管理者として代々グジを務めてきた。ミャーと隣接して立地する同家には、辞令書と共に完型の類須恵器(1点)が伝世され、その敷地跡からは本報告書にあるとおり青磁片が表採されている。

その須子茂辞令書は、重複した部分を整理すると全三通から成っている。うち、高良倉吉が「得分規 定型辞令書」と分類する範疇に含まれる「ネタチ宛辞令書」中には、「ネタチ」の出自を記した「すこ ものくちのうまが」との一文がある。高良によれば、「瀬戸内西間切の須子茂の《くち》と呼ばれる人 の《うまが》、すなわち孫」と意訳されているが(注9)、この「くち」が人名ではなく、「グジ」である かどうかは一考を要する。

須子茂文書には系図が一枚含まれているが、そこに三ヶ所みえる「袮立」を「ねたち」と読むと、辞令書の通りその祖父の代に「宮司」の名がみえる箇所がある。この「宮司」が「くち」のことであろうか。須子茂辞令書は原本ではなく印影から写しであることは前記の高良倉吉が指摘している。その写しが行なわれたのがいつ頃であるかによっても、「宮司」がノロ祭祀に関わる男性神役のグジか、女性であるノロの人名に後に当て字されたものか判別が左右されるところだろう。この点は歴史研究者の見解を待ちたい。

辞令書のうちノロ関係文書の形式では、肩書きを注記する箇所に「元のノロの《妹・子・姪》某」と 先代のノロとの血縁関係が相続の具体的実例として出自が明記されているとする山田尚二の指摘から すると(注 10)、まず、「くち」をノロとみることが無難であろうが、注意はしておきたいように思う。「く ち」がシマで地位が高い人物であることは疑いないであろう。

奄美関係の辞令書は高良倉吉によって 29 点がリスト化されており、それを参照すると(注 11)、王府からの辞令が祭祀を主導していたノロと役人層(大屋子・掟・目差・里主)に限定され、辞令発布対象者にグジ呼称が見当たらないことがまずは確認できるので、本稿の段階では、前項で記した状況を含めてグジ呼称は近世期以降の呼称という見方をしておきたい。

そのように考えると、次に、グジ呼称以前のトネヤ居住者と王府任命による役職とがどのような関係にあるかが焦点となってくる。短絡的に直結させる見方は危険だが、トネヤで伝世されていた須子茂辞令書の中に「瀬戸内西間切の西掟職叙任辞令書」が含まれていたことに、トネヤの主が掟役を務めてい

た時期があったとの可能性をみることはできないだろうか。それは、これまで知られている29点の辞令書全てについても、どのような経緯でどの家柄で伝世されてきたかについても整理検討したのちに述べるべきことでもあろう。

琉球王国下の奄美の掟職の像を、山田尚二は「村に一人いる下級の役人とされるが、当時は、掟大八目や掟佐武良金兄弟の武勇伝説で語られるように、土豪の性格をもっていたとも思われる」と述べ(注12)、藩政時代にも存在した掟と比べるとまだ権力レベルが高かっただろうとみている。

ここでいう「土豪」の範疇にトネヤに居住していた者も含めて考えることはできないだろうか。奄美諸島が琉球王府に統治されていく過程で、各シマの「土豪」に掟職等の役職を与えることによって、王府勢力下に組み込んでいったのではないだろうか。このような考え方は、『名瀬市誌』の「第一尚氏の奄美への支配浸透に、部落への掟配置という末端支配網の強化を必要としたことは同然であろう。(中略)里主と掟のどちらが先に登場したかを語る史料はない。おそらく、有力なアジが、有力な根人や、首長、または弱小アジを服従させたとき、これを里主に封じ、自己直轄地の部落には掟を配置する、という形で、政治社会は出発したのであろう」との見方に、骨格として相違するものではない(注 13)。

これまで民俗学によって抽出されてきたトネヤの要素は《宗家》と《祭祀》の中心性に関わる部分であり、また、グジは神役の一員として近年の報告書に記されてきた。しかし、小野重朗が実際の祭りの調査観察から、グジが「ノロと相対する場所に座をしめる」と記している点をあえて重視するならば(注14)、祭場でのグジの座に、本来、トネヤの主がシマ人を代表して神をもてなし、神からの祝福や幸、豊年の約束を受けていたことの残像をみることもできよう。そのように考えると、加計呂麻島のウムケー・オーホリにみる、神を海の彼方から迎え、また送りだす祭が、アシャゲではなく、トネヤで行なわれていたことも、その辺に起因してくるだろう。

トネヤが共同体を代表する長の住居であったとみるならば、同時にそこには《政治権力》の中心性の存在も示唆されてくる。中世相当期、琉球王国支配以前のトネヤとグジの様態は、シマ内において《政治権力》・《宗家》・《祭祀》の三つの中心性を有していたものが、その後の琉球王国と薩摩藩の二度にわたる支配層の交替と役人制度の変革によって《政治権力》の中心性を失っていったが、トネヤの《宗家》としての中心性は、不動の聖性として保持継承されたために、《祭祀》の中心性は近代に至るまでそこに固定され続けたのではないだろうか。それが、祭祀空間が遺物散布地であることへの本稿の予察である。

(3) 「ミャー」の時空

本報告書にみるとおり、トネヤと並んでミャーも中世相当期の青磁片・類須恵器片が表採される確率 が高い空間であるが、その空間の履歴はどのように考えればよいのだろうか。

ミャーという語彙の由来については、宮良当壮「ミヤ(宮)の原義に関する研究」をその嚆矢の論考としてあげられる(注 15)。宮良は日本語としての「ミヤ(宮)」の語彙生成をめぐり、昇曙夢が記した加計呂麻島のミャーの記述をふまえて琉球列島全体の広場を示す語彙を提示したのち、「庭」がミヤの原義であるとして、「「ミヤ」と云う言葉に広場の意味の存することは明らかである。而してこのミヤ(広場)に神祭を行なう神殿を設けた為に、その建物を「ミヤ」と称したのであろうと考へる」との結論に至っている。

一方、加計呂麻島・諸鈍出身の金久正のように、「ミャーはもちろん「みや」(宮)のなまりで、フンニャはウフミヤ(おほみや=大宮)のなまりで、「おほ」は美称であり、マーはミャーの再転音である。

(・・・中略・・・)ミヤが本来この空地を意味したのではなく、この空地に立てられたほこら(祠)を指したも のである」と、ミャーの語源を「宮」に求める見方もある(注 16)。金久正がここでいう「祠」とはアシ ャゲを比定したものとみられ、後段に引用する『南島雑話』中の記述を意識した見方ともいえよう。

これらミャーの語彙由来が「庭」と「宮」の二つの間で揺れる中で、中世相当期の原像はどちらに求 められるだろうか。前項のグジをめぐる仮説を元に、琉球王府支配下以前の中世相当期にトネヤがシマ の《政治権力》・《宗家》・《祭祀》の中心性を備えていたとみるならば、そこに隣接しているミャーは、 本来はトネヤの「庭」であったとみるのが妥当ではないだろうか。ミャーには祭祀施設であるアシャゲ が立ち、聖地性をともなっていることからすると、実質は「宮」の機能も有した「庭」であっただろう。

祭祀空間としてのトネヤの「庭」については、すでに伊藤好英が注目している。伊藤は、現存する琉 球列島のアシャゲ(神アサギ)の立地位置を総検討したうえで下記①~③に類型化し、「結局、庭あるいは 広場を伴っていることが、〈アシャゲ〉の一つの共通の性格であると言えよう。そしてこれらの〈庭〉 は〈アシャゲ〉と共に祭りに使用されているのである」と述べている(注17)。

- ①御嶽の中にある場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大宜味村謝名城(根謝銘グシク)、国頭村比地(小玉森)、同村 辺土名(イチフク森 城嶽)、同村真喜屋(真喜屋の嶽)など。
- ャゲ、久高島のアシャゲなど。
- ③根屋(村の宗家)やノロ家などの旧家の庭にある場合・・・・・・・伊是名島の各村落のアシャゲ、加計呂 麻島嘉入のグジモトのアシャゲなど。

伊藤は、トネヤとアシャゲの二つの祭場でそれぞれ祭りが行なわれていたことは、本土にみられる「本 殿の儀」と「庭の儀」のようにもとは一連の祭りで、同日に家の中と庭で行なわれていた祭祀ではなか

ったかと考えている。そして、本来は宗家であるトネヤの家と庭で祭りは 行なわれていたのではないかとして、上記類型の③に古い姿をみているの は興味深い。ミャーが本来はトネヤの庭であったとの見方に通ずるといえ よう。

また、かつての土豪を示す語彙としては、トネヤの主よりも類例は少な いが「按司」が知られている。名瀬市小湊の「按司屋敷」には隣接して 「マー」とよばれる広場があり、十五夜行事の儀礼で重要な空間となって いることは、トネヤとミャーの空間関係に近い。「マー」は「ミャー」の 音転で同じ意味であろう。「按司」の住居跡と伝わる場所もこのような観 点から再考していく必要があるだろう。

ミャーの古い姿を「トネヤの庭」とみるならば、そこに中世相当期の 類須恵器片・青磁片が散布している意味は、トネヤにそれらが散布して いる理由と同じに考えられる。

祭祀空間の履歴を通史的に理解していくためには、池浩三のアシャ ゲ研究にみるように、かつてのアシャゲが祭りの後に崩されて再び祭りの 際に築かれるという、祭場の仮屋性を示唆する民俗例があることにも注意 をはらっておくべきだろう(注 18)。アシャゲを奄美と沖縄に同時発生的 に誕生した祭場ではなく、琉球王国から奄美に持ち込まれた公儀の祭祀形 式のひとつとしてみるならば、考古学の発掘調査の進展によっては、アシ(隣接する中央宅地が「按司屋敷」)



185 伊是名島 宗家の庭の 神アサギ(仲田)



伊是名島 宗家の庭の 神アサギ(勢理客)



名瀬市小湊「マー」の広場

ャゲの建て替え頻度、位置変遷、仮屋性の真偽について何らかの見方が示されてくるのではないだろうか。柱穴の状況等を元に検討が加えられていくことを期待したい。

(4)「オドン」の時空

聖地的広場をさしてミャーとは呼称されずに「オドン」、あるいは「ウドン」とよんでいる例が、瀬戸内町では手安と勝浦にある。双方とも海岸近くに位置する広場である点は、名瀬市港町の「ウドンバマ(御殿浜)」、与論島茶花の「ウドノス(御殿の後、御殿の洲)」の地名のあり方と共通する。また、笠利町辺留城の「オドン地」も同系呼称である(注 19)。これらは『南島雑話』中にみえる「於頓」と無関係ではないだろう(注 20)。



188 手安のオドン

美弥(ミヤは宮也)

於頓 能呂久米の神を祭る場所。一間切に一ヶ所、間々茅を以て作り、広さ十枚敷の木屋有。多く如図。卒(塔)婆に似たる物、一、両本立つ。卒(塔)婆にあらず、ヒョウフンと云う。白木作り、文字なし。東間切伊須にて見処如是。於頓に屋を造り、美弥は祭すんで直にとりくづすなり。

名越左源太によるこの記述は、当時、各シマに存在したミャーの在り方を典型的な事例として記したものではなく、特異な例として出会った「オドン」を記したものとして読むべきであろう。池浩三は、この記述をめぐって、「「於殿」とは「御殿」のことで、やはり同書の「神小屋は八畳敷位」という記事の「神小屋」と同一のものであろう(注 21)」とみているが、筆者はむしろこの「於頓」を広場呼称の記述ととらえることが妥当と考える。

「オドン」語彙が、琉球王国域で「王子、按司の家、またはその人をさす敬称」とされる「御殿(ウドゥン)」に通じる語彙であることからすると(注 22)、これらの広場が、かつて琉球王府による奄美諸島支配に関与していた場所とも考えられ、支配に関わる何らかの施設があった可能性もあるだろう。

名越左源太が「一間切に一ヶ所」と説明している点を、仮に、池浩三の読み通りに「神小屋」であったとするならば数が少なすぎるといわざるをえない。「神小屋」、すなわちアシャゲであるならば、もっと全域的分布を示していたはずである。「間切」語彙が本来は琉球王国下の区画呼称であったことからすると、「オドン」が琉球王国の奄美支配に伴って要所に設置された点的な分布であってもよいだろう。

瀬戸内町域において「オドン」が伝承されているのは、筆者の知るところでは勝浦と手安のみである。 伊須の「オドン」については、すでに現在の聞取調査では耳にすることができなかった。伊須と勝浦は 距離が近いが、伊須湾の良港としての重要性から、いずれかの場所に琉球王府の奄美支配にかかわる要 所が設置されていた可能性はないだろうか。また「一間切に一ヶ所」とは概括的な表現であって、本来 は海上交通上の優位地形に沿う配置であった可能性にも今後注意をはらっていくべきだろう。

中世相当期の土豪が居住していたトネヤの庭(ミャー)が、琉球王国下に入ってのち、そこに支配に伴う家屋施設が設置されたことで「オドン」と呼ばれるようになったと仮説的に考えると、加計呂麻島・諸鈍の金久のトネヤ敷地隣りを、ナングモリの横暴を鎮圧するためにグリャバルが助けを求めた琉球軍が駐屯した地と伝えられていることも、勝浦の「オドン」がトネヤの庭的な位置にあることを考えれば、あながち荒唐無稽な伝説でもないように思えてくる。

四、おわりに

本稿でふれた問題は、本格的な発掘調査の後に言及されていくべき性格のものであろうが、筆者のような民俗研究の立場からみて、祭祀空間の〈地下〉が明らかにされていくことは、これまで〈地上〉の慣行と伝承をめぐって議論してきた民俗学の研究蓄積が、絶対年代的な物証を元にした考古学による見解の元ではどのように符号し、また否定されるかというある種の期待感を隠せないことから、あえて予察としていくつか述べてみた。〈地下〉と〈地上〉の時間的連続性を説明するには歴史研究の見解が不可欠である。これまでの市町村誌にみる通史的奄美諸島の記述は、特に琉球王国下時代の記述おいて、その依拠しようとする史料の所在がいまひとつ不明瞭に感じる。今後の歴史学によるシマの内と外からみた実証的史料論による整理作業の後に遺物散布地の民俗空間は再考されるべきだろう。

【注】

- 伊藤幹治「沖縄の宗教人類学」(弘文堂 1980)
 クライナー・ヨーゼフ「南西諸島の神観念」(未来社 1977)
- 2. 高橋一郎・松原武実「加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧実久村編)」(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1998)、松原武実「加計呂麻島ノロ祭祀調査報告書(旧鎮西村編)」(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1999)
- 3. 昇曙夢「大奄美史」(原書房 1975) 132 頁
- 4. 小野重朗『奄美民俗文化の研究』(法政大学出版局 1982) 35 頁
- 5. 本田孫九郎親孚「大島私考」 奄美史料 2 (鹿児島県立図書館奄美分館 1972) 10 頁
- 6. 薗田稔「神社成立の奄美的類型」『人類科学』第30号(九学会連合 1978) 118頁
- 7. 紙屋敦之「幕藩政国家の琉球支配」(校倉書房 1990) 230~241 頁
- 8. 酒井卯作『琉球列島民俗語彙』(第一書房 2002) 420 頁
- 9. 高良倉吉「古琉球期の奄美における給田の移動―須子茂文書が内包する情報のスケッチ」「日文研叢書 12 日本文化の深層と沖縄」(国際日本文化研究センター 1996) 92 頁
- 10. 山田尚二「奄美における古琉球の辞令書について」『研究紀要』(鹿児島県立錦江湾高等学校 1988)19頁 24頁
- 11. 高良倉吉「奄美喜界島の古琉球辞令書について」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要第 10 号』(琉球大学法文学部 2004) 48 頁
- 12. 注7に同じ。4頁、10頁
- 13. 『名瀬市誌』(改訂名瀬市誌編纂委員会 1996) 253 頁
- 14. 小野重朗『奄美民俗文化の研究』(法政大学出版局 1982) 35 頁
- 15. 宮良当壮「ミヤ(宮)の原義に関する研究」『南島論叢』(伊波普猷記念論文集編纂委員会 1937) 138 頁
- 16. 金久正「増補・奄美に生きる日本古代文化」(ぺりかん社 1978) 18 頁
- 17. 伊藤好英「神と祭りの庭―アシャゲの考察を中心に―」『南島研究と折口学』(桜楓社 1990)12~18 頁
- 18. 池浩三「祭儀の空間―その民俗現象の諸相と原型―」(相模書房 1979) 95~100 頁
- 19. 『笠利町誌』(1973 笠利町誌執筆委員会) 118 頁
- 20. 名越左源太・国分直一、恵良宏校注『南島雑話』2 (東洋文庫 平凡社 1984) 100 頁
- 21. 注13に同じ。89頁
- 22. 『沖縄大百科事典』上巻 (沖縄タイムス社 1983) 303 頁

第2節 瀬戸内町における遺跡の立地について

鼎 丈太郎

瀬戸内町教育委員会では、平成 15 (2003) 年度から町内の埋蔵文化財詳細分布調査を 実施継続してきている。第1章調査に至る経緯でも述べたが、平成 16 (2004) 年度まで の埋蔵文化財分布調査の進行状況は、調査対象地区の約七割である。

現段階での調査結果から、瀬戸内町における遺跡の立地条件について、ある程度の傾向が存在すると考えられる。平成2 (1990) 年に鹿児島県教育委員会が『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書 II 』で立地条件の類型化を試みているが、今回の調査で、遺跡数が増加したこともあり、遺跡の立地について再考し、本節でまとめてみたい。

1 各時代の遺跡の立地

今回の調査で確認・再確認された遺跡は、全部で49遺跡にのぼる。瀬戸内町全体の遺跡の分布は、第3図瀬戸内町の遺跡分布図の記載どおりである。分布図を概観してみると、遺跡が瀬戸内町全域に広がっている事が理解できる。しかし、ほとんどの遺跡は中世以降の遺跡で、それ以前の遺跡数は少ない。そこで、時代により遺跡の分布がどのように変化するのか、縄文から近世までの期間をいくつかの時代に分け、各時代による遺跡の分布を確認してみたい。

先ず、時代をどのように区切るかが重要であるが、奄美諸島では、共通認識されている時代区分が存在していない。そのため、沖縄及び日本列島の時代区分を援用しているのが現状である。しかし、沖縄や日本列島の時代区分を直接使用すると、土器様相など様々な面で無理が生じてしまう。そこで、奄美諸島の土器様相及び対外交流において、特に相違が確認できると考えられる部分で時代を大別し、比較検討を行ってみたい。その際の時代名称は、時代を認識しやすい日本列島の時代名称を参考にして表記を行いたい。

<縄文時代相当期>

狩猟・採集の生活を行っていたと考えられる時代で、沖縄諸島と共通した特徴をもつ地域色の強い土器を使用している。瀬戸内町では、標識土器である嘉徳式土器が出土した、 嘉徳アサト遺跡(嘉徳遺跡)、条痕文土器が採集された渡連アンキャバ遺跡(安脚場遺跡)など、数遺跡がこの時代に相当する。

<弥生時代~古墳時代相当期>

日本列島では、稲作が本格的に開始され、国家の体制が整い始めた時代である。沖縄諸島では、前段階における特徴を継承している土器を使用しているが、奄美諸島では、在地土器が九州地方の土器の特徴を持つようになり、外来土器が認められるようになる。また、西日本を中心とした南海産大型貝製品(腕輪など)の盛行により、原材となる大型巻貝(ゴホウラ・イモガイなど)を介した交流が開始されたと考えられる。

<飛鳥時代~平安時代前期相当期>

文献史学の成果によると、奄美諸島にまで国家統治の影響が及び始めると考えられる時代である。この時代になると、南九州の土器の特徴よりも地域色が強くなり、奄美諸島と

沖縄諸島の土器様相が再び類似するようになる。奄美諸島では、この時代で土器の使用が終焉を迎えると考えられる。また、この時代、奄美諸島を中心として、螺鈿の原材であるヤコウガイの大量出土遺跡が見られるようになる。

<平安時代後期~江戸時代相当期>

日本列島では、国家領域が現在と変わらないほど広大になる。沖縄諸島では、琉球国が成立し国家の体制が整う時期である。そのため両国の中間に位置する奄美諸島は、常に国家領域の境界に位置することになる。

奄美諸島において、類須恵器の盛行する時期(平安時代後期~鎌倉時代)は、琉球国にも薩摩藩にも支配されておらず、むしろ、南西諸島の中心であったと考えられる。また、類須恵器と兼久式土器の製作技術の差は大きく、地元で発展した技術ではないと考えられる。以上のことから、対外交流や国家の成立・国家領域などの点で考えると、類須恵器の盛行する時期を別分類にするべきであるが、今節では南西諸島における国家成立の土台の時期であると捉え、類須恵器の盛行する時期もこの時代に組み込むことにする。

以上、土器様相や対外交流・国家領域などにおいて、時代を4つに大別してみた。それでは、実際に瀬戸内町の遺跡が各時代でどのように分布しているのか確認してみたい。

<縄文時代相当期>(第59図)

縄文時代相当期にあたる確認遺跡は、5遺跡である。遺跡の分布を概観してみると、5 遺跡とも瀬戸内町の東側に存在することが確認できる。また、すべての遺跡が外洋側に存 在し、海峡内では確認できない。

<弥生時代~古墳時代相当期>(第60図)

弥生時代~古墳時代相当期にあたる確認遺跡は、7遺跡である。其の内3遺跡は加工途中のゴホウラ貝殻のみの採集地であり、土器など年代が確認できる資料による時代設定ではない。徳之島町文化財保護審議会委員で工房海彩代表である池村茂氏のご教授によると奄美諸島でゴホウラが最も捕獲される地域のひとつが瀬戸内町であるとのことであった。また、ゴホウラは現在でも獲ることが可能であるが、殻が重く身が少ないため、現在の漁においてゴホウラを対象とする漁を行うことは考えにくいとのことあった。

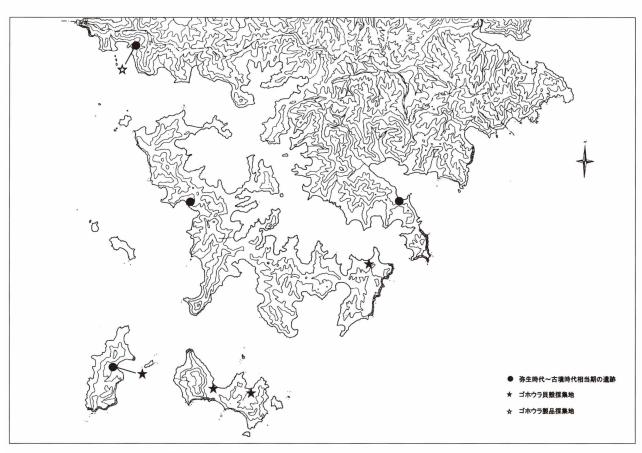
沖縄諸島においてゴホウラの集積を行う時代は、弥生時代~古墳時代相当期である。以上のことを考慮すると、ゴホウラを対象として漁を行い、荒加工を行う時代は、弥生時代~古墳時代相当期であると考えられるため、ゴホウラのみの採集地もこの時代の遺跡として扱う事にする。遺跡の分布を概観してみると、請島・与路島の両島にも遺跡が確認され、縄文時代相当期の遺跡とは違い、瀬戸内町の東側のみに偏るといった傾向はみられない。また、縄文時代相当期の遺跡が存在する地点では、弥生時代~古墳時代相当期の遺跡は存在しない事も確認できる。しかし、外洋側に遺跡が形成され海峡内に遺跡が形成されないという点では縄文時代相当期と同一である。

<飛鳥時代~平安時代前期相当期>(第61図)

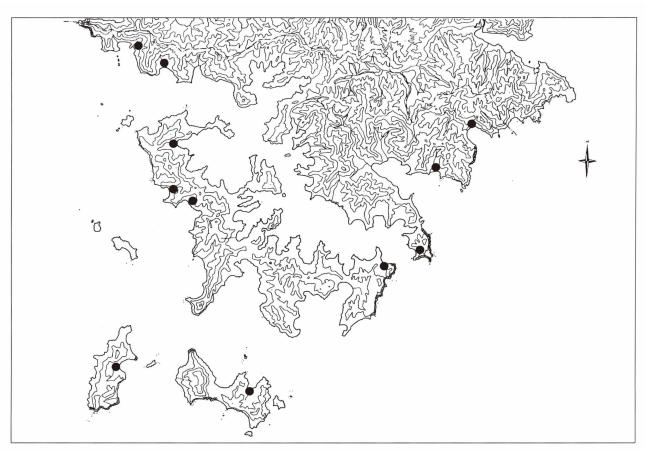
飛鳥時代~平安時代前期相当期にあたる確認遺跡は、11 遺跡である。兼久式土器やヤコウガイを採集できる遺跡である。弥生時代~古墳時代相当期にあたる遺跡と重複する遺跡は4遺跡である。遺跡を形成する条件が近いと考えられるが、この時代、遺跡を形成する一番の条件は、ヤコウガイが獲れるかどうかである可能性が高い。確認された遺跡の前面



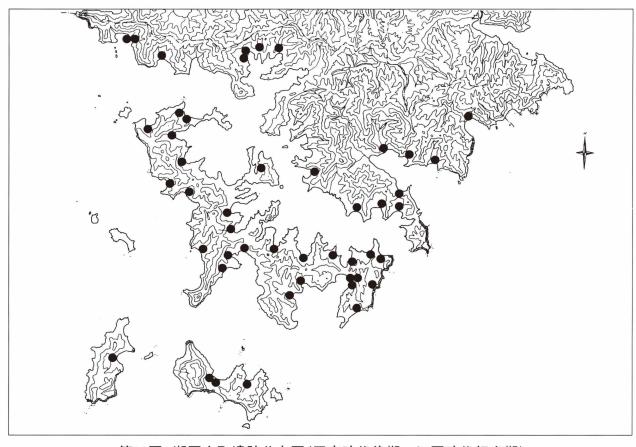
第59図 瀬戸内町遺跡分布図(縄文時代相当期)



第60図 瀬戸内町遺跡分布図(弥生時代~古墳時代相当期)



第61図 瀬戸内町遺跡分布図(飛鳥時代~平安時代前期相当期)



第62図 瀬戸内町遺跡分布図(平安時代後期~江戸時代相当期)

の海または、近くの海は現在でもヤコウガイが獲れる地域である。そのため、皆津崎のような狭い土地にも遺跡が存在すると考えられる。また、この時代も外洋側に遺跡が形成される傾向がみられる。

<平安時代後期~江戸時代>(第62図)

平安時代後期~江戸時代相当期にあたる確認遺跡は、47 遺跡である。奄美諸島では、在地の土器が使用されなくなり、類須恵器や陶磁器など、大量生産された焼き物が流通し始める時代である。この時代になると、外洋側、海峡内にかかわらず遺跡が形成され、現在集落が形成されている地域とほぼ重なると考えられる。また、この時代には集落の裏山や海に突き出た山に遺跡を形成する事例もある。

以上、駆け足で各時代の遺跡分布を概観してみたが、各時代により遺跡を形成する条件があり、その条件に合う地域を選択していることが解る。また、現在の集落とほぼ変わらない地域に住み着くのは、平安時代後期~江戸時代相当期であると考えられる。

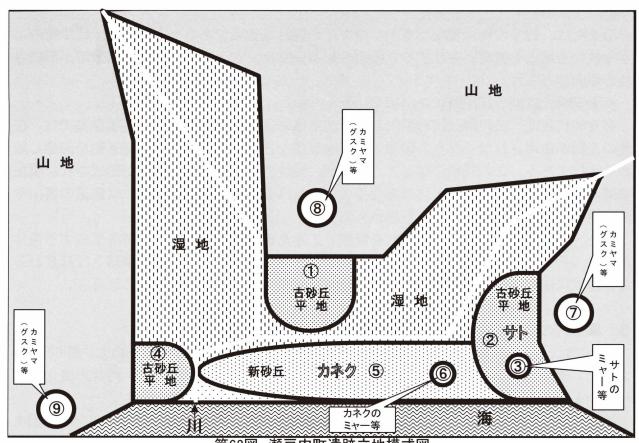
2 集落内の遺跡の立地

それでは、もっと狭い範囲での遺跡の分布・変化をみてみたい。そのために、第63図のような、集落の模式図を作成した。各時代により、どこに遺跡が立地し、時代の変化に伴いどのように遺跡の立地が変化するのか確認してみたい。

第63図 瀬戸内町遺跡立地模式図は、瀬戸内町の集落の特徴である、三方向を山に囲まれ、もう一方は海に面するという地形を模式的に表している。また、河川と河川が形成する沖積低地及び砂丘を入れ込み、瀬戸内町の集落で見られる地形の図とした。ただし、海峡内の集落では、カネクと呼ばれる砂丘が形成されることが少ない。その場合は、カネク(新砂丘)は存在せず、平地(沖積低地)が海に面していると考えていただきたい。

模式図の地形の違う地点の9箇所に番号をふって、各時代の遺跡がどの地点に立地する かをみてみたい。まず、各地点の地形の説明を行いたい。

- ① 集落の中央の山裾に広がる沖積低地及び古砂丘にあたる。周辺は湿地や川で囲まれている場合が多い。海には面していない。
- ② 集落の海に面している山裾に広がる沖積低地及び古砂丘にあたる。この沖積低地(古砂丘)の先に新砂丘が形成されることが多く、現在のサトと呼ばれる集落が形成されることが多い地形である。海峡内の集落はほとんどがこの地点に形成される。
- ③ サトと呼ばれる集落の中心にある広場(ミャー)や有力者の屋敷周辺の地点にあたる。カミ屋敷(トネヤ)・グジ屋敷・ミャー・カミミチなど、ノロ祭祀に関係の深い地点で、集落の有力者が住んでいることが多い。海からは離れていることが多い。
- ④ 地形的には②番に近いが河川で分断されているため、規模は②番より小さい。沖積 低地及び古砂丘にあたり、集落が形成されないことが多い。
- ⑤ カネクと呼ばれる集落が形成されている新砂丘にあたる。外洋側の集落のほとんどがこの地点に形成されている。後背に河川や湿地を控えていることが多い。
- ⑥ カネク集落に形成されているミャー及び有力者の屋敷周辺にあたる。③番と同じく ノロ祭祀や有力者に関係する事が多いが、集落に必ず存在するわけではなく、③番 ほど存在は確認できない。よって、③番が存在しないで、⑥番のみが存在するとい う事例は瀬戸内町では確認できない。



第63図 瀬戸内町遺跡立地模式図

遺跡名	縄文	弥生~古墳	飛鳥~平安前期	平安前期~江戸	遺跡名	縄文	弥生~古墳	飛鳥~平安前期	平安前期~江戸
1嘉徳アサト	1				26武名チノウラ				7
2嘉徳集落			(5)	5.6	27俵サト				2.3
3節子集落	2		⑤	5.6	28瀬相ムラウチ				2.3
4網野子サト				6	29西阿室集落				5.6
5勝浦集落				5.6	30花富ヒラタ	2			5.6
6伊須集落		(5)		5.6	31伊子茂ナカサト	2			2.3
7嘉鉄カイツ			5		32於斉集落				5.6
8蘇刈集落				5	33押角ムラウチ				3
9嘉鉄サト				2	34勝能サト				2
10清水集落				5 •6	35諸数集落				2.3
11手安集落				2.3	36生間ミタ				2
12古志サト				3	37渡連ムラウチ		(5)		5.6
13久慈イメ				2	38渡連アンキャバ	4		5	5.6
14久慈マエダ				2	39諸鈍トクハマ				5.6
15久慈集落				2.3	40諸鈍グスク				9
16管鈍集落			(5)	5 • 6	41諸鈍クリ				5
17西古見城跡				9	42諸鈍カネク				5.6
18西古見集落		⑤	(5)	5 •6	43諸鈍サト				2
19実久集落				5 •6	44野見山オオサト				2.3
20芝タンマ				1	45秋徳集落				2
21芝集落				5.6	46請阿室集落		(5)	(5)	5.6
22薩川集落			⑤	5.6	47池地アガンマ		5		5.6
23瀬武サト				2.3	48池地オーコーバリ				5
24阿多地イバタ			⑤	5.6	49与路集落		5	5	5.6
25須子茂集落		5	(5)	5.6					

表3 瀬戸内町遺跡立地一覧表

- ⑦ 集落の後背に存在する山にあたる。カミヤマ・コーエン・グスクなどの呼称をもつ場合が多い。今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認は、現段階では十分ではない。
- ⑧ 集落の奥に存在する山にあたる。前面に集落を抱えることはほとんど無い。⑦番と同じくカミヤマ・コーエン・グスクなどの呼称をもつ場合が多い。今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認はない。現段階での調査は十分ではない。
- ⑨ 海に突き出した山・岬にあたる。ウムグスクと呼称されていることが多いが、今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認は、十分ではない。

以上の9箇所に地点を分類した。平地で考えると、湿地の地点も番号を落とさなくてはならないが、現段階では遺跡が確認されていないので、今回は除外した。今後の調査で水田跡や、木簡や船などの木製品が出土する可能性はある。

では、実際に各時代により遺跡の分布に変化があるか検証してみたい。今回、確認した 49 遺跡の各時代の遺跡の立地を示した、表3瀬戸内町遺跡立地一覧表を外観してみると、 ここでも各時代により遺跡の分布に変化があることが解る。それでは、それぞれの時代ご とに検証してみたい。

<縄文時代相当期>

縄文時代相当期にあたる遺跡は、5遺跡存在する。この時代では、新砂丘は形成されていないか、形成途中であったと考えられる。そのため、新砂丘での遺跡は確認できない。この時代の遺跡の大半が②番の地点に存在することが確認できる。その他の遺跡も①番・④番の沖積平地及び古砂丘に存在することが確認できる。すべての遺跡が山裾に立地している事実は興味深い。

<弥生時代~古墳時代相当期>

弥生時代~古墳時代相当期にあたる遺跡は、7遺跡存在するが、この時代の遺跡はすべて⑤番に存在していることがわかる。

<飛鳥時代~平安時代前期相当期>

飛鳥時代~平安時代前期相当期の遺跡は、11 遺跡存在する。この時代の遺跡もすべて⑤ 番に存在する。しかし、この時代の遺跡は、弥生時代~古墳時代相当期の遺跡よりも遺物 の散布範囲が広大になる傾向がある。また、砂丘のトップより山側(湿地側)に遺跡が形成される傾向がみられる。

<平安時代後期~江戸時代相当期>

平安時代後期~江戸時代相当期にあたる遺跡は、47 遺跡存在する。この時代の遺跡は、 集落全面に存在する。しかし、ほとんどの遺跡が②番・⑤番(現在の集落が位置している 地点)の位置に存在し、遺物が特に集中して散布している地点は③番・⑥番にあたる。

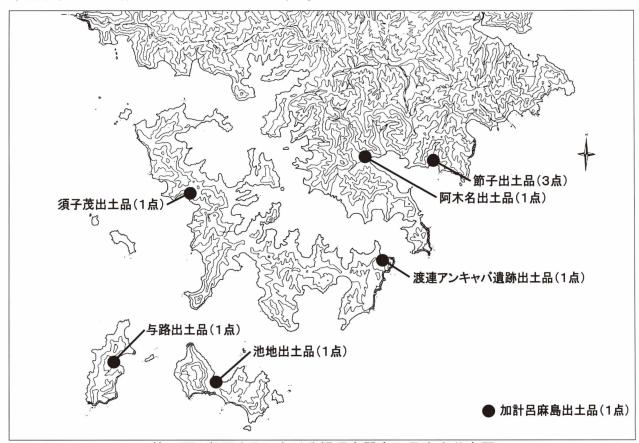
この時代の遺物に、類須恵器の完形品(準完形品)がある。類須恵器の破片に関しては、他の遺物と共に上記の位置で確認できるが、類須恵器の完形品に関しては、出土地点が様々で、集落内の出土地点について傾向を捉えることが難しい。おそらく、類須恵器の完形品は、他の遺物とは用途が異なると考えられる。そこで、類須恵器の完形品に関しては、別

に考察を行いたい。

以上のように、集落内の遺跡の立地も時代により変化があることがわかる。また、集落 内の遺跡の立地からみても、現在の集落の位置とほぼ変わらない地域に住み着くのは、平 安時代後期~江戸時代相当期にあたると考えられる。

3 完形品の類須恵器出土地点について (第64図)

徳之島で生産され、南西諸島全域に分布していた類須恵器(カムィヤキ)は、平安時代後期~鎌倉時代まで使用されていたと考えられる。類須恵器は、南西諸島全域に分布した最初の遺物であり、製作方法など色々な点で注目が高い遺物である。しかし、完形品(準完形品)は現在の所、ほとんど存在していない。完形品の類須恵器が数多く存在するのは、生産地である徳之島ではなく、奄美大島である。また、完形品として存在する類須恵器は、器高が15cm程度の小型の壺のみであり、瀬戸内町で確認できる完形品及び準完形品の類須恵器は、6点である。その他に、笠利町立歴史民俗資料館所蔵の加計呂麻島出土品が1点、名瀬市立奄美博物館所蔵の阿木名出土品が1点、残念ながら現在行方不明である与路出土品が1点あり、瀬戸内町出土の類須恵器は、9点存在している。瀬戸内町で発見された類須恵器完形品の数は少なくないことが解る。



第64図 瀬戸内町における類須恵器完形品出土分布図

最近、喜界島の山田中西遺跡発掘調査で類須恵器小壺と白磁椀を埋納した遺構が発見された。このような事例は、笠利町や名瀬市でも確認されている。亀井明徳氏の「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」によると、小湊集落から蔵骨器として使用された類須恵器小壺が指摘されている。また、池田榮史氏の「類須恵器と貝塚時代後期」でも、埋葬や

埋納の習俗について指摘されている。池田氏は、調査指導の際、瀬戸内町発見の類須恵器 完形品の出土状況や資料の状態(底部や頸部への穿孔)から、類須恵器完形品の埋葬・埋 納についての可能性を指摘された。また、高梨修氏も調査指導の際に、同様の指摘をされ、 類須恵器の分布が奄美大島の東部・喜界島に集中する事実をご教授くだされた。

興味深いことに平家伝承が色濃く残る地域と、類須恵器完形品が発見された地域が重なる傾向が見られる。よって、平家伝承と類須恵器完形品、葬送の方法に何らかの関係がある可能性が高い。

以上の点から、瀬戸内町の完形品の類須恵器について分布を確認すると、高梨氏の指摘のとおり、瀬戸内町においても東部に出土地が集中することが確認できる。また、聞き取りにおいて出土地点が確認できる節子集落の類須恵器と与路集落の類須恵器について出土地点を確認してみると、節子集落の類須恵器は、節子集落遺跡からの出土ではなく、節子川の下流の地点と上流の谷間の地点で出土しており、他の遺物や包含層らしき層も確認できず、類須恵器のみの出土であることが確認できた。節子集落で出土している類須恵器は、1点は底部に穿孔があり、残りの2点は頸部に穿孔をもつ資料である。与路集落の類須恵器の出土地点は、集落内のカミミチと呼ばれる道で、人骨とともに出土したとのことである。人骨は壺の中に納められていたのではなく、人骨のそばから類須恵器が出土したとのことである。

以上のことから、瀬戸内町で完形品として出土する類須恵器は、遺跡との関係性よりも池田氏の指摘する埋葬及び埋納に関係がある可能性が高いと考えられる。

4 まとめ

瀬戸内町で確認できる遺跡の立地傾向について、瀬戸内町全域と集落内の視点から確認してみたが、瀬戸内町で確認できる遺跡の立地は、各時代によって変化することが確認できた。それでは、瀬戸内町で確認できる遺跡を、各時代でまとめ立地傾向をみてみたい。

<縄文時代相当期>

遺跡の立地は、瀬戸内町の東部に集中する傾向がみられる。外洋側の沖積低地及び古砂丘で、山裾に形成される傾向がある。縄文時代相当期では、狩猟・採集を中心に生活を行っていたと考えられ、遺跡の立地条件として、山や海に近い平地であることが条件であったと考えられる。新砂丘は形成されていないか形成途中であったため、山裾の平地を居住空間に選択したのではないかと考えられる。

<弥生時代~古墳時代相当期>

遺跡の立地は、外洋側の新砂丘に形成される傾向がみられる。また、遺跡が立地する集落の海では、現在でもゴホウラが獲れる地域が多い。弥生時代~古墳時代相当期では、縄文時代相当期と同様、狩猟・採集の生活を行っていたと考えられるが、西日本で盛行した腕輪の原材である南海産大型巻貝(ゴホウラ・イモガイ)の需要が増え、対外交流が盛んになったため、ゴホウラやイモガイの生息域の近くに居住したと考えられる。沖縄諸島でゴホウラやイモガイの集積が確認されているが、瀬戸内町でも今後の調査により確認される可能性が高い。

<飛鳥時代~平安時代前期相当期>

遺跡の立地は、外洋側の新砂丘に形成される傾向がみられる。弥生時代~古墳時代相当期の遺跡よりも遺物の散布は広いことが多い。また、新砂丘の中でも、遺跡が形成されるのは、砂丘のトップより山側(湿地側)である傾向がみられる。奄美諸島では、飛鳥時代~平安時代前期相当期でも、狩猟・採集の生活を行っていたと考えられる。日本列島では、仏教が伝来し、螺鈿などの工芸品の製作が開始された。そのことにより、ゴホウラやイモガイの需要が減り、ヤコウガイの需要が増えたと考えられる。高梨氏が命名したヤコウガイ大量出土遺跡が、奄美諸島を中心に出現するのはこの時代である。瀬戸内町でも、この時代の遺跡は、ヤコウガイの生息域の近くに居住している傾向がみられる。瀬戸内町の遺跡では嘉鉄カイツ遺跡(皆津遺跡)がこの時代に相当するが、ヤコウガイの出土量は確認できない。しかし、今後の調査で、瀬戸内町でもヤコウガイ大量出土遺跡が発見される可能性は高いと考えられる。

<平安時代後期~江戸時代相当期>

遺跡の立地は、瀬戸内町全域に広がり、現在の集落と重なることが多い。また、遺物の散布は広範囲に広がるが、集中して散布しているのは、ミャー周辺及び有力者の屋敷周辺である。そのことから、現在の集落が形成され始めたのはこの時代からであると考えられる。平安時代後期~江戸時代相当期になると、奄美諸島は、日本列島と琉球国の境界地域となる。稲作の生活も始まり、外洋側だけでなく、海峡内にも居住空間が形成される。遺物の散布は広範囲におよぶが、特に遺物が集中するのは、ミャーや有力者の屋敷周辺である。陶磁器などの交易品の多くは、有力者が所有していた可能性も考えられる。また、類須恵器の散布地と青磁など中国貿易陶磁器の散布地、そして薩摩焼の散布地がミャーや有力者の屋敷に重なる傾向がみられる。このことから国家領域の変化により、有力者が居住していた地点が変化することはなかった可能性も高い。

<完形品の類須恵器出土地>

完形品の類須恵器の出土地点は傾向を捉えることが困難である。瀬戸内町では、類須恵器が使用されていた時代の遺跡と重なることがなく、出土地点も集落内や河口近く・谷と様々である。ただし、完形品の類須恵器は大きさがほぼ統一された小壺であり、埋葬や埋納の可能性が高いことが瀬戸内町の事例からも確認できた。

瀬戸内町で確認・再確認された遺跡について、遺跡立地の傾向をまとめてみたが、各時代により遺跡を形成する地点が変化することが確認できた。それは、各時代により生活様式や対外交流が変化し、それに伴い遺跡が立地する条件にも変化が起きたからであると考えられる。

今回、確認できた傾向は、奄美大島の南部地域で同様の傾向が見られるのではないかと考えられる。今後の調査の参考になれば幸いである。しかし、今回の調査は、瀬戸内町の集落及び集落周辺の約七割のみの情報である。瀬戸内町には、調査が完了しなかった残り約三割の調査地域と、集落は形成されていないが、小さな湾を形成し、僅少な平地を有する地点が無数に存在する。この未調査地域の調査を急がなければならない。また、山地における調査や、近代化遺産の調査など、まだまだ調査を行わなければならないことが山積みである。瀬戸内町の埋蔵文化財は、遺跡の確認が始まったばかりで、遺跡の情報収集など今後の課題は山積みである。

第6章 総 括

瀬戸内町教育委員会が平成 15 年度から実施継続している、瀬戸内町の埋蔵文化財詳細分布調査の平成 16 年度までの調査成果を報告してきた。確認・再確認の遺跡は、49 遺跡と数多くの遺跡が確認できた。今まで、奄美大島では、北部地域に遺跡が集中することが知られてきたが、今回の調査で南部地域にも多くの遺跡が存在することが確認でき、重要な成果があがったと考えられる。しかし、依然として調査対象地域の約三割が未調査であり、山地や小さな入り江など調査が必要であると考えられる地域も未調査のままであることを考えると、瀬戸内町の遺跡数はまだまだ増大すると考えられ、今後の調査が重要であることが理解できる。

今回、49 遺跡が確認・再確認されたわけだが、これらの遺跡は、地表面に散布している 遺物を採集する調査で確認している。踏査においては地下の遺跡を完全に把握することは 不可能であるため、今後は、新たな遺跡の確認と同時に確認できた 49 遺跡の確認発掘調 査が必要である。

今回の報告書が、開発事業と文化財保護の調整が円滑に行えるための基礎資料になると期待しているが、それ以上に埋蔵文化財の保護には、開発事業の早期把握が重要である。教育委員会では、今まで以上に、開発関係者と連絡を取り合える体制を確立していかなければならない。また、新たに確認された遺跡が多く存在するため、地域住民にも知られていない遺跡が多数存在する。地域住民への啓発普及も急務であり、体験発掘や学校の授業への出前講座などの取り組みも必要であると考えられる。

以上のことより、今回の調査によって重要な成果があったことが解るが、それ以上に課題も多く残されていることが解る。今回の調査は未調査地区を多く残しており、調査終了地域も表面に散布している遺物の採集のみの調査で、発掘調査は行っていない。今回の調査で、瀬戸内町の埋蔵文化財の調査が終了したのではなく、出発点であること理解しなければならない。

本格的な調査はこれからである。開発事業との調整を行いながら、確認された遺跡の啓発普及を行い、多くの遺跡の性格・範囲を確認していかなければならない。

謝辞

近年、瀬戸内町では、開発事業と埋蔵文化財保護の調整が増加し、埋蔵文化財保護や調査が年々重要となってきました。しかし、瀬戸内町では、埋蔵文化財に対する対応が確立されていませんでした。瀬戸内町では、埋蔵文化財保護の体制作成が急務になりました。その際、多くの方々に御協力いただきました。特に、鹿児島県教育庁文化財課の皆様には懇切丁寧な御指導と御助言をいただきました。おかげさまで行政資料整備や体制作成が格段に充実いたしました。厚く御礼申し上げます。

そして、ご多忙中にも関わらず、調査指導してくださいました琉球大学の池田榮史先生、調査指導だけでなく、埋蔵文化財の保護行政についても御教授くださいました名瀬市教育委員会の髙梨修先生、遺物の製作実験から、貝などの生息域まで幅広い貴重な御教授をくださいました徳之島町の文化財保護審議会委員の池村茂先生、先生方の御指導いただくことができたからこそ、瀬戸内町の文化財保護は貴重な一歩をしるせたと思います。また、調査協力してくださいました瀬戸内町文化財保護審議会会長の前田芳之先生、諸鈍シバヤ芸能保存会会長の上田伊津夫先生、遺物の整理に協力してくださいました名瀬市教育委員会嘱託員の清さつき先生、先生がたの御協力のおかげで調査・遺物整理を円滑に進めることができました。心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、今回の遺跡詳細分布調査を行う上で、瀬戸内町役場各課から御高配・御指導を賜りました。特に、瀬戸内町役場建設課の皆様には、埋蔵文化財の保護に御協力いただき、開発事業と文化財保護を円滑に進めていけるよう御協力いただいております。厚く御礼申し上げるとともに、今後とも御指導・御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

以上、瀬戸内町遺跡詳細分布調査は、多数の皆様方の御理解と御協力により成し遂げられたものであります。衷心より厚く御礼申し上げます。これからも調査を継続してまいりますが、今後とも御指導、御助言、御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

瀬戸内町文化財調査報告書第1集 瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書 2005年3月31日発行

編集・発行 瀬 戸 内 町 教 育 委 員 会 〒894-1592 瀬戸内町古仁屋船津23 印 刷 (有) 奄 美 共 同 印 刷 〒894-0021 名瀬市伊津部町21-14